

老人ホーム

苑 行 西

ぶんろく

Bunroku's Factory

この作品は、二〇〇二年六月にWEB公開した
「介護つき有料老人ホーム西行苑」を改題、加筆訂正したものです。

老人ホーム

西行苑

ぶんろく

Bunroku's Factory

SS

大野健次郎はようやく坂を登りきった。

こんなことなら、駅からタクシーに乗ってくるんだった。恨めしい気分坂を見返す頬を、春の太陽をたつぷりと含んだ暖かい風がなでていく。さんざん歩かせやがって、まだ、建物は見えてきやしない。入口はどこなんだ。

帽子代わりに頭に巻いていたタオルをはずし、汗をぬぐいながら見まわす健次郎の目に、満開の桜に縁取られた入口が見えた。

いま、その桜の下で車椅子に乗った老女と杖をついた老女が、手を宙にかざして、コロコロと笑っている。山肌を登ってくる潮風に吹かれて萼ごとくると回りながら落ちてくる桜を手でつかもうと、二人の老女は興じているのだった。健次郎がそばを通りすぎても老女たちは振り返りもせず、桜ひろいに興じていた。二人の笑い声に背中を押されるように、健次郎は「老人ホーム西行苑」の門をくぐった。

＊

両側に視線をさえぎるにはころあいの土壁が築かれた緩やかな坂道は、健次郎に組の慰安旅行で行った姫路城を思い出させた。西行苑が悪趣味な城もどきの建物じゃなきゃいいんだがと考えながら、右に左に折れ、二、三分歩いたところで、ようやく土壁が消え、芝生の広場にでた。そこに西行苑が建っていた。

山の緑を背景にした和風のたたずまいは、新築のはずなのに、時間の蓄積を感じさせた。それは外壁に露出した太い柱のせいかもしれない。子供のころに一度だけ連れていってもらった、父親の田舎の家を思い出させた。もちろん目の前の西行苑は、山奥の農家などではなく、金持ちの別荘か高級旅館といった風情だった。

駅から電話したときには、玄関から入ってよいということだった。玄関前には打ち水がしてあるのをみて、こりゃ本物の旅館だなと健次郎は思った。ということは、おれの仕事は、ヘルパーじゃなくて、仲居ってところなのかもしれないと覚悟を決めて、健次郎はインタホンを押した。

「今日からこちらでお世話になります大野健次郎です」

「はい」という声とともに、施錠が解かれる音がした。

建物の中は、外とは違う空気が存在していた。臭いもなく、暑いとも寒いとも感じない、いかにも人工的な香りのする空気で満たされている。

「やあ、大野君。よくきてくれました。歩いてきたのかい。坂はきつかったろう。まだ、送迎のバスが用意できてなくて。すまなかったね」

広い玄関ホールにみとれていた健次郎の目の前に男が現れた。短く刈りこんだ頭にデニムの作務衣、その下には水泳選手のように筋肉質の身体が隠されているのが良くわかる。四十は越えているだろうが、年齢の読みきれない男だった。一年前の面接以来だった。

「ホームの責任者の山添です。久しぶりだね。面接の時以来だから、一年ぶりかな」

「あ、おれ、じゃなくてぼく大野健次郎です。よろしくお願いします」

「こちらこそよろしくお願いします。さあ、まずは部屋に荷物を置きなさい。靴

はそのままでもいいから」

健次郎は足元のバッグを肩に掛けると、先に立って廊下を進んでいく山添の広い背中に従った。山添は廊下の突き当たりの壁に向かって歩いていく。山添が壁に手をかざすと目の前の壁が動いた。健次郎がびっくりしているのを期待するよう山添が振り返った。

「忍者屋敷みたいだろう。ここからが、事務棟とわたしたち職員の生活棟なんだ。この壁はこれであくんだ。あとで大野君にも渡すから」

山添の人差し指と中指の間には、カードが挟まれていた。

「この壁も鍵も、設計図にはなかったんだけど、私の希望でつけてもらったんだ。断っておくけど入苑者を排除するためじゃないんだよ。職員のためなんだ。ここは職住近接なんてもんじゃないだろう。おまけに仕事は二四時間休まない。自由に入入りできるドアだと、空間も時間もグジャグジャになってしまおうと思ってね。気が休まる時間や空間がないと疲れるから。壁なら向こうは仕事場、こちら側は自分の家といったふうに、心理的にも実際もけじめがつくと思ったのさ。まあ、

効果のほどはわからないけどね。さあ、部屋はこの上だ」

山添は階段を上っていく。健次郎が振りかえると、壁が静かに閉じた。

「六畳だからあまり広くはないけど。最低限必要だと思うものはこちらで用意しておいたから」

事前に居室は和室と洋室のどちらがいいかと聞かれたので健次郎は和室を希望していた。山添がドアを開けて促した。

「わー、すげえー」。

正面の窓の向こうは海と空だけだった。声を上げ、窓に走り寄った健次郎の背中に、山添が声を掛けた。

「氣に入ってくれたみたいでよかった。それじゃ、荷物を解いたら、一階の事務室まできてください。みんなに紹介するから。事務室は階段を降りて左の突き当たりだからすぐわかる。それから、これが部屋の鍵とロッカーの鍵。それじゃ待っているから」

山添が部屋から出て行くと、健次郎は振りかえって部屋を見まわし、深呼吸を

した。真新しい畳の香りが胸にしみた。窓を開けると、フワーツと草いきれが押し寄せてきた。鳥の声が耳に優しい。今朝まで住んでいたアパートは、窓も開けても隣の壁、陽など射し込まず朝か夜かも分からなかった。入って来る音といえば、ヒットチャートの一位から一〇位までが混ぜこぜになった音、盛りのついたネコの声、ごみをあさるカラスの鳴き声ぐらいだった。

あまりにも違う場所に來た事にいまさらながらに気づいて不安になった。健次郎はひとつため息をつくと、ロッカーに荷物をしまい事務室に向かった。

「こちらが、みなさんの仲間の一人、大野健次郎君です」

「大野です。よろしくお願いします」

健次郎がペコと下げた頭のでっぺんに向かって職員が口々に「こちらこそよろしく」と声をかけてきた。山添はあらためて自己紹介をしてから、横に立っている小柄な女性を指して、「こちらは西川絹江さん。副苑長といったところなか。きみたちケアスタッフのリーダーです。わからないことがあったら西川さんに聞いてください」

この女には見覚えがあった。一年前の面接のとき、山添の隣に座っていた。

西川の自己紹介につづいて他のメンバーが一人ずつ名乗りをあげていく。一年前の面接会場で会っているはずなのだが、誰一人記憶になかった。それはお互い様なのだろうが。この一年を思いやりながら、ぺこぺこと頭を下げつつけた。

「まだ、数人そろっていないけど、ここにるのがほぼ全員です。調理場のスタッフは後で紹介します。オープンまであと一週間、やることは山ほどあるから、覚悟しておいてくれよ。とはいっても、ほんとうに大変なのは、オープンしてからだ。それまでは、温泉につかって、美味しいものをたんと食べて、鋭気を養ってください」

「でも、もう入苑されている人もいますね。さっき、門のところに」

「ああ、吉田さんと秋元さんだね。あの人たちは入苑者じゃないんだ。この施設のモニターってところかな。使い心地をチェックしてもらって、直すべきところを発見するために来てもらっているんです。設計士のアフターケアのひとつだそう。うだ。なにせ、大野君も知ってのとおり、一週間後にやってくるお客さんは、恐

いお人ばかりだからね」

山添はそういうと、ウインクして見せた。ほかの職員を見ると、みんなニヤニヤしている。

そうなのだ。ここ西行苑は、全国の博徒、ヤクザが共同で建てた、ヤクザによるヤクザのための介護付き老人ホームなのだ。そして、山添は元ヤクザの坊主、大野も一年ほど前までは、暴力団の構成員だった。もちろんほかの職員もほとんどは大野と同じ境遇だった。

＊

西行苑がつくられることになったのは、関東を支配する大組織の跡目相続の披露目の席だった。

その席で客として招かれた関西のドンが、妻の母親が痴呆になって困っていると打ち明けた。それを聞いた関東の組織の組長が、今回の跡目相続の原因が、先代組長の痴呆にあると告白したことから、襲名披露の宴席は、一転して、ヤクザ世界の高齢化の話し合いの場所になったのだ。

いくら世間にたてつくヤクザとはいえ、不老不死であろうはずはない。世間様同様年をとって痴呆になるヤクザもいれば、病気で身体の自由を奪われるヤクザもいる。そうした老ヤクザの介護問題は彼らにとっても深刻であつた。いや、これによつたら、世間より過酷かもしれない。

まづとうに生きてきた人間なら、援助を求める手を上げれば、握り返してくれる手が必要である。しかし、上げた手の小指が欠けていることがわかると、介護サービ事業者が尻ごみをする、デイサービスに行っても、小指がないというだけで、ほかの老人から文句が出て排除される。ヤクザには年金をまじめに払いこんだ奴は少ないから、出世した一部の人間を除けば、有料の老人ホームに入居できる奴などいない——話だけ聞いていれば、世間一般の法事の席と変らなかつた。集まつたヤクザ衆はヤクザの老後はヤクザで考えようということですっかり意気投合した。そのあとは、とんとん拍子で、話が進み、西行苑がつくられることになった。

東京の奥座敷といわれる温泉地に土地が求められ、工事が始まつたのが、一年

ほど前である。

そのころ東京の繁華街を支配する組最下層の構成員だった健次郎が、そんなことなど知る由もなかった。

西行苑の鋤入れ式がおこなわれていたころ、健次郎は、組事務所で電話番号をしていた。ヤクザの世界に入って一年近くが経っていたが、自分はヤクザに向いていないのではないかと悩んでいた。ヤクザの向き不向きの境界がどこにあるのかわからないが、とにかく、ここは自分の居場所ではないと感じはじめていたのである。しかし、ヤクザからぬけでたところで、自分を受け入れてくれる世界があるのだろうかと不安に感じてもいた。

ごく普通のサラリーマンの家庭で育った健次郎がヤクザになった理由はかなり変わっていた。

学校でいじめられたこともなければ、いじめに加わったこともない。トイレで隠れてタバコを吸ったこともない。アイドルに熱中することもなく、スポーツに打ちこんだわけでもない。けんかなんてからきしダメだった。身長も体重も年頃

の平均。成績もごく普通。「普通」というのが、高校生のころまでに健次郎が手に入れたアイデンティティだった。同時に、「普通」が自分の居場所じゃないと強烈に感じていた。だからといって努力するわけでもない。頑張る——健次郎が一番嫌いなことだった。だから、努力せずに普通じゃなくなる方法としてヤクザになろうと決めたのだ。友人は口をそろえて、おまえはバカかと言った。

たしかにその通りだった。今の健次郎はそう思っている。なんとかかんとか暴力団にもぐりこんだものの、努力しない奴や口先だけの奴はこの世界でも嫌われ者の役立たずだった。結局、健次郎は、ヤクザになれないどころか、ヤクザのふりすらできずに、いまでは事務員といった呈であった。一日の大半を電話番号とお茶汲み、コンビにまでの遣い走りですごしていた。

そんな健次郎と西行苑との出会いは唐突だった。

組長の山本に呼ばれ、「これにいつてこい」といわれた。差し出された紙には「西行苑プロジェクト説明会」と書いてある。

「なんですか、これ？」

「つべこべいわずにいつてこい。俺に恥じかかせるなよ。ふけたりしたら承知しねえぞ」

逆らえるはずもなく、紙に書いてあったホテルに出向いた。留守番以外の用事を言いつけられたことがうれしくなかったといえば嘘になる。

指定された広間には、五〇人ちかい同類が所在無げにたむろしていた。男が圧倒的だったが、ちらほらと女も混じっていた。

まず、山添と名乗る男が西行苑プロジェクトについて説明した。それが自分になんの関係があるのか理解できたものは、健次郎を含めて一人としていなかったのではないだろうか。

しかし山添が「きょうは西行苑で働いていただくスタッフを選抜する面接会です。皆さんは、それぞれの組織から推薦されたかたがばかりですから、そのなかから、選ぶというのは心苦しいのですが、ひとつご容赦頂きたい」というに至って、健次郎は、ようやく、自分が送り込まれた理由を悟った。組を辞めるということなのか――。

愕然としている健次郎の周りのそこかしこから「冗談じゃねえ」という声があった。

しかし、今日この会場に送り込まれた理由はどうあれ、健次郎同様、組を背負ってきている以上、帰れるわけではない。「くそっ」と声を上げて、イスに深く腰掛け、顔をそむける程度のことしかできなかった。

面接が始まると、山添のほかにも、男が二人と女が一人加わった。男のうち一人は、頭を剃っていたので、組関係者かと思ったが、どうやら本物の坊主のようだった。

控えているときはふてくされていても、名前を呼ばれて前に出て行くと、皆、律儀に面接の受け答えをしている。「組を辞めたくないから、採用しないでくれ」と声を荒立てるものが誰一人いないのが、健次郎には不思議だった。おまえら、組から必要ないといわれたんだぞ、それに気づかないのか？ いっぱしのヤクザを気取っているけど、悔しくないのか？ おまえらみんな俺とおなじなのか？ そう言ってやりたかった。

一時間ほど待たされて、ようやく健次郎の名前が呼ばれた。面接官の前に座ると、出身や家族構成、構成員になってからの年数や、犯罪歴などを聞かれた。

「西行苑プロジェクトについてどう思う」と山添と名乗った男が聞いてきた。

「どうもこうも、今日はじめて聞いたので、なんのことかさっぱりです」

「もし選ばれたできそうかい」

「自信ないです」

「どうして、組長はきみを推薦したと思う」

「わかりません。組で一番若いからかもしれません。経験も浅いし、実績も少ないし」

そういうながら、健次郎は悔しくてたまらなかった。

最後に「君は自分がヤクザにむいていると思うか」と聞かれた。

「むいてはいないと思う。もつとも向いている奴なんていないんじゃないですか。みんな努力してヤクザになるんだと思う。生まれつきのサラリーマンってのは格好悪い響きだけど、努力してヤクザになって世間さまから生まれつきのヤクザと

いわれれば本望です」

健次郎はしばらく考えたあと、そう答えた。答えながら、もし面接に不合格になつて、組に戻ったら、自分になにができるだろうかと、考えていた。

数日後、電話番号をしていると組長に呼ばれた。

「健、おまえ、こないだの面接に合格したそうだ。たいしたもんだ。推薦した俺も面目がたつた。それで、次はここに行つてもらふ」と、パンフレットを健次郎の鼻っ面にさしだした。〈ホームヘルパー2級養成講座〉とあった。

「通っている間は、事務所には顔をださなくていい」

有無をいわせぬ最後通告だった。結局、自分はヤクザにはなれないんだと思つた。ほつとしてゐるのか、それとも悔しいのか、自分でも良くわからなかった。講習は、職業訓練校で行われた。三ヵ月毎日朝から晩まで講義をうけるはめになった。介護の基本から、入浴のさせ方、オムツの交換の方法、料理の基礎、簡易救命法まで徹底的にしこまれた。おまけに若くて、クラスで唯一の男だということ、組長にまでなった。

組の仲間に電話で話すと「出世したな」といつまでも笑い続けた。

講座のしめくくり、三日間の老人保健施設実習が組まれていた。

「それじゃ、大野さんは五階の特養へ行ってください」

言われるままに、五階に向った。

エレベーターのドアが開くと、老人がお辞儀をしてきた。こんにちはといって通りすぎようとした健次郎に、老人が小声で話しかけてきた。聞きづらいので、「えっ？　なんですか」と耳を寄せると、いきなり老人は「なにすんだあ」と大声を上げて健次郎の頬を叩いた。びっくりしている健次郎に、老人は「バァカ」と言い残して、ぺたぺたと歩き去った。

「大野さんですか？　いきなりでびっくりしたでしょう。大丈夫ですか。まずはじめに、あの人には気をつけてというのが、ここでの注意事項だったんですが、まさか、エレベーター前で洗礼を受けるとは思わなかったもので」

「あ、はい。びっくりしたけど、大丈夫です」

「わたしは、このフロアーの日勤のリーダー山越です」

「大野です。よろしく願います」

「じゃあ、まず、仕事の概略を説明しますから、こちらへ」

フロアーを見渡せるガラス張りの事務室で山越と向き合った。

「ここは、特養のフロアーで、現在、三人のかたが入居されています。男性は五人です。程度の差はありますが、ほとんどかたが、痴呆症状を示しておられます。さっき、大野さんを殴った人は、高橋さんと言って暴力的な人ですから、注意してください。ほかには、実力行使に出る人はいませんが、罵詈雑言を浴びせ掛けてくる人もいるので覚悟しておいてください」

山越は、ハキハキと説明していく。彼女の肩越しに、動きの緩慢な老人たちが見えている。

「仕事はそのつど、フロアーのスタッフが指示しますからそれに従ってください。それから、車椅子への移動などの身体介護は、単独ではやらないでください。大野さんの実力を疑っているんじゃないくて、もしものことがあると、あなたに迷惑がかかりますから。なにか質問はありますか」

「とくにないです」

その日の日勤スタッフに挨拶が済むと、しばらくその辺をぶらぶらして、皆さんに顔を覚えてもらってください、といわれた。気難しそうな男性や、視線が合わせられない人は避けて、テーブルを囲んで談笑している女性たちに健次郎は近寄っていった。

「こんにちは。今日からこちらでお世話をさせていただきます、大野です。よろしく願います」

「こちらこそ。ところで、朝ご飯はまだかしら」
時間は十時を回っている。いくらなんでも食べていないということはないだろうと思っていると、別の一人が「私は食べたよ」という。もう一人も食べたとうなずいている。

「わたしは食べていないのよ。もう四ヶ月も食べていないの。ここは、見た目は綺麗だけど、ひどいところよ。なにも食べさせてくれないのだから」

ようやく健次郎にも事態が飲みこめた。

「四ヶ月も食べていないわりには、お元気じゃないですか」

「嘘おっしゃいな、あなた。こんなにガリガリにやせちゃっているじゃない」といって、両手を差しだした。たしかにやせてはいるが、栄養不良ではない。

「もう少しでお昼だから、時間になったら、真っ先に呼びにきてあげるからね」という健次郎に「約束よ」とすがるように言う。

しかし、健次郎は自分の甘さを思い知った。昼食までの二時間余り、この婦人とは目が合うたびに「ご飯はまだ」と聞かれる羽目になったのだった。

イスにじっと座ったまま動かない老人にも、奇声を上げて歩きつづける人にも、反応がある無しにかかわらず、挨拶をして回った。健次郎を殴った老人には、こっちへ来いと手招きされたが、遠くのほうから手を振って挨拶をした。健次郎が畏に引つかからないと気がついた老人は残念そうにうなだれた。ざま見ろと健次郎は思った。

「大野さん、ちょっと手伝ってください」

フロアー付きの看護婦に呼ばれた。

「このかた、山口一恵さんと言いますけど、便秘が続いているので、これから浣腸します。本人がいやがるので、押さえていただきたいと思います。わたし先に行つて準備しますから、トイレまで山口さんを連れてきてください」

健次郎がトイレに行きましようと言をかけると、山口は素直についてきた。トイレに入りドアを閉めると、山口は「こんなところに二人きりでいたら、みんなにしつとされるから」と出ていこうとする。たしかに、女性と一緒にトイレに入るというのは異常だ。

「山口さん、看護婦さんもいるから大丈夫ですよ」

「大野さん、山口さんの手を押さえていてね」と看護婦が言うので、健次郎は、山口の手をとった。看護婦は、「山口さん、いいねえ。若い男性に手握ってもらえて」などといいながら、山口のズボンをひざままで下ろして、尻を清拭している。そういわれた山口は、目の周りを赤くしている。いかに老人とはいえ、下半身を剥き出しにした女性をどう扱ったらいいいのか、健次郎はうろたえてしまった。

「ちよつと痛いじゃないの。何するの。みんなの所に帰る」という山口を押さえ

つけるように健次郎は握っている手に力を込めた。看護婦が、「はい、おしまい。大野さんはもういいです。ありがとう」と言ったときには、背中にじっとりと汗をかいていた。山口は何もなかったように便器に座っている。浣腸が終わってトイレから出てきても、手を取り合って浣腸をしたことなどすっかり忘れている様子だった。

このフロアーにいる人たちは、ボーっとしているか、歩き回っているか、ご飯を食べているか、そうでなければテレビの前に座っているかのどれかだった。言語機能が失われていない限り、会話を楽しむこともできた。

しかし、彼らや彼女たちの「いま」は、昨日であり、明日でもあった。目の前にいる人がすべてバラバラの時間に生きていた。明日次が二〇年前で、その次がおとといだった。時間はカレンダーのとおり規則正しく流れると信じている健次郎にとっては「一回休み」や「ふりだしにもどる」があるすぐろくのような、時間の流れにつきあうのは戸惑いの連続だった。当の本人たちは、とまどっている健次郎を置き去りにして、ごく普通に瞬間的な会話を重ねていく。健次郎の存

在すらも、手の届く範囲にいるかぎり「元氣な若いおにいちゃん」として認知されるが、ちょっと遠くに離れると、「おまえは誰だ?」という目で見つめられている事に気がつく。一日目の実習時間の終わりを告げられた時には、脳みそが浮遊感するような奇妙な感覚にとらわれていた。

家に帰って気がついたのだが、バラバラの時間の中でも、食事の時間だけは一致していることだった。

二日目になると、時間の流れは、皆がバラバラなのだから、自分は自分の時間で参加すればいいんだと気がついた。実際、健次郎の信じている時間で話に参加しても、なんの不都合もなかった。

三日目は「じじばば体験」というコースだった。半身麻痺にされたり、車椅子に縛られたりして、老人の体験をして一日を過ごすのだ。介護を受ける側の気持ちを知るというのが目的だった。講習の冒頭、自分の待遇を決めるくじ引きをした。健次郎は、全身麻痺の設定で車椅子に乗せられた。しかも、講師の「この際だからおまけもつけちゃおう!」の一言で、言語障害が加わった。健次郎がいう

ことは、ほかのひとには伝わらないのだという。講習参加者の中で、もっとも重度の待遇になった。

実習が始まると、健次郎はオムツをはかされ、嫌というほど茶を飲まされ、車椅子に両手両足を縛られて、壁の前に放置された。

「トイレに行きたい」と背後を通りかかる施設職員の気配に向かって頼んでも「忙しいからちよつとまってね」といつて、そのまま放置された。何度か「待っててね。いますぐ来るから」といわれつづけ、ついに「ふざけるな」とすごんで見せたが、「いまいくから、ちよつとまってね」と、また放置された。まるで自分が、スーパーマーケットの入口で買い物をしているご主人の帰りを待っている犬のような心持ちになった。ことばが通じない設定だということを思い知らされた。

ようやく職員がやってきた。助けてくれるのかと思ったら、車椅子を窓際に移動し「みんなで散歩に出てくるから」と放置された。「俺も連れてけ!」とわめきちらす健次郎に向かって「行ってくるからねー、お留守番よろしく」とだけい

い残して、皆消えた。

小便がしたい。痛いほど膀胱が張っている。声をだしても誰も答えない。気が狂いそうだった。健次郎はついに我慢できずに、オムツの中に排尿した。

プールの中で小便したときのように温かいものが腹の周りに広がった。漏れはしないかと股間をしげしげと眺めたが、もれてこなかった。二度目は抵抗なく排尿した。しかし、「漏らした」という気分は消えなかった。

そのうち、冷えてきた。おまけに二度も小便をすれば、ぶよぶよとしてくる。気持ち悪いなんとかしてくれ、と叫びたかった。叫ばなければ、気が狂いそうだった。一人取り残された恐怖。みんな帰ってこないんじゃないかという焦り。それでも、叫ぶのはプライドが許さなかった。だから、小声で歌をうたって、ごまかした。涙がにじんできた。

時計が見えるところになかったので、どれほどの時間が経ったのかもわからなかった。窓から散歩から帰ってきたみんなが見えたときには、犬がご主人様を迎えて喜びの余りおしっこを漏らすのとおなじで、安心感でまた漏らしてしまった。

オムツのなかに放尿しながら「おーい」と、犬が尻尾を振るようにうれしそうな声を出していた。

講座が終わり、組事務所に顔をだして修了証明書を見せると、「ご苦労さん。次はここに就職しろ。段取りはつけてある」といわれた。

差し出された名刺には「在宅介護支援 ハートフルケア」とあった。組事務所には一時間もいなかった。事務所を出た足で「ハートフルケア」に行き、その日のうちから半年間そこで勤めた。

健次郎は、仕事から帰ってくるたびに、人の家ばかり綺麗に掃除して、自分の部屋はこれだからなど苦笑いをしていたききたないアパートの部屋から毎日仕事に出た。雨の日も、深夜もママチャリで街を走りまわった。他人の家で慣れない手つきで料理をして、自分は汚い部屋でコンビニの弁当を食べていることに矛盾を感じながらも、働くことはけっして嫌ではなかった。なによりも待っていてくれる人がいることが嬉しかった。人から「ありがとう」といわれるときに感じるくすぐったい気持ちもいいものだと感じるようになっていた。

そして組のことなど思いだすことも少なくなったころ、組長に呼ばれた。

「頑張っているそうじゃねえか。社長からもう一人ぐらいよこせといってきたるぜ。それでだ、今日呼んだのはほかでもない。うすうすわかっているだろうが、ここへいけ。杯は返す」

ヤクザの世界から追いだすという組長のことばにさほどショックを受けていない自分も不思議だったが、健次郎は念のため、尋ねた。

「おれはだめっすか？」

「ああ、おまえはヤクザには向いてない。自分でもわかつているはずだ。でもヤクザやめてもいくところがないだろう。だからここへ行け」

ここというのが予想通り西行苑だった。

「ここはな、おまえも知つてのとおり、ヤクザのための老人ホームだ。親分さんや、姐さん、その家族、もちろん、下っ端の構成員も利用できるものだ。まず一つ作って、具合がよけりや、全国に作るそうだ。西行苑プロジェクトは、組織の上層部の決定だ。健次郎、おまえはその一期生に選ばれたんだ。名誉に思え。頑

張ってこい」

健次郎は部屋を綺麗に掃除して、西行苑に向かった。

§2§

東北の寺で修行をしていた山添を客が尋ねてきたのは、もう一年も前になる。

当時の山添は、傷害事件の二年の刑期を終え、収監中に会った坊主に誘われるまま寺にやってきて坊主の真似事をしていた。

客は山添がかつて属していた暴力団組織の兄貴分の島村だった。

「久しぶりだな、山添。老人ホームの苑長をやってくれないか。頼む。この通りだ」

迷惑そうな顔で、迎えた山添に島村は挨拶もそこそこに切りだした。

「いきなりなんですか？ 老人ホームっていったいなんですか？」

島村は、山添が淹れた茶をグイと飲み干すと、全国のヤクザのための老人ホーム作りが計画されていることを話しはじめた。誰が作ったのか、洒落たレジュメ

まで用意している。傘下の組織の中で「経済」を生業にしている奴らに作らせたのだろう。それにしても突然だった。老人ホーム建設のいいだしっぺが、系列の組長だからとはいえ、なぜ自分に白羽の矢が立ったのは理解できなかった。

「そこよ。ヤクザが老人ホームを作るなんてことするとよ、地元のアカが五月蠅いし、役所もいい顔しないだろう。そこでだ、いまではヤクザから足を洗って、御仏に仕えるおまえに表に立つてもらって、仏様のご加護を背景にした社会福祉法人を作って、運営しようってことになったわけよ。ホームに入るのはよ、ボケちまった親分衆や姐さんたちだ。設立に関する金もヤクザからでる。でも、運営には一切口は出さない。山添、おまえをもう一度やヤクザの世界に引っ張りこもうってんじゃない。出ていったおまえは幸運だ。口にはださないがそう思っている奴も多い。だがよ、ボケちまったご老体たちはよ、ボケたからといってかたぎの世界にもどれないし、ヤクザの世界でも生きられない。なあ、山添よ。この話は新手のしのぎじゃ決してないんだ。ご老体たちをよ、死ぬまでの短い日々安楽に暮らさせてやりたいだけよ。ヤクザだって人の子、親思いなんだ」

「そりゃ、わかってますよ」

「そうかい、ありがたい。了解してくれるのか。いや、よかった。おまえを説得できなかったら、指詰めるどころじゃすまなかった」

山添が返事をする前に、すでに答は用意されていた。ヤクザの世界に引きずり込まないという話は茶番もいいところだが、引き受けるしかなかった。

山添の説得成功に気を良くした島村は、祝杯を上げようといったが、ここは寺だからと断ると、「ちえ、しけてやがんア」と急に態度を横柄に崩して、山門を出ていった。見送った山添に「近いうちに、弁護士なんかをよこすから。よろしくな」といつて帰っていった。

坊にもどると、師の新井文慧が「戻られるのか？」と聞いてきた。たとえ野球のユニフォームを着ていてもヤクザにしか見えない島村が来て、二人だけで話し込んでいれば、そう思うのは当然だ。

「ヤクザの世界にはないのですが、ヤクザの世界と冥界のあいだの世界には行かねばならないようです」

島村が持ってきたパンフレットを文慧に見せた。

「そうですか。これも御仏の思し召し、などと分別くさいことはいいたくはないが、後悔はなさいませんか」

「先に立つ後悔などありません。それに、ヤクザの世界はわたしの故郷でもありますから」

「覚悟されておられるのであれば、引きとめません。残りの日々心静かに修行をされることだ」

「ありがとうございます」

＊

島村が帰ってから二週間後、なんの前触れもなく、二人の客がきた。弁護士兼行政書士の山口と税理士の木邑だという。二人ともヤクザの臭いはしなかったが、素っかたぎというわけではなさそうだった。

二人とも殊勝にも本尊に参り、住職にも挨拶をした。住職は部屋をひとつ空けてくれた。あとできくと、宿泊代としてかなりの喜捨をしたという。

山口も木邑も礼儀正しかった。まるで、中学校のときの合宿みたいだとはしゃいでいた。山添がお勤めをしている間は、境内や本堂の回廊の掃除をしたり、気が向くと、勤行に付き合った。

昼前から夕方までの数時間は、部屋にこもって、老人ホームの設立準備にかかった。

設立準備といっても、山添にはすることがなかった。山添の目の前で二人は次々と書類を積み上げていく。山添は茶を入れるぐらいしか仕事がなかった。

「山口さん、わたしは素人なので何も知らないのですが、福祉法人というのは設立が大変じゃないのですか？」

「一からつくるとなると大変です。だから、わたしたちがやろうとしているのは、買収です。休眠状態にある法人を買うんです。経営状態の良くないところを買う手もありますが、それだと、器も人も、借金もついてきますから、今回のプロジェクトには不向きです。まあ、中古住宅や中古車の売買と同じです。名義変更すればおしまいです」

「そんなに都合のいいものがいつでもあるんですか」

「蛇の道は蛇。ちゃんとマーケッともあるんですよ」

山口によると、いいものがあるらしい。値段を尋ねると、山添さんはそうしたことを知らないほうがいいです、とやんわりと断られた。

資料が必要になると、弁護士がノートパソコンで検索し、事務所に連絡した。半日もすると、どうみても弁護士秘書には見えない若い衆がベンツに乗って本を一冊届けにきたりした。

「おまえも修行していったらどうだ」と山口声を掛けられると「俺は、いいすつよ」といいながら帰っていった。

合宿三日目に客が一人増えた。設計士の安藤だった。山口や木邑とはまた、ちがった臭いをもつ男だった。やくぎでも、かたぎでもない、頑固で自由人の臭いがした。

安藤は二人に「どうもお久しぶりです。今回はまた、おもしろそうな仕事を回していただいてありがとうございます」と挨拶すると、乗ってきたワゴン車から

設計図台を運び出し、「ここがいいや」と勝手に本堂に据えてしまった。ペンや定規の置き場所に彼なりの流儀があるらしく、妙に儀式ばった手際で準備を終えた。

「さて」

安藤のその声を合図に、山口が、それまで三人で決めた構想を安藤に伝えた。「それじゃ始めますか」

安藤はすぐさま設計にかかった。夕方のお勤めに住職が入ってきて読経を始めても意に介せずにペンを走らせている。

読経のメロディーと木魚のリズムが気に入ったらしい。いつのまにか、住職の読経をテープに録音して、仕事中に流している。アイデアに詰まると、自分で木魚をぼくぼくしながら本尊を拝んだり、罰当たりにも、本尊の前で逆立ちなどしていた。

合宿一〇日目、ついに構想は完成した。残すところ、ホームの名前だけとなった。山口弁護士は、住職にこれもなにかのご縁だから、名前を考えてくれと頼ん

だ。住職は、建物の設計図や構想企画書を読んだうえで、「西行苑がよいのでは」といった。

「西行苑？」

「この設計図を見ると、桜の大本が敷地にあるようです。〈願はくは花のしたにて春死なむそのきさらぎの望月のころ〉と詠んだ西行法師にちなんだものです。桜といえば、あなたたちの世界にもつきものではないですか」

「なるほど」

結局、住職は、銘板の揮毫も依頼されてしまった。弁護士たちは住職に揮毫料としてかなりの金を押しつけ、東京に帰っていった。

二日後、安藤から銘板が届いた。住職はさっそく本堂に板を持ち込むと、山添に墨を用意させる間、読経を続けた。

読経を終えた住職は、銘板の前に腰を浮かせて座すと、筆にたっぷり墨をふくませ、「えいっ」と気合を入れて、一息に書き上げた。

山添はそんなに気合を入れなくても、どうせ、字のうまい下手などわかりやし

ないのと思った。

「がらにもなく、ちょっと力が入りすぎましたかな。しかしまあ、戒名みたいなものですから、おろそかにはできませんよ」

＊

一ヵ月後、山添は山口弁護士から、法人の設立が完了したという連絡を受けた。暇乞いの住職の部屋を訪ねた。

「いよいよですか。山添さんも大役を背負われたものです。しかし、失礼とは思いますが、山添さん役割は飾りでしょう」

「そうですね。うまくいってあたりまえ、下手すりゃ放り出されるだけです。そのときは戻ってきててもよろしいですか」

「もちろんですよ。でも、せっかく新しいことをやられるんですから、うまくいくことを祈りましょう。私にできることがあれば、なんでもお手伝いします。遠慮なくいつてきてください。それから——」

住職は机の上の箱から和綴じの本を取り出した。「臨終行儀」という文字が見

える。

「みてくれは古風ですが、中身は現代文に訳してありますからご心配なく。死にゆく人を看取る際の仏教の作法を書いたものです。現代に通じるものも多くあります。老人ホームは終の棲家です。死が予定されている場所です。何かの参考になるかもしれません」

「仏教は死んだ後のことばかりと思っていましたが」

「死んだものに信仰など必要でしょうか。信仰は生者のものです。信仰は、よく生きるため、そして、よく死ぬためにあるのだと思います。山添さんのいうように、いまでは葬式仏教などといわれています。それも自己弁護をすれば、生きているものたち、遺された人たちに仏教儀式をおこなうことによって、死者から気持ちを切り離し、生きていくことを考えさせるためともいえます」

文慧は多弁な人ではない。差し向かいで食事を摂っていても、口数は多くない。山添が勤行の際の指示以外にまとまった言葉を文慧から受けた記憶がない。それがいつになく能弁なのは、別れが間近だからだろうか。

「四苦八苦という言葉をご存知でしょう。四苦とは、生老病死です。生きることの苦しみ、それを救うのが宗教の第一義です」

「私の人生みたいなものです」

「それはちがいます。あなたはヤクザになって、そこから抜け出して、いままた、新しいことに挑戦しようとしている。山添さんは、人の言いなりになっているだけだと思いかもしれませんが、一〇〇年ほど前までは、百姓に生まれたら、百姓で死ぬしかなかった。漁師は漁師で死ぬしかなかったのです。どう生きるかなんて、選ぶことはできなかった。生まれた瞬間に、すべてが決まっていたのです。それを輪廻、業、因果応報ということばで説明しました。そうでも考えなければ、生きるとは辛いことばかりだった。だからといって、死ぬ自由もなかった。それを阻止するために、輪廻を説いて、良く生きること論した。良く生きて、良く死ぬことが良き来世を保証したんです。極楽往生を約束したのです」

「おことばですが、やくざものは地獄に落ちたのではないですか」

「それもちがいます。わたしは、地獄におちたものは一人もいないのではないか

と思います。ただし、坊主を除けばです。地獄なんてものを考え出して人々を脅したのですから、これは、地獄に落ちるに充分な罪です。だからこそ、こうした教えが考え出されたのかもしれない。坊主が一番死を恐れていた」

「しかし、今の人々は、死を怖いものと考えているのでしょうか。というか、それ以前に、信仰を求めているのでしょうか」

「山添さん、あなたは どうしてこの寺に居るのですか」

「わたしの場合は、方便です」

「こりやまた、ずいぶんと率直ないいかたをしますなあ。いや、おっしゃりたいことはわかりますよ。ヤクザも坊主も世間の外にある点では同じですからね。現代人、とくに日本人が信仰を失っているように見えるのは、どれか突出した宗教がないだけに、全体として薄く見えるだけではないでしょうか。日本人は無宗教だといわれますが、実は多宗教です。世界的にも珍しいんじゃないですか。TP Oで使い分けている」

文慧は自分に言い聞かせるように言葉を つむぎ出してくる。

「既成の宗教が力を失ったと同時に、別のものがでてきた。自分は何物にもなれる可能性があって、一度や二度失敗しても、やり直しがきくという幻想とでもいったらいいでしょうかね。現世での輪廻転生です。流行の言葉で言えば、人生のリセットが可能、新しい衣を着れば新しい生があるという幻想。教祖や教義がないから宗教というよりはアニミズムかもしれません。汚いものがあれば買い換えたり、壊して創りなおしが利く。人の生もおなじだと考えている。逃れようがある。影がない、フラットな社会。社会は、いくたびかの革命を経て、体制を変えてきました。なのに宗教だけが、現代とはかけ離れた時代のものであっていいはずがないとおもいませんか」

文慧は、自分がよくしゃべることに驚いたかのように一息ついた。

「まあ、しかし、ホームに入居する人たちは、一様に死を覚悟しているはずですよ。リセットは不可能です。そこには既成の宗教の活躍の場が残っているかもしれない。それにね、本人は死を覚悟はしていても、周りのものは、死をどのように扱ったら、戸惑うのが当然でしょう。働く人も若い人が多いはずだ。まして、ホー

ムにいらのは家族でも、親兄弟でもないのです。死を目前として、看取るものが戸惑わないように心がまえを書いたのがこの本だとも言えます」

山添は「臨終行儀」を押し頂き、銘板を抱え寺を後にした。

＊

東京についた山添は弁護士山口の事務所を尋ねた。

「山添さんには、現地にホテルを用意しましたので、そちらに移っていただき、陣頭指揮を取っていただきます。もちろん、設立までのこまごまこととしたことはすべて私と木邑のほうでやります。山添さんは人の採用や役所に挨拶行くときの看板になっていたただけで結構です。あ、それから、名刺を用意しました」

「社会福祉法人神農天照会」という仰々しい名前が踊っていた。

山添はその足で、西行苑が建つはずの温泉街にやってきた。用意されていたのは、ホテルのスウィートだった。昨夜まではせんべい布団に寝ていたのに、この変わりように笑わずにはいられなかったが、その変化を抵抗もなしにうけいれるとは、人間の煩惱とはさも深いものかと思った。山添は銘板を鏡の前に据えた。

当分はここが事務所になる。

もつとも、スウィートを独り占めできたのはその日だけで、次の日からは弁護士や行政書士などがのべつではいりすることとなった。

山口弁護士案内で西行苑の建設予定地に足を運んだ。予定地は、ある組織が借金の形に手に入れていた土地だった。温泉街を抜け山を登った先にあった。いまはまだ、雑木林のこの場所に、ロの字形をしたホームが建つ。

地元の役場への申請は、何の問題もなかった。申請時には、どこで手配したのか地元出身の県議会議員が庁舎の入口で出迎え、同道してくれた。

議員が山口のことを「先生」と呼び、「いつぞやは大変お世話になりました」と挨拶しているところを見ると、山口弁護士の人脈なのだろう。

先に立って歩く議員に聞かえないように山口に関係を質した。「これ」ですよと、小指を立てた。愛人か不倫関係の処理をうまく解決したというのだろう。「情けは人のためならず」と山口はうそぶいた。建築申請は問題なく受理された。

工事はまず、雑木林を切り開くことから始まった。そして、地鎮祭。工事は休

むことなく続けられた。

基礎工事が終わったところに、設計士の安藤がやってきた。一人でひととおり検分すると、「さあ、いきましょう」と声を掛けてきた。

その場にいた弁護士や、工事関係者と安藤に従った。

「さて、ここがエントランスです」

安藤は両手を広げて見せた。しかし、凡人には、吹きさらしの工事現場しか見えないう。

「車寄せから段差は一切なし。車椅子三台がすれちがえる幅があります。ここはエントランスホールです。右手に行くとな事務棟に行きます。左手はメインホールを通って食堂に続きます。床はコルク貼りにします。しかし、車椅子や杖を使う人、さらには、失禁対策として、ワックスをたっぷり塗りとこみます。さあ、こっちへきて」

あつけに取られている人にはおかまいなしに、安藤は引率の先生よろしく、使われる床材や壁材、照明までことこまかに説明しながら歩いていく。引き戸は引

き戸として開け、観音開きはそれなりに開いて見せた。しまい、みなすっかりその気になってしまって、「へえ、ずいぶんと広い食堂だな」などと感心している。山添もすっかり調子に乘せられてしまった。

「ここは個室です。入居者のリクエストに答えて和洋どちらにも対応できるつくりになります。トイレとシャワー、簡単なキッチンも備えてあります。そして、こちらが四人部屋」

安藤は壁をすり抜けて見せた。

「四人部屋といっても可動式の仕切り壁で、個室から四人部屋まで、変化がつけられます。仕切り壁の遮音は日常生活音であればほぼ消しますので、個室といっても充分に通用します。トイレとシャワーは共用です。四人部屋も個室もそのまま庭に出られます」

この施設の定員は二〇人だ。個室８と大部屋が三つだ。

安藤は今度は律儀にドアから部屋を出て、食堂に戻った。

「食堂の庭側は全面ガラスです。方角的に夕日は無理ですが、日の出は毎日のよ

うに拝むことができます。それにこの方角は温泉街を臨みますので、毎晩のように百万ドルの夜景を楽しむことができます。さて、こちらは、風呂です。女湯ですね、ここは。スロープや手すりなど考えられる設備は完備します。それから、露天風呂は気温の差があつて老人には毒かと思つたのですが、根強い人気がありますので、作ることにしました。ただし、すこし工夫をしました。室内の風呂と露天風呂はつながっています。風呂の真中にドアをつけます。ようするに、かたまで湯に浸かつたまま外と中を行き来できるようにします。そうすれば、気温の差による血圧の急激な変化も多少はやわらげられるでしょう」

「しかし、さっきの部屋もそうだけどさ、ぼけたやつもいるんだらう。そうそう簡単に外に出られるようになっていいもんかね」

「いまは何もないですが、敷地の周囲には、乗り越えるには難しい土壁を築きます。裏手の山のほうはフェンスにします。庭は低い生垣で迷路を作ります。それは、徘徊のしがいのある庭になりますよ。庭の要所と建物の周囲には、監視カメラと連動したセンサーを取り付けます。センサーを横切ると、監視カメラがその

姿を捕らえます。監視は警備員が行い、ころあいを見て、職員が迎えに行けばいいんです」

安藤の説明を聞くまでもなく贅沢な作りだ。採算は度外した施設だった。

施設や備品は、現段階でのベストを選択できるが、問題は職員だった。福祉のことはもちろん、介護のことなど何一つわからない山添は、ホームヘルパー一級の資格をもつ人間をリクルートすることにした。

新井文慧住職の紹介で一人のベテランヘルパーに会った。西川絹江だった。看護師の資格を持ち、在宅介護の経験も持っている。願ってもない人材だった。西川は、新井文慧の紹介ということもあってか、山添が施設の性格を説明しても顔をしかめることもなく「お世話になります」といつてくれた。

西川は村のほとんどが山林という地域で訪問看護婦をしていた。しかし、その職場は、面倒を見ている老人たちが死ぬばお終いになることが目に見えていた。道義的なことはさておき、仕事としてみたら、やはり、都会のほうが長く働けると考えていた。だから、住職に声を掛けられたとき、八割方行く気になっていた。

幸いにも家族はいない一人身だ。二割のためらいは、やはりやくざものの集団だということだった。だが、ヤクザ上がりの男だという山添が、実際にあってみると存外まともな印象なので少し拍子抜けした。同時にためらいも消えた。

山添は何もわからないので不安だと率直に打ち明けた。

「住職さんは「臨終行儀」を渡したから少しは勉強しているはずだとおっしゃってましたけど」

「寝る前にはいつも枕もとに開くんですが……」

住職は現代文に訳してあるといったが、漢字が多すぎて、いつも途中で寝入ってしまうのだ。

「まあ、そんなに難しく考えることもないと思います。ただし、職員にはいろいろな方がくることになると思います。ですから、ホームとしての理念は、やはり作っておかれたほうが良いと思います。ところで、ペットを看取ったことがありますか？」

「子供のころに飼っていた犬を看取ったことがある」

「そのときの気持ちを思いだしていただければ結構です」

犬と人をいっしょにするとは、ずいぶんだとは思ったものの、死がスケジュール帖に書きこまれているものを世話するというのはそういうことなのかもしれない。

「ああ、それから、世話をする側、つまり私たちは、お世話する人つまり入苑者に対して、絶対的な強者であることを忘れないでください」

「といいますと」

「介護を受ける人の要求は多岐にわたります。また、えてして理不尽に思うこともままあります。でも、考えてみてください。山添さんも、日常生活では、テレビを見ていたかと思うとお茶を飲んだり、掃除の途中で新聞を読んだりしませんか？」

「ああ、ありますね」

「それと同じです。介護を受ける人は自分でやりたいけどできないことを人に頼むんです。でも、頼まれたほうは、ご本人さまではないから、命令されたことは

できれば途中で放棄せずに最後までやりたいと思いますよね。でも、世話をするわたしたちは、世話をしている間はお世話をするかたの分身なんです。だから、理不尽と思うのは間違っているんです」

「なるほど。でも、それと強者であるというのはどう結びつくんですか」

「理不尽な要求をされたときに、コノヤロー、あっちだこっちだといいやがって！ とすごむのは簡単なことなんです。でもそれを一度でもやったらそれでお終い。その人との関係は二度と結ばません、というか、その人の分身になることはできないということです。相手がヤクザの親分であろうとなかろうと同じことです。だから、これから人を選ぶんだったら、ヤクザ出身——なんか変ですね、このいいかた。そういうかたでない人のほうが良いと思います。逆らえないと思う気持ちが大きいほどその反動も大きいでしょう。目の前の組長が身動きできないとおもったら、頭のひとつも張り倒したいと思わないですか？」

これには山添は苦笑いするしかなかった。対立する組の親分が目の前で動けなくなっていたら、そういうことは否定できない。

「相手の指示通りにやって時間内にできなくても、その人が怒ることはありません。だって、自分の分身がやっているんですから、極当たり前のことなんです」「わかりました。胆に銘じておきましょう。でも、ヤクザの施設に就職してくれる人なんているでしょうか？」

「まあ、大概の人は弱りきっている人に対しては暴力的にはならないものです。それでも、先ほどいったように、理不尽な要求をされるとね」

「西川さんのようなベテランでもそういう逢魔が刻があるんですか」

「もちろんです」

山添は西川の意見にしたがって、ヘルパーを公募しようかと思ったが、それだけでなく、職員の定着率がよくないといわれる業界だ。第一号のモデルケースが職員不足で立ち行かなくなることだけはなんとしても避けたかった。職員の「足抜け」を避けるには、抜けられない事情を持つものを集めるのにかぎった。

結局、島村に頼んで、全国の組織の中から、リクルートすることにした。ヤクザの世界に入ってきたもののすべてが、ヤクザに適正があるわけじゃない。染ま

る奴もいるが、どうやっても染まれない奴もいる。本人はそのつもりでも、傍から見ると、どうもしっくりこないやつがる。そうしたやつの一人や二人はどの組にもいるものだ。

全国の組織に号令がかけられて、組長推薦で五〇人の若者が選ばれた。一年ちかく前、彼らを東京のホテルに集め、山添や弁護士、住職の新井文慧、西川で面接をした。

若者は組長の命令で不承不承きているから、介護の仕事など真っ平だという「仮面」をつけていた。

なるべく前科の少ないものを、粗暴でないものを二〇人選んだ。

この二〇人は大切な一期生だ。モデルケースの西行苑がうまく軌道に乗れば、第二第三のホームが作られる。そのとき、この二〇人はそれぞれの施設の幹部として散っていくはずだ。だから、こいつらは金を払えばヘルパーの資格をくれるような学校ではなく、みっちりとしこんでくれる職業訓練校の講座に押し込んでもらうことにした。

それぞれの組長が地元の警察に話を通し、ヤクザをやめる若いものをなんとか職業訓練校に連れてくれとたのみ、そのほとんどが入ることができた。

まかないは鉄砲玉の寡婦。調理場は、温泉街のシルバー人材センターから板前経験者を派遣してもらうことにした。

こうして、オープンまで一週間となった。

§ 3 §

大野が西行苑に到着した翌日、さらに二人の職員が到着した。職員が勢ぞろいし、オープンにむけて加速度がついた。

山添はホールに集まった、みんなの顔を見まわした。一年前はもやしみたいに不健康な雰囲気をしているくせに、妙に脂ぎっているような顔つきだった若者たちも、半年以上にわたる講習とその後の実務研修で規則正しい生活をしたからだろう、普通の顔に戻っていた。かれらも、面接のとき以来の再会なので、自分たちの講習体験などを語り合っている。

「さて、全員がそろったところで、西行苑最初のミーティングを開きます。オーブンまでのわずかな時間で、勤務シフトのテスト、備品のチェック、緊急時の連絡および避難訓練など、やっていただくことは山ほどあります。同じことを何度も繰り返し、身体で覚えていただくしかありません。夜中の避難訓練も予定していますから、覚悟していてくださいね。詳しいことは後ほど西川さんのほうから説明があります。わたしからは、西行苑のモットーをお話したいと思います。みなさんの介護技術は、同じレベルではありません。それは仕事をしながらできる限り早くそろえていただくことになります。しかし、もっと大切なことは、気持ちをそろえることだと思います。みなさんが同じ気持ちで入苑者に接する。これは技術以上に大切だと思います。くどくど話してはスローガンになりませんね」

山添はホワイトボードにスローガンを書いた。

「俱会一所。この言葉をスローガンにしたいと思います。くえいっしょ、つまり、ともにひとつ所に会うという意味です。いまは見送る立場にいるけれども、いずれは、あなたのもとにいく、という考えをみなさんには持っていたきたいのです。こ

こにやってくる人は、ここで死にます。病院とは違って、元氣なって家に帰るところはありません。ここへは死ぬためにくるといつてもいいでしょう。その方たちにはこの気持ちで接してください。忘れないでください。わすれたら、あの世でいじめられますよ。あの世には、怖い人もすでにたくさんいますからね。地獄よりひどいことになる」

みんな苦笑いしながら聞いている。

「スローガンを実践するためのキャッチフレーズも考えました。介護のさしすせそです。料理のさしすせそのぱくりですが」

そういうとホワイトボードに、さしすせそと書いた。

「さは、騒がず。しは静かに。すは、素早く。せは、急かさず。そはそろりそろりです。それでは、西川さん、あとはよろしくお願いします」

後を任された西川は、山添の言葉を聞きながら、勉強の甲斐があったみたいだわね、と思った。介護のさしすせそとは良くいったものだ。言っていることも的を得ている。標語創りの名人は、人の心をつかむのもうまい。その時代や空間の

雰囲気をつかむコピーライターみたいなものだ。

西川のきびきびとした声が響くホールを後にして、山添は厨房に向った。

「加藤さん、お邪魔しますよ。いいですねえ、この厨房。なんと見ても飽きないなあ」

「いいでしょう。あたしもね、ちょっと自慢です。オープニングのときには、仲間に見せ付けてやろうと思います。人生の最後にもらった、最高のおもちやですよ。山添さんのおかげです」

加藤晴男は地元の温泉ホテルで長く板長を務めてきた。定年後は、悠悠自適の生活を送っていた。それでも、たまには身体を動かさないとボケると思って、人材センターに登録して、主婦やペンションのオーナー相手の料理講習会の講師などをやって、小遣いを稼いでいた。そんな加藤に、西行苑の厨房に入らないかという話がきた。

面接場所はかつての仕事場のスイートだった。

「わざわざ、おいでいただきありがとうございます。わたくし、西行苑長の山添

といひます。こちらは弁護士の山口、そして、設計士の安藤です。加藤さんはこのホテルの板長だったそうですね。入苑者のかたの大切な胃袋を任せるのは、この土地のことを良くご存知の方が良いと思いましたが、あいにくとわたしたちの誰一人として、この土地を知っているものがないんですよ。そこで、このホテルの女将に相談しましたら、それなら加藤さんがいいとご推薦頂いた次第です。建物もできていないのに気が早いと思われるでしょうね。実は、厨房の設備から什器の選定までをお願いしたいのです」

山添と名乗った男は、設計図を広げるとホームの説明を始めた。

「老人ホームってのは、あたしはやったことがなんで。栄養管理やら大変なんじゃないですか。栄養士の免許はもっていませんよ」

「毒にならなきやいいんですよ。もちろん、相談に乗ってくれる栄養士は見つかります。わたしたちは、栄養よりも、入苑者のかたがたに、こんなうまいもの食って、いつ死んでもいいと思っただきたいと考えています。このホテルを地元でも有数の料理旅館としたあなたの腕が欲しいんです。もちろん、老人向けの調

理メニューの開発や調理法、什器の類に関しては、新たに勉強・研究していただくなくてはならないかもしれません。それをどうやるかは一切お任せします。必要なバックアップは、金銭も含めて、惜しみません」

腕を欲しいといわれたら、いやとは言えない。

「もういちどさっきの図面を見せてください」

設計士が図面を広げた。

「好きにしてくれとは言いましたが、形や広さは変更できません。しかし、床や壁天井の素材はもちろん、配管、設備のレイアウトはすべて加藤さんにお任せします」

広さは申し分ない。

「なんでこんなに大きな窓が開いているんで」

厨房は食堂の隣にあて、食堂の庭側の前面ガラスがそのまま厨房の庭側にも続いている。まるで実演販売じゃないかと思ったのだ。

設計士はなんでそんなことを聞くと怪訝そうだ。

「それは、朝食は夜が開けるのを見ながら、昼は太陽を見ながら、夜は夕焼け空を見ながらのほうが、雰囲気が出るんじゃないかと思っただけです」

料理を作るのに窓の外の風景が必要だなんて聞いたこともない。しかし、面白いことをいう設計士だ。

「どうでしょうか、お引き受けいただけませんかでしょうか」

給料も悪くない。それにより、未知の仕事に取り組むことに惹かれた。

「お引き受けいたします」

「ありがとうございます。それから、もうひとつお伝えしておくべきことがあります。このホームの入苑者の方々ですが……」

大方、政治家とか芸能人とか、人目をばかる人たちだから、口外無用だともいえるだろうと、加藤は思った。

「ヤクザなんです。といっても、OBOGです。ホームの設立資金は全国 of ヤクザから出ています。しかし、運営には一切口を出しません。こうしたことは最初に申し上げるべきだったのですが。もちろん、いまからお断りいただいても

結構です」

加藤の心はいまさらいやとは言えないところまでのめりこんでいた。その後は、厨房の設計から、設備の発注、什器の買い付けまで加藤は一人でこなした。もちろん、介護食や介護用の什器の勉強もした。実に楽しかった。

「ところで、開苑式のメニューは決まりましたか」

「金に糸目はつけないとおっしゃるので、そのとおりにさせていただきますよ。もちろん、入苑者の人たちの食事も手抜きありません。いつどの食事が最後の晩餐になっても、ああ、死ぬ前にあれが食いたかった、なんてことはいわせません」

「頼もしいですね」

＊

ホールでは、西川の説明が続いていた。

「まず、このホールの構造をおぼえてもらいます。みなさんには、非常口の案内図をお渡ししてあります。これから、五チームに分かれます。それぞれのチーム

ごとに出発地点をかえて、一カ所の非常口から脱出してもらいます。一番びりになったところは、午後の入浴介助の実験台になってもらいます。ブービーは昼食の介助の実験台になってもらいます。頑張ってくださいね。それじゃグループに分けますよ」

スタッフからは、ぶーぶーという声が上がった。入浴介助のモデルと食事介助のモデルがどういうことかわかっているからだ。スタッフの間の中を西川が紙縊りをもって回る。押んで引いたところで意味はないのだが、皆真剣な顔で引いている。紙縊りの先には色がついていた。

「それじゃ、同じ色の人同士で集まって。赤は一号室、青は二号室……」

赤を引いた健次郎は、原直治と秋田紀子、船堀真と一緒にチームになった。直治は北陸の小都市の出身で、おとなしそうな男だった信用金庫の職員、役場の職員といっても通用しそうな、まじめそうな風貌だ。紀子は健次郎と同じ東京の生まれで、日に焼けて口の回転が速い女だった。ただ、左腕にリストカットの筋が数本見えた。手の甲には、タバコを押しつけたのか押しつけられたのか「根性焼

き」の痕が二つある。船堀はぬぼつとした捉えどころのない男だった。右手の小指がすこし湾曲している。「野球やっていたのか」と健次郎が聞くと、「高校二年まで」とボソツと答えた。人のことは言えないが、三人とも元ヤクザとは思えない。

「では、みなさん出発地点の部屋に入ってください。部屋に入ったら、非常口が八カ所あります。それぞれへの最短経路、そして、安全な経路を相談してください。きまったら、その経路を歩いて確認して、また、部屋に戻ってください。時間は三〇分です。じゃ、はじめ」

健次郎たちは一号室にはいると床に図面を広げて非常口を確認した。ホームは口の字形をしている。非常口は一階には玄関のほか五カ所、残り二カ所は、宿舎のある二階だった。行きつくのはそれほど難しい事ではないように思った。実際、歩いて、たしたことはない。一番遠くにある二階の宿舎の非常口にも三分あれば到着した。

「楽勝だね。この中に方向音痴の人いる?」

非常口を確認して部屋に戻ると紀子が尋ねた。

手を挙げたのは、紀子と真だった。

「紀子、なにが楽勝なんだよ。二人も方向音痴がいるジャン。だいたい、手を上げたおまえに言う資格あるのか」

直治が笑いながらいった。

「だいじょうぶだよ、健次郎と直治がさ、頑張ればいいんだから」
無邪気な確信だった。

「西川さんはゲームのルールもまだ明かしてしていないじゃないか。なにがだいじょうぶなもんか」

直治が言い返した。その時、館内放送のスピーカーから西川の声が流れてきた。
「食堂に集合してください」

食堂でみんなを待っていた西川はここにこしている。いたずらっ子の顔つきだ。なにか良からぬことを考えているに違いない。

「みなさん非常口の確認はできましたね。それでは、ルールを説明します。チー

ムのうちの二人は部屋に戻り、二人はここに残ります。全員にこれをつけてもらいます」

西川はアイマスクをひらひらと振って見せた。

「まじかよ」

「まじよお。食堂に残った人たちは、この紐を持って、部屋にもどり、部屋にいる二人のうちの一人と腰を紐で結んでください。そして、指定の非常口まで避難します。どこへ逃げるかは、食堂に残った人にだけ教えます。チームが同じ非常口に逃げるとは限りませんからね。脱出までの制限時間は一五分。それから、目隠しをしているから歩いたり走ったりしない事、かならず、四つん這いになって移動してください。わかりましたね。それじゃフェアプレイで行きましょう。部屋に戻る人を決めて、それから、食堂に残る人はどちらを助けるか決めてね」

食堂は大騒ぎになった。健次郎たちは、当然のことながら方向音痴の二人を部屋に戻した。

「じゃ、はじめましょう」

西川は食堂に残ったスタッフに声を掛けた。

「紐を忘れずにもって。いいですか？ それでは、まず、その場で六回まわって。さあ、いち、にーい、さーん、よーん、ごー、ろくっ！ それじゃ、しゃがんで、スタート！」

早速、あちこちでぶつかって、悲鳴が上がっている。健次郎はすでに行き先を見失っていた。動けば動くほど分からなくなると思った。動かずに食堂の景色を思い出した。目隠しをする前に目の前には食堂のテレビがあつた。まず、それを確認しようと思った。頭の方角にハイハイ歩きをした。椅子が肩にあたり、テールの脚が頭に激突した。あつた、テレビだ。健次郎はテレビを背にすると、右手で壁を探り当てた。これを離さずに行けば必ず一号室に行ける。健次郎は右肩で壁を確認しながら、スピードを上げた。

「直治、いるか？ こっちだ」

直治の返事は健次郎の左手か聞こえた、方角が反対だ。

「直治！ そっちは反対だ。俺の声のほうへ来い。早く！」

直治の「どこだよお」の声に「こっちだこっちだ」と答えて誘導した。一〇回ほど声をかけると直治がやってきた。

「いいか、おれの左側にならべ。肩を離すなよ」

健次郎は、スピードを上げた。

「おい、紀子、真いるか、助けに来たぜ」

「遅かったじゃない」

「ふざけるな、おまえらの前に直治を救出していたんだからな。さ、紐で結ぶぞ」紐を結びながら、脱出先の出口を確認した。健次郎は、食堂に戻って、厨房脇の出口、直治は部屋を出て右手に行き、事務棟の脇を過ぎた突き当たりだった。「いか、直治、部屋を出たら向かい側の壁に突き当たるんだ。そしたら、左側に壁を感じていけ。一回左に曲がったらあととはどこまでもまっすぐだ。分かったか！」

「わかったよ」

「じゃ、いくぞ、紀子」

「はいはい。なんか妙に威張ってない？ 健次郎君。のりこつ、なあーんて呼び捨てにしてさ。お兄ちゃんじゃないんだからね」

ブツブツ言いながらも、腰紐をグイと引つ張ると紀子はいってきた。二度ほどテーブルにぶつかって悲鳴を挙げたが、なんとか非常口に出られた。

「はやかっただね、健次郎君。この出口の一等だよ」
マスクを取ると、山添が立っていた。

一五分後、食堂にスタッフが集まった。

「みなさんご苦労様でした。面白かったでしょう？ それじゃ、結果を発表します。赤チーム、焼死者ゼロ、二組とも一等で脱出成功です」

すげーなあ、と言う声上がる。

「青チームは焼死者一名、行方不明一名でした」

行方不明とは、食堂から部屋に戻れなかったことを言うらしい。

「黄チームは、焼死者二、行方不明二です」

「あちゃー」という声上がる。黄チームは全滅だ。最下位決定だ。

「さて、緑チームです。焼死者二名でした。あと、五メートルで非常口と言うところで、力尽きました」

ブービーは免れた。飛びあがって喜んでいる。反対に青チームはがっかりだ。「みなさん。実際の火事や地震などの災害の時には、障害物がたくさんあったりして、もっと大変なことになります。つねに、自分のいる場所を把握してしてください。優勝した赤チームの勝因は壁をうまくつかったことです。迷路を脱出するテクニクです。右手か左手で壁を触りつづける事です。しかし、それがいつもうまく行くとは限りません」

「健ちゃんやったね」

紀子は自分のことを呼び捨てにするなどといったくせに、健次郎をチャンづけで呼んだ。

「それじゃ、休憩の後、昼食の介助に入ります」

＊

厨房から、鼻をくすぐる良い香りが流れてきた。

青チームは、車椅子に乗せられたり、杖を持たされたり、再びアイマスクをつけさせられた。赤チームは彼らを食堂に誘導する。

施設のモニターの吉田さんと秋元さんもほかのチームに誘導されてやってきた。席につくと、厨房のカウンターから、食事を配膳する。スタッフには、厨房の加藤から品書きが配られた。メニューを説明するためだ。

「加藤さん、これなんて読むの？」

紀子がカウンターから身を乗り出して聞いている。

「どれだ？　これは、ハマグリのすいものだ」

「ふりがなつけてくれない？」

加藤は、山添の顔を見て苦笑いしている。

青チームは、みんなより先に食事に取りつけて、うらやましがられている。それほど昼食はうまそうだった。

「そんなに急いで口に入れないでくれよ」

青チームのメンバーの一人が声をあげた。紀子が、ご飯を次々と口に運ぶので、

悲鳴をあげたのだ。ほかに、吸い物を口からあふれさせている犠牲者もいた。山添の言うように、スタッフの技量はまちまちのようだ。健次郎も、オムツ交換など苦手なものがある。

「秋田さん、相手の口が不自由なからだっただけです。さしすせそのせとそです」

西川にチェックされた紀子はぺろりと舌を出した。

「せとそってなんだっけ、健ちゃん」

横にいた健次郎に聞いてきた。

「せかさずそろりそろりだ」

「オッケー」

食事介助も終わり、スタッフ全員が昼食をすませると、そのまま食堂でのミーティングが開かれた。モニターの二人から、設備や食事についての意見を聞いた。ミーティング後は、チーム毎に、庭の構造の確認をした。西川が明日は庭をつかってゲームをすると告げていた。どうやら徘徊した人を想定して、警備室のモ

ニターをみて、その人のいる場所を特定して、現場に駆けつけるまでの時間を競うらしかった。各チームとも、庭と警備室を行ったり来りして、真剣に確認していた。

夕食前には、入浴介助がおこなわれた。

「今日は訓練なので、皆さんも、介助を受ける側も水着をつけていますが、入浴のときには皆さんにも裸になってもらいます。介護する側が着衣のままと言うのは、入浴する側がリラククスできないんですよ。本番では、裸です。怪我には充分注意してください」

入浴訓練の実験台は黄チームだった。彼らもまた食事介助の時の青チームのように車椅子に乘せられたり、半身麻痺の設定で手足にギブスをつけられたりして入浴に臨んだ。

紀子と健次郎は、車椅子を利用者の担当になった。部屋まで風呂用の車椅子で迎えに行くことになっている。部屋まで迎えに行くと、車椅子に縛り付けられたスタッフが、「やさしくたのむぜ」と言ってきた。

脱衣では脱衣が始まっていた。健次郎と紀子も二人ががりて脱衣を手伝った。「わぁー」と声が上がったので振り向くと、服を脱がされたスタッフが、ビキニをつけていたのだ。

「健ちゃん、仕事仕事」と紀子が急かす。健次郎は「さしすせそ」と言い返した。脱衣が終わると椅子のまま風呂に入る。掛け湯をして、スロープを使って浴槽に入る。「大野さん、ゆっくりね。車椅子に引きずられて滑らないように気をつけて。椅子に座った人の胸の当たりまで入ったところで、浮力を使って移動するの」

この方式は健次郎も初体験だった。これなら、本人に腕の力さえあれば、自分で移動が楽にできる。介助する側の負担も減る。

入浴は食事より、みな真剣になる。紀子に風呂の中の備品や設備、脱衣場の設備などを確認してから、最後にみんなでシャワーを浴びて終了した。

「まったく、運動会みたいな一日だったなあ、直治」

「ほんと。つかれたー。でも、このぶんじゃ夕食のときも何かあるんだろうな。」

西川さんのことだから。組にいたほうが楽だったとおもわないか健次郎は」

「そうだな。身体は楽だったかもしれないけど、気持ちちが窮屈だったかも」

健次郎たちの想像に反して、夕食のときは何事もなかった。そればかりか、スタッフの歓迎会が開かれた。スタッフの前には、加藤が腕を振るった料理が、テーブルを埋め尽くしていた。

「すごいな健次郎、うちのねーちゃん結婚式の時みたいだぜ」

「しけたこというなよ直治。なあ、真」

「おれ初めてだよ、こんな料理。すごいな」

「えー、みなさん」

山添が声を上げた。

「ささやかですが、皆さんの歓迎の席を設けさせていただきました。ただし、皆さんの前の料理は、来週の開苑式の日に出される料理です。皆さんはモニターです。あとで感想を聞かせてください。それで、今日の仕事はおしまいです。では、ごゆっくりと」

山添の発声で乾杯をした。そこかしこで、うまいという声があがり、弾けるような笑いが起っている。

翌朝からは一日の生活をなぞるように、毎日毎日、訓練が続いた。シフト勤務も開始され、日勤や夜勤の区別も始まり、夜間の見まわりなどの訓練も加わった。秋元と吉田は、毎日なにかしら修正点を発見した。ほとんど言いがかりといえるようなものもあったが、「おいしいものを食べさせてもらって、こんななおおぜいのみなさんにお世話して頂いて、ちゃんと文句をつけなけりゃ、ばちがあたります」といって、二人は笑い転げている。秋元と吉田だけでなく、スタッフも短いとはいえ実務経験を元に、気がついたことを指摘した。

発見された施設の欠陥は設計士の安藤が速やかに直した。サービスの不備は、そのつどミーティングが開かれ、対処が考えられ、試行し、うまく行くと分かったら、他のチームにも伝達されていった。一週間はあつと意いうまに過ぎ去った。

＊

招待日の朝、山添は駅で新井文慧を待っていた。今日は、明日のオープンを前に、

議員や、市役所、建築関係者、そして、西行苑のスポンサーである組関係者に施設を開放するのだ。

山添は島村を通じて、組関係者にたいして、それとはわからない格好で来てもらうようにした。

ポケットに手を突っ込むのは禁止、ハーフカラーのサングラスも禁止、できればパンチパーマも禁止したかったが、さすがそこまでやると人権にかかわると思いやめた。

パーティーまで三〇分。時間がちょうど良い新幹線が到着したところだった。いまも山添の目の前で「ご苦労様です」という掛け声が飛び交っていたが、その輪の中心を見ると、ごく普通のおっさん然とした男が歩いているので、妙なものであった。

組長をタクシーに乗せた若い衆は駅前に三々五々散っていった。ベントなどの「ヤクザ公用車」で苑まで乗りつけることも自粛してもらった。取り巻きをぞろぞろ連れてくるのも遠慮してもらった。

組関係者の列が途切れたところで、ようやく新井文慧が出てきた。山添を見つけると手を軽く上げながら近寄ってきた。

「いやーまいったよ、山添さん」

「なにがですか」

「新幹線の中は組関係者だけだ。生きた心地がしなかった」

「悟っておられるかたのおことばとは思えませんが」

「死は恐くないが、生きた心地がしないというのはどうもすかん」

「しかし、住職が一番らしく見えますよ」

礼服に見を固めた住職は、なにを勘違いしたのかサングラスをかけている。頭は当然スキンヘッドだし、体格もいい新井はどこから見ても関係者だった。組関係者にだした服装規定のことを話すと「こりゃまいったね」といってつるりと頭をなであげた。

＊

市役所の福祉課に勤務する佐藤は、自家用車で苑に向かっていた。温泉街を抜け

山肌を登っていく。両側は雑木林で所々半分放棄されたようなミカン畑がある。家が途絶えて一〇分、海が遠くなってきたころ、道端に「西行苑この先」という小さな標識が立っていた。さらに二、三回曲がってようやく広い駐車場にでた。車を置くと、苑に向かって歩き始めた。

佐藤は東京の大学を出て、地元に戻ってきて三年になる。就職以来、市の福祉課に勤務していた。両親は、温泉街から外れた海辺で干物を作っている。

一週間前に招待状が届いたときは、西行苑のことをすぐには思い出せなかった。机の上に乱雑に積まれた施設開設申請書控えを引っ張りだし、ようやく思い出すことができた。

一年前に申請を受けたものだった。確か県議が付き添いできて、申請書類も整っていたので問題なく許可された。地元市民に優先枠を設けることを申し入れたときも、抵抗なく受け入れられ、入苑定員が少ないので優先枠は一名だけになるが、優先枠以外で申し込みがあれば受け入れるという返事だった。その後、市に在住する人の受け入れが決まったと連絡があった。丁寧にも申込書の写しまで

添えられていた。

調べてみると、確かに在住者であったが、暴力団関係者だった。そのときも佐藤は、そうした「少々難あり」の市民も受け入れてくれる施設なのだという認識をもっただけだ。もつとも、有料なのだから、金さえ払えば誰でもうけいれるのだらう。しかし、入苑者に暴力団関係者がいれば、見舞い客などの出入りで、施設の雰囲気が増なわれるとして、いやがるのがふつだらう。

ここは関東でも有数の温泉街で、歓楽街も大きい。そこを稼ぎの場とする暴力団もある。宿泊客にもヤクザはいる。組関係の会合も開かれるが、そうしたものは大概シーズンオフに開催されるのだ。温泉街も雰囲気を保ちたいし、ヤクザも必要以上に市民に脅威を見せつけることは、自分たちの縄張りを衰退させることにつながるのだから得策ではないことぐらいわかっている。

西行苑か――。

珍しく抹香臭い名前だ。普通は「ライフ陽光」や「シルバーピア・ゆとり」など、カタカナに明るいイメージのことを組み合わせつけてるものだが。西行と

は、平安から鎌倉時代初頭を生きた歌人の西行なのだろうか、国文科出身の佐藤は思った。そういえば、苑長は僧侶出身者だったように記憶している。

この街は、新幹線やマイカーの時代になり、東京に近いことがあだとなって、宿泊客が減少しつづけている。客足の減少は町の財政を圧迫している。観光地は、一度さびれ始めると足が速い。市長も地元観光協会もやっきになって、対策を講じていた。季節ごとのイベントや、若者に人気のファッションブランドのアウトレットショップを誘致して、浴衣と下駄の似合う温泉街から、「スパ・リゾート」として、若い女性客の誘致と彼女たちに引き寄せられる男性客の誘致に躍起になっているが、思うように客足は伸びていない。町の思惑とは反対に、ホテルがつぶれ、そのあとに高齢者をターゲットにしたマンションや老人ホームがいくつも建てられている。とうぜん高齢者の急増は市の福祉財政を圧迫するが、同時に雇用を創出することもたしかなのである。町は仲居やボーイを対象にしたヘルパー養成講座を開いたが、チップなどの実入りの少ない仕事だけに、こちらも必ずしも雇用の引止めには効果をあげていない。要するに町はジリ貧なのである。

駐車場から苑までだらだらと続く坂に佐藤は汗をかいてしまった。アパートの近くのコンビニに行くにもつい車を使ってしまふ報いが今きていると苦笑いする佐藤の脇を、何台ものタクシーが追い越してゆく。タクシーできたものは、エントランスまで横づけできるようだ。窓から見える横顔の中に見覚えのあるものがひとつふたつあった。市議会議員や市役所の幹部だった。ようやくついたときにはハンカチが湿っぽくなっていた。自分の身分がこの汗をかかせるのだと、恨めしく思った。

＊

苑内では、開所式の準備が滞りなく進んでいた。食堂にはひな壇が作られ、白い布をかけ、真ん中に花が生けられたテーブルが並んでいた。その間をビールやジュースのビンをかシャカシャいわせながら、職員が右往左往している。

招待客は受付を済ますと、開宴時間まで、好きなように苑内を見学してくださいといわれた。

建築関係者は、「おれたちには縁のないものだけど、いい仕事しただろう」と

いいながら仲間を案内し、組関係者は「組長のおかあさんは、ここにはいるのか。なかなかいいところじゃねか」などといいあっている。

議員や市役所の関係者は、一塊になって、温泉街の未来について語っている。市役所の佐藤は受付を済ませると、役所関係者の輪に近づき、上司に声をかけた。上司はうなづいただけで話に戻っていた。

「これで、アリバイ証明はすんだ」とひとりごちすると、苑内を見学することにした。

建物はおちついた色合いで作られている。照明も間接照明をふんだんに使い、蛍光灯のフラットな照明はどこにも使われていない。廊下も幅が広く、車椅子二台が楽にすれちがえるだろうと思えた。食堂は開放的で、全面ガラスの向こうには、明るい庭が見えている。高級ホテルの雰囲気だった。

佐藤は風呂場を覗いた。職務柄にわか勉強だが、バリアフリーを学んでいる佐藤の目から見ても、現段階でのベストの設備が整えられていた。

トイレも車椅子で方向転換ができるほどスペースは充分だ。ドアもちゃんとつ

いている。この種の施設ではトイレの仕切りがカーテンということもある。職員の出入りや見守りには便利だが、落ち着かない。観光課の友人を連れてきて見せてやればよかったと思った。市内の温泉宿はなんでもかんでも手すりをつけて「バリアフリー」ですと、お茶を濁していることが多い。

居室をのぞいた佐藤は苦笑いした。

「おれの部屋より上等だ」とその場にいた説明役の職員に声をかけると「そうですね、わたしの住んでいた部屋なんかここに比べたら独房みたいなもんです」

たしかにその通りだった。一〇畳はある広部屋は、ベッドルームとソファの置かれた居間のふた部屋に分かれている。簡単なキッチンもあり、シャワーとトイレもついている。

「いくらだい、この部屋は」

「ここは完全個室タイプですので、月二五万円です」

「ほえー。俺の給料じゃ入れない。よっぽど悪いことでもしなけりや無理だ」

次にみたのは、不完全個室とでもいうのだろうか？ 基本的には個室なのだが、

仕切りがすべて可動式の壁だった。入口を入ると廊下というか、次の間みたいなものがあり、そのむこうに引き戸が四つ並んでいる。次の間の片側にはトイレとシャワールームがついている。引き戸を開けて中に入るとベッドがある。部屋の向こう側にも引き戸があり、開けると、ぱあーっと空が広がった。サンルームだった。振り返るとやはり引き戸が四つ並んでいる。どうやらサンルームは共有スペースになっているようだ。

職員が仕切りの引き戸をガラガラと引いた。あつという間に、四人部屋になった。

「希望により二人部屋にも三人部屋にも変更できます」

「でも、プライバシーが」

尋ねてから、バカな質問だったと思った。カーテンの仕切りだけで、手を伸ばせば隣のベッドがあるような施設よりもどれだけ上等なことがか。

「この扉、これでけっこう遮音するんです」

そういうと職員は引き戸を元に戻し個室を作った。向こう側の部屋に置いてあ

るテレビをつけ大音量にする。それから引き戸をスーッと閉めた。音が消えた。完全に消えたわけじゃないが、ひそひそ話ぐらいにはなった。

耳が遠くなっている年寄りなら、これで充分なのだろう。少なくとも放屁やいびきはさえぎってくれそうだし、夜中のオムツ交換などで職員が出入りしても、その音で目を覚ます心配はなさそうだ。

＊

苑内放送で宴会の開始が告げられた。建物内を散策していたものも、密談に興じていたものも三々五々食堂に集まってくる。

健次郎は歳若いということで司会進行を命じられていた。こんなことをするのは生まれて初めてだ。自分の周りだけ空気が薄いんじゃないかと言う気分だった。深呼吸を繰り返すものだから、げっぷがでて困った。掌に人の字を書いて飲みこむまじないなど効果がなかった。

声が震えているのが自分でもわかる。落ちつこうと会場をみまわした健次郎は、自分をここに送りこんだ組長の「おれに恥じをかせせるなよ」といつている視線

にぶつかったとたんパニックになりかけた。それを救ってくれたのは、客の一番後ろから、手を振っている紀子だった。その口が、が・ん・ば・れと動いた。思わずにこりとすると思議と力が抜けた。健次郎は落ち着けと自分に言い聞かせ、原稿に目を落とし、読み始めた。

まずは、苑長の山添がいさつをし、職員を紹介する。次に、来賓の挨拶が国會議員、県議會議員、市議會議員と三人続いた。乾杯の音頭は地元の商工会議所の会頭がおこなった。ここまできて、健次郎は肩で大きく息をした。

グラスを置いた客が料理に箸をつけ始めると、そこかしこから絶賛の声が上がった。ついたての陰で会場の反応を確かめていた厨房の加藤は、健次郎と目があうとガッツポーズをして見せた。七〇を越えた親父のすることか？

歓談の後、有力組織の組長三人が挨拶にたつことになっている。ここにきて、一般の来賓の多くは「おや？」と思うことになるだろう。早く無事に終わってくれと祈りつつ、健次郎は再びマイクの前に立った。

「ご歓談中のところまことに恐縮ではございますが、ここで少々お時間をいただ

きまして、引き続きご来賓の方々にご祝辞を賜わりたいと存じます。まず、この西行苑の設立に尽力され、ご自身のお母上も入苑されることになっております、極耀会四代目総裁渋谷信実様よりおことばを賜りたいと存じます。渋谷様よろしくお願いいたします」

極耀会といえ、関東では知らない人はいない暴力団である。かたぎが集まる人の群れが、静まり、あたりを見まわしている。

「えー、ただいまご紹介に預かりました、渋谷でございます。年齢順ということでお先に高いところより失礼致します。この西行苑は、わたしたち任侠の世界に生きるものの夢でありました。任侠はかたぎの世界と表裏一体とはいえ、やはり、アウトローの世界であります。しかしアウトローでも歳をとります。運良く幾多の修羅場をかいくぐり長生きしたところで、かたぎになれるわけではありません。本人だけでなく、家族もまた歳を取ります。しかし、われわれヤクザ者は、ヤクザであるというだけで、かたぎのかたからは疎まれる。もともと、市民に愛されるヤクザなんてのはいないわけです」

渋谷は冗談を交えながら話を進める。うまい。抗争をかいぐり、また、いくつもの抗争の仲立ちを務めてきただけのことはある。最初に挨拶にたった国会議員の上っ面だけの美辞麗句をならべた挨拶とは違ったものだった。

「ともすれば、かたぎの世界でも老人は、老人というだけで、社会の中心から徐々に周縁に追いやられ、やがて、追い出されてしまうということが見られます。員数外にされてしまうんですな。それでも、かたぎのかたには社会の互助機能がてをさしのべてくれます。ヤクザの場合はどうでしょうか。ヤクザであるというだけで、公的な介護サービスの現場からは疎まれ、疎外されるという状況が多く見られました。ヤクザというアウトローが歳をとることで、さらに、アウトローからもドロップアウトしてしまう。その請け皿がこの国にはありませんでした。そこで、この世界の高齢化に対応するべく、われわれ全国の任侠は恩讐を乗り越え手を結び、この施設を作ったわけです。西行苑はそのモデルケースであり、ここです、基盤を作り、経験と知識を蓄積し、やがて、全国に同様の施設を作るのが夢であります。今後とも、ご指導とご支援をいただきたく、挨拶に代えさせ

ていただきます」

盛大な拍手が沸きあがった。

次に立ったのは、関西に基盤を持つ近畿仁政会の五代目神崎永一だった。まだ、若い——といっても五〇代前半——のかれは、先に立った先輩を称え、先ほど中を見学したが、老後をここで暮らせるように是非長生きしたいといって、みなのお笑いを誘って壇を降りた。最後は、九州に基盤を持つ熊襲組の組長小泉喬だった。アルマーニーのスーツを着こなし、綺麗にウェーブをかけた髪にはちらほらと白髪が混じっている。ヤクザというよりも銀行の支店長、いや、大学教授といったほうがいいかもしれない。しかし、そうした見た目とは裏腹に、正統的武闘派としても知られ、ライバルが懐柔に応じない場合には、容赦なくつぶしてきた。また土地柄、韓国や台湾、中国の組織とも国際的な連携を進め、やり手と評判の男だった。

「先輩方と同じ壇に立って挨拶をさせていただくのははなはだ、恐れ多いことであります。九州の片田舎を治めます自分には、考えもつかない今回のプロジェクト

トの結実を、このように目の当たりにして、抗争やしのぎに明け暮れてきた自分の不徳の毎日をただただ恥じ入るばかりです。わたしの親はすでにこの世におりません。しかしながら、先代の奥様や組織の長老の方々が、もしこのような施設で安楽に余生を過ごせたら、どれほど喜ばしいことだろうと思います。われわれの世界は、親と子以外は存在しない世界です。親は子を育て、子は親を思い生きていく世界であります。ここでその理想が昇華することを心より祈っております」

小泉は先々代を内部抗争で殺したといわれ「親殺し」の異名を持つ男だった。それだけに、その言葉にはうそ寒さを感じた組関係者も多く、すでに、できあがっていた組長の一人が「なにいいやがる。親が大事だア？　その、親を殺したのはどこのどちらさんだってんだ」といった。本人は小声のつもりだったが、鍛えられた声は良く通った。おまけにまわりは静まり返っている。

司会の健次郎にもその声は届いた。「やばい」とおもって、壇上をみると、案の定小泉は、射殺するような視線を男にぶつけていた。健次郎は若い衆の立ち入りを禁止した山添の処置は正しかったと確信した。もしとりまきがいたら、それこ

そ血を見ただろう。

男をにらみつけていた小泉がスーツの胸元に手を入れた。会場が凍りついたそのとき、壇上の椅子に座っていた極耀会渋谷が、小泉の手を軽く押さえるようなしぐさをしてから、壇を降りた。渋谷の前にはモーゼが紅海を渡ったときのように、道がぱつと開けた。その突き当たりには、小泉をやじった男がいた。

渋谷はすたすたと歩み寄ると、男の耳元に顔を寄せ、なにごとかさやいた。男は凍りついた顔のまま、会場を出ていた。

渋谷は壇上に戻り、マイクに向かって、「たったいま、かれはここ西行苑への入苑資格を失いました」とだけいって、小泉の肩をたたいた。鮮やかだった。小泉は胸ポケットから取り出したチーフで軽く額の汗を押さえた。顔を上げたときにはもとの大学教授面がそこにあった。

健次郎は背中がぐっしりだった。もしかしたら少し小便をもらしたかもしれない、そう思うほどびびっていた。

小泉は挨拶を終え、拍手に送られて会場に戻った。

会場にざわめきが戻った。やがて、国会議員が帰り、それを合図に一般市民は我先にと帰っていった。今夜は、町のあちこちで居間の出来事が、面白おかしく語られることだろう。同時に、この西行苑のお里も知れ渡ることになる。やがて組長も一人二人と帰っていった。

市役所職員の佐藤は度肝を抜かれた。壇上の男が胸元に手を入れたときには、ハンカチでもだすのかと思っていた。が、周りにいた男たちが、「やばい、チャカをだす気だ」とささやくの聞いて足がすくんだ。チャカが拳銃の隠語だということぐらいは知っていた。そのあとの場面は、サイレント映画のように展開していった。すべてが終わって、周囲の音がもどってきたとき、手にした水割りのグラスの氷はすべて溶けていた。

＊

招待客が帰ると、職員が残った料理のご相伴にあずかった。山添が声をかけた。「えーと、みなさん。きょうは、本当にお疲れさまでした。めったにみることでできない場面にも出くわして、ラッキーでしたね」

「冗談じゃない」という声があがる。その声のする方に微笑みかけて山添は続けた。

「ぼくも久しぶりの場面だったので、正直いってびびりました。でも、なにこともおこらなかつたじゃないですか？ 血も流れなかつた。今日の出来事が抗争にまで発展することはないでしょう。もし、そうなったとしても、ここではなくて、外の世界のことです。今日のようなことは二度と起こりません。それはわたしが保証します。でも、どうしても明日から働くのが嫌だという人は、申し出てください。今日までのお給料を払い、そして、今日の出来事に対する慰謝料もお支払いたします。いかがですか、いませんか」

健次郎の横にいた直治が手を上げた。辞めるのかと思ったら「質問なんですけど、苑長は二度と起こしませんとおっしゃいましたが、どうやって、防ぐんですか」

「そうですね。普段の苑の暮らしでは、今日のように組関係者が一堂に会することがないということ。また、今日のように、面会者にはおつきのものをみとめな

いこと。玄関でのセキュリティチェックを厳しくすること。それにより、こへきた彼らの前にいるのは老いた父であり母であり、同輩であるからです。圧倒的な弱者の前では、ライオンもまた牙をむくことはありません。そう信じましょう？　しかし、それでももし、今度この苑内で拳銃を抜くものを見つけたら、皆さんが楯になってくださいね。絶対に入苑者に危害が及ばないようにするのがあなたたちの勤めです」

ちよつと考えれば、ライオンの話は相当無理があると思ったが、結局、だれもやめるものはいなかった。辞めても行くところなどないということ全員が知っていた。

§4§

招待日の翌日は、朝から晴れ渡った空が苑を覆った。桜はすっかり花を落とし、みずみずしい葉を茂らせつつあった。健次郎は桜の葉を見ると、なぜか祖母の家でだされた水羊羹を思いだす。

西行苑には、昨日とは別種の緊張感が漂っていた。今日は入苑者がやってくる日だ。健次郎は玄関先で、自分が担当する入苑者岩木平介の到着を待っていた。当初は、入苑者の状態を把握し、良好で安定した人間関係を利用者に提供するために、担当者を固定化してお世話をする事になっていた。

一番乗りは地元に暮らす志水伸江だった。データによると要介護度3である。痴呆は見られないが、脳梗塞の後遺症で、片麻痺と言語障害がある。西川が迎えにでた。

「志水さん、お世話を担当させていただきます西川絹江といいます。よろしくお願いします」

西川が家族から車椅子のハンドルを譲り受け、部屋に向かう。途中、食堂や風呂場、洗濯場の案内をする。

家族は荷物をもって、二人の後からぞろぞろとついて来る。

「いいところじゃないか、おかあさん」

「ほんと、景色も良いし、ここなら落ち着いてくらせますねお母様」

息子夫婦の問いかけにも伸江は無言だ。この家族に限ったことではなく、だれもが「いいところじゃないか」と口にする。西川は車椅子を押しながら、あんまり良いところじゃないなどとはいえるわけないよなあ、と思った。旅館だったら二度とこなくても良いが、ここでこれから死ぬまで暮らす人に向かっていえることじゃない。

部屋に入っても押し黙ったままの伸江に、設備の説明を終えると、西川はその場を離れた。

しばらくすると、伸江はしかつめ顔の息子が押す車椅子に乗って食堂に現れた。嫁は、表情を殺した顔でついて来る。

そうするうちにも、つぎつぎと、入苑者がやってきた。若い者にあーだこうだと命令しているものもいれば、一人でやってきて黙々と支度しているものもいる。それぞれの生き方がそこにあった。

食堂では、入苑者にウエルカムドリンクがだされている。ジュースに濃い茶、酒やリキュールもある。

「酒なんかだして大丈夫なのか？」とか、「健康管理は？」という質問に、山添が「やりたいことをやらせて、人生の最後を過ごさせてあげましょうよ。度をすごすような飲酒はもちろん禁止です。それぞれ方のかかりつけのお医者さまからの指示を受けた上ですすめます」と、すでに入苑前に説明したことを繰り返している。

身内にしてみれば、そういう態度を示すことで、自分たちはしっかりやっていたんだから、今度はおまえたちがしっかりやるんだぞ。なにかあったらおまえらの責任だからなといいたいのだろう。

なかには、早くも帰りたいといいだしている入苑者もいる。困った顔の家族の横で、担当職員が「ここは温泉付きのホテルだから、骨休めしましょうよ」というと、「そうか、温泉かい」と納得しても、五分もしないうちに「帰る」といいだす。「それでは帰りましょう。おうちはどこですか？」と尋ねると、「川越」だという。入苑者は横浜からきたはずなのにと思っていると、家族がはき捨てるように「生まれ故郷だ」という。

「いつもこうなんだ。しかたなく、車に乗せて、近所を一回りさ。そのうち出かけるといったことを忘れてしまう。でも、川越に家なんかないというと、ますます、興奮するんだな。お世話かけますがよろしくお願いします」と頭を下げられた職員が、その老人に「じゃあ、お家に帰りましょう」と声をかけて玄関を出ていく。

すれちがいに新しい入苑者がある。こうして、午前中は目の回るような忙しさのなか過ぎていった。

昼前には全員がそろった。昼食が用意され、歓迎会が開かれた。

山添は食事を摂っている各テーブルを回り挨拶している。

健次郎は、岩木と二人でテーブルについていた。札幌から岩木は一人でやってきた。

「大野さん、よろしくお願いしますよ。まあ、わたしも歳だから、そうそう長いお付き合いにはならんとおもいますがね」

「いえ、こちらこそ。若いばかりがとりえでいたらないことが多いと思いますが、

よろしく願います」

岩木は、札幌の有力組織の組長だった男だ。その男からさん付けでよばれるのは、なんとも居心地の悪いものだった。

健次郎の隣のテーブルでは、原直治が担当する石田保の家族に「なんで、すぐに預かってくれないんだ」と質問されていた。しどろもどろになっていると、山添が助け舟を出してくれた。

「事前にご説明申し上げたかと思いますが、一刻も早く慣れてもらうためです。子どもだって保育園や幼稚園に入るときには、馴らし保育が数日はあるもんです。お年寄りだって必要だと思いませんか。環境が激変することに対する適応力はむしろ衰えているんです。それに、何も知らない子どもと違って、いろいろと覚悟や始末もありますでしょうしね」

入苑者は今夜は一晚泊まって、明日帰る。来週は週の半ばから週末にかけてやってくる。このときは、職員が迎えに行く。そして、また、帰る。次に迎えに行くときには、もう、家には帰らないのだ。

「そんなものかねえ。まあ、なんにしても、餅は餅屋だ。よろしくお願いしますよ。なあ、おやじさん、ここは良いところだぜ。温泉もあるし、景色も空気も綺麗だ。街のなかで、窓から見えるマンションの壁を見ているよりなんぼかましだ。おれもここで暮らしたいぐらいさ」

「じゃあ、そうしろ」と石田がいう。

「そうしたいのはやまやまだけどよ、養わなければならない子分どもがいるんだ。そうもいかんめえ。でもよ、ここには、家族用のゲストハウスも完備されてっから、ちよくちよく来るよ。一緒に釣りでもゴルフでもやろうろ」

隣のテーブルには、小林茂樹とその妻、家族がいた。

「おとうさん、いいところでよかったですね。温泉もあるし、部屋も広くて綺麗だし。お料理も美味しい」

夫は何も答えない。職員が口に運ぶ食事を黙々と食べている。口の中が空になると「いつ帰るんだあ」とだけ聞く。

「明日です」と、職員が答えると、刺身を口にした。

妻のほうが職員に「お迎えにはあなたがきてくださるの。えーとお名前は、船堀さん？」

「おまえさん、いい体格しているねえ。警官にならないか」

突然、小林が口を開いた。

「おとうさん、なにいつているんですか。ごめんなさいね、船堀さん。おとうさん、ちょっとこれだから」

妻はこめかみの脇で人差し指をくるくると回した。

「はい、ぼくが伺います」

「そう。時間は決まっているのかしら。びっくりなさらないでね。ヤクザの家ですから、恐いのがたくさんいますから。本当は恐いばかりじゃないんだけど、恐がらせるのが商売というか、制服みたいなものだから。船堀さんが来ることは、みんな知っているの正浩」と隣に座る息子に聞いた。どうやら、職員が元ヤクザだということを知らないようだ。

「ああ、大丈夫だ。伝えてあるよ」

「船堀さんを脅しつけたりしないように、若い衆に良くいっておきなさいよ」

「わかってるって」

「この子もねえ、優しい子なんですよ。なんでかヤクザになんかなっちゃって。なに不自由なく育てたつもりなんですけど」

「おふくろさん、そんなことはいいいじゃねか。ほら、おやじ、もうすこし酒を飲んでらどうだ」

船堀の後ろのテーブルには、紀子が担当する白藤八重がいた。ついてきたのは、息子でもなければ、娘でもないようだった。

「お袋様、どうですか、いいところじゃないですか」

「まあね、どこでも住めば都だからね。あんたたちも目の上のたんこぶみたいなのがいなくて清清するだろうし、わたしもそう思われているというのを感じながら暮らすのも気詰まりだからね。ああ、嫌味じゃないんだよ。あんたたちが先代の跡目をついでからもわたしのことを気にかけて、なにかと立ててきてくれたのは、ほんとうに感謝しているんだよ。ほんとうなら、放り出されてもおかしくな

いのにさ。だからさ、わたしはここで楽しく暮らすよ。尋ねてきてくれなくても大丈夫だからね。あんたたち若いもんは、今風のやりかたで、気がねなく、好きなようにおやり」

「そんな寂しいこといわないでくださいよ」

「そうですよ、お袋様」

狐顔にリスのような目をつけた女がいった。

「ここにいれば、ぼっちゃんやお嬢さんも気がねなく尋ねてくれるじゃないですか。また、家族ができますよ」

「さあ、どうだかね。今度のことだって、あの子達には知らせていないんだらう。あの子達もそれぞれの生活を持っているんだから、いまさら、かわりあうのもね。連絡するのはあたしがくたばったときでいいよ」

二人は返すことばがなく、目の前のビールを同時にごくりと飲み干した。

「お子様はお二人ですか？」

会話が途切れたので紀子が声をかけた。

「自分が産んだのはねえ。ほかにも何人かいるらしいけど、あたしは知らないんだよ」

「へえー。ご主人様はおもてになったんですね」

「もてたんじゃないよ。ちよつと良い女を見つけちゃ、首根っこ押さえつけて、チンコをつんこんでおしまい」

「お袋様、先代のことをそんなふうにすることは――」

「墓の下でくしゃみでもしてるかね？ 死人に口なしいうけどさ、耳だつてないんだからいいじゃないの。それに、仕事はちゃんとした人でしたよ。いまいつているのは、こっちのほうだけのこと」

女は小指を立ててみせた。

「でも、そんなあけすけなことをいったら、こちらのお嬢さんがどぎまぎしちゃうわよね」

狐顔の女がこびるようにいつてきた。

「いえ、そんなことないですよ。レディコミで慣れてますから」

「れでいこみってなに？」

「マンガですよ、お袋様」

「今度見せてね」

「はい、喜んで」

「あなた、あんまり変なものをお袋様に教えないでちょうだい」

「いいじゃないの。死んでいくものにあれしちゃいけないこれしちゃいけないといわないの」

食堂のそこかしこで、さまざま家族模様が繰り広げられていた。担当ヘルパーは必死にその会話の端々に含まれる情報を頭にインプットしようとしていた。食事があらたか終わると、山添がマイクを片手に話はじめた。

「えーそれでは、みなさん、お食事もお済みになったようですので、当苑での生活について、少し説明をさせていただきます。ホームの暮らしというと、なにか窮屈なものとお感じになるかもしれませんが、この苑独自の決まりごとは一切ありません。やってはいけないことは、一般社会と同じです。こういって、みなさ

んは自分たちが生きてきた社会が一般社会とは異なるとおっしゃりたいかもしれないませんが、基本的には同じです。一番の変化は、いままでは、皆さんはそれぞれの家のなかでトップに、あるいはトップクラスにいたかたが多いと思います。しかし、ここでは、みなさん同じです。平等とはいいたませんが、横並びです。私たちもそのように皆さん方と接していきます。ですから、みなさんもほかのかたがたと、上下関係でものごとを進めようとなさらないでください。人と良い関係を取り結ぼうと思えば、自分もそれなりに相手に好意を示さなければならぬ。挨拶をする。自分だけでなく、相手のことも少しは考えてあげる。面子を立ててあげるという換えても良いですよ。それだけは守ってください」

話はまだ続きそうだが、すでに居眠りをはじめているものものもある。

「施設の設定は、必要以上にほかの方に気を使わなくて住むように設計しています。いびきが聞こえるほど壁は薄くありません。お風呂も一人で入りたければ、そのような浴室もあります。食事も、基本的に朝六時から夜一〇時までのあいだであれば、いつでもお食いただけます。もちろん、みなさまの健康を考えて、

当方からお食事を勧めたり、栄養のバランスを考えたものをおすすめしたりはしますが、最終的に判断するのはみなさんです。一緒に運動したり、習い事をしたといった団体行動は基本的にありません。サークルなどをお作りになりたいときは、みなさんのほうで自主的に運営していただくことにします。外出も自由です。でも、ほかの皆さんのこともあるので、門限は決めさせていただきます」

山添は、居眠りをはじめた人間が多いことに気づき、説明を切り上げた。

「それでは、みなさんよい週末をお過ごしください」

各テーブルでヘルパーが入苑者と家族に声をかける。

「午後はどのようにお過ごしになりますか？ お部屋に戻られます？ それとも、

あたりの散歩でもなさいますか」

昼寝に自室に戻るもの、家族や職員と散歩に出るもの。備品を買い物に町まで出るもの、苑内が静かになった。

＊

夕方近くになって、急に雨が降りだした。慌ててみなが帰ってくると同時に、苑

はにわかに賑わいを取り戻した。着替えるもの、ついでに風呂に入るもの、早くも良い匂いを漂わせている食堂にやってくるもの、ホームというより、ホテルのような喧騒に満ちていた。

白藤八重は、紀子の押す車椅子で玄関に飛び込んできた。

「ああ、気持ち良かった」

「大丈夫ですか？ 白藤さん。濡れてしまったから、早く着替えましょう」

「大丈夫よ、このくらい。だいいち、あなたが着ている上着をかけてくださったから、ぜんぜん濡れていないわ。久しぶりよ、雨にうたれるなんて。雨が降り始めたときに地面から立ち上る香りをかいだのも久しぶり。もう、思い出せないくらい昔。まず、あなたが着替えていらっしやい。私のことはそれからかまわないから。先に部屋に帰ってるから、着替えたらきてちょうだい」

八重にそういわれた紀子は、八重の車椅子が自室に向かうのを見届けて、事務棟に戻り、ロッカー室で着替えた。

紀子が白藤の担当に決まったのは、西行苑にやってきた直後だ。事前にファイ

ルを読み学習していたとはいえ、名立たる組織の組長の妻だった女性だ。逆鱗に触れたら……と思っただけでもどきどきした。

しかし、半日も経っていないが、そんな不安は消し飛んだ。時折、鋭い口調ではき捨てることもあるが、総じて、穏やかで話しずきの女性だった。自分のことは自分でやる。できない事は遠慮なく頼んでくる。その割りきり方が、いっしょにいても、気持ちよかった。

「秋田さん、すいませんけど、洋服を片付けてくださいな」

着替えを済ませた紀子が八重の部屋に入ると声をかけてきた。

「あ、はい、わかりました。お召し物は、このスーツケースの中ですか」

「そう。それから、こちらのケースの中にもね」

指差すところには、ブランドメーカーの大きな衣装ケースがあった。

「大きいでしょう？ 主人とヨーロッパ旅行にいったときにね、骨董屋で見つけたのよ。向こうの貴族がハネムーンに出るときに使うものなんですってよ」

「へえ、そうなんですか。開けてよろしいですか」

なかにはぎつちりと服が入っていた。ひとつひとつクローゼットに移しながら八重を見ると、彼女はドレッサーに化粧品を並べている。

「それが終わったら、こちらのダンボール箱を開けてくださいね。ふふ。ブランドのケースと、ダンボール。混在しているところで、お里知れてしまうわねえ」
八重は笑った。

ダンボールを開けると、こんどは靴箱がぎつしりと出てきた。紀子は一つつ綺麗にクローゼットに並べていく。ショーウィンドウで眺めたことはあっても、紀子には今までの人生で縁のないものだった。女だてらに特攻服を着て、女総長として暴走族を率いていた紀子には履いていくところなどなかった。ブランドものに金を使うぐらいなら、バイクに金を使ったほうがましだと思っていた。

「車椅子に乗っていて、いまさら靴もないもんだと思うでしょうね」

靴箱の数と錚々たるブランド名の数々に見とれていた紀子は一瞬呆けた目で白藤を見返してから、あわてて鼻先で両手をばたつかせた。

「いいのよ、事実そうなんだから。靴だけじゃない、洋服もよ。年寄りが着るに

はぎらつきすぎてゐるわよね。ほんとうは秋田さんぐらいの人が着たら似うようなものばかり」

「だめですよー、わたしに着たら、品がなくなってしまいます」

「そんなことないわよ。若いということだけで許されることもあるから。それにね、信じてもらいたいんだけど、ここにあるので、わたしの趣味を判断しないでね。ほかに、もっとたくさんあったのよ。でもね、こんな身体になってからというもの」

八重は、言葉をときらせると、車椅子の脇のダンボールを指差した。

「開けてみてちょうだい」

木箱が出てきた。縁が金属で補強されている。テレビの時代劇に出てくる千両箱みたいだった。

「それね、船簞笥っていうの。わたしの宝石箱」

そういうと、引き出しを開けた。きれいに並べられた指輪が出てきた。

「うわーきれい！」

「そう？　ほんとうに？」

「本当です。このダイヤのリングなんて、とっても素敵です」

「嬉しい！　わたしも、この中ではこれが一番好きなの。あの人が——なくなつた主人が、結婚前に買ってくれたもののひとつ」

そういうと八重はリングを指につけた。サイズがあわなくなつてくるくると回る。つけた手を目の前にかざし、眺めている。

気がつくのと八重の両目から涙があふれ出ていた。

「いかがされましたか、白藤さん」

「ごめんなさいね、取り乱して」

「いえ、そんなことは」

「さつきもちよつといつたけど、ほかにもね、もつともつとたくさんあつたの。別に欲張りだったんじゃないよの。わたしが買ったのはほんの一握り。ほかはね、みんな主人が買ってくれたの。剛毅な人でね、わたしがショーウィンドーでちよつとでも足を止めて見とれようものなら、さつさと店に入って買つてきちゃ

うのよ。困った人でしょう。それでね、たまってしまったのよ。でもね、ここにあるのは、ほんの一部」

「残りはご自宅に？」

「いえ。いまは、これで全部。家には何一つ残っていない。みんなね、人にあげてしまったの」

「わあ、もう少し早くお目にかかっていたら、わたしもおこぼれに預かれたのかな？」

「そうね、そのほうがわたしも幸せだったかもしれない。あげたといってもね、寝ている人に向かって、お姐さん、もう車椅子でハイヒールなんか履かないでしょう、この靴わたしにぴったりのサイズだからちようだい？　っていわれたら断れる？　この服ちようだいっていわれたら断れる？　まだ、そうやって面と向かって断ってからもっていくのなら許せる。病院に入院している間に家に上がりこんで、もっていったちやうのもいたわ。でも、わざわざ、いえないじゃない。着ることもできないくせにといい返されるのがわかっているから。洋服も靴も宝石

も、そうやってすこしずつ消えていったわ。まるで、砂が掌からこぼれるみたいに。たいした品物じゃなくても、みんな風景があつたのにね。抗争が続いて、鬼のような顔をした主人が、誕生日に買ってきてくれた指輪。息子が生まれたときに買ってきてくれた手鏡、みんななくなっちゃった。いずれは、形見わけでもっていかれるんだけど、せめて生きている間ぐらい、無駄だとわかっていても、待ってくれても良いじゃない。そんなに長生きするわけじゃないんだから。そうでしょう？　ほんと、悔しい」

八重は車椅子を半回転させ窓のほうを向き、紀子に背を向けた。肩が静かに震えている。白藤の話聞きながら、紀子は保育園のころに大事にしていた、犬のぬいぐるみを思いだした。ぬいぐるみは、ときおり母をたずねてくる男が土産にくれたものだった。男は紀子を胡座をかいたひざに乗せてくれた。頼めば高い高いもしてくれた。一度、男のことをお父さんと呼んで、母親に殴られた。気がつくとも男は紀子の家にこなくなっていた。ぬいぐるみだけが残った。ぬいぐるみは紀子の涙を吸いこんでくれた。黄ばんでよれよれになったぬいぐるみは、西行苑

にもいつしよにやってきた。いまでは、ぬいぐるみを買ってくれた男の顔も思い出せない。しかし、そこには、母もいれば、もしかしたら父親だったかもしれない男と暮らした風景があった。

「ごめんなさい」

振り返った白藤の目の縁は赤く染まっていた。

「だからね、わたし、ここへ来るのに、全財産持ってきたの。もう、これ以上、風景を持ち逃げされたくないのよ。ここには死にきたのよ。いえ、慰めは無用よ。事実なんだから。わたしはここで死ぬの。秋田さん、あなた靴のサイズいくつ？ 服は何号かしら？」

「え？ 靴は二三・五、服は一一号ですね」

「そう。じゃ、服は着てもらえるわね。どれか気に入ったのはあって？」

「え？」

「気に入ったのがあれば、差し上げる。でもね、わたしが死んでからよ。それも、そんなにまたせるわけじゃないからいいでしょう」

「いえ、そんなに大切なものわただけじゃないです。結構です」

「年寄りのたのみを断るの？」

幾度かの押し問答のすえ、紀子は明るい緑色のマオカラーとパンタロンのスーツをもらうことにした。生まれて初めて、真剣に服を選んだ。いつかこの服に袖を通すときには、今日のこの会話を思い出すのだろうか。

「あなた趣味が良いわ。それね、山繭の生地なの。その緑色は天然。きつと似合うわよ。無理に押しつけてごめんなさいね。ついでに、もうひとつ、お願いを聞いてくださいな。こうしたことは、ちゃんと遺言状にも残しますけど、あなたにも聞いておいてもらいたい」

紀子は、初日から予想外の展開にどきどきしてきた。

「重大なことなら苑長の山添を呼んで来ますが」

「いいのよ。そこまでしなくても、お願いといってもたいしたことじゃないんだから。さっき散歩の途中、大きな椿の樹があったでしょう？ 私が死んだら、あそこに埋めてね」

「そんな、縁起でもないことを」

「あらどうして？ いずれ死ぬのよ。それにこんなことはそれこそ元気なときじゃないといえないわ。なにもあしたあさつてに死ぬといっているんじゃないんだから」

「でも、ご主人のお墓には一緒にはいらないんですか」

「それもそうね。じゃ、分骨してもらいましょう」

そういうと、八重は右手の小指を立てて差しだしてきた。

「指きりげんまん」

夕食まで少し休みたいという八重を残して、事務室に帰った紀子はさっそく山添に報告した。

「ふーん、初日から大変だったねえ。でも、いいじゃないか、白藤さんのおっしゃるように、形見わけなら問題ないさ。それから、お墓のことも問題ない。でも、なんで椿なのかなあ」

夕食がすむと、入苑者に付き添ってきた関係者は温泉街のホテルに引き上げて

いった。紀子は食後、八重と風呂に行くことになった。

紀子が脱衣所で服を脱ぎ始めると、「あなたも一緒なの」

「はい。ご迷惑ですか」

「そういうことじゃなくて、あなたまで服を脱ぐことないじゃない」

「だって、お風呂は裸ではいるものでしょう」

「そりゃそうだけど。まあ、たしかにそのほうがこっちも落ち着くわね」

先に脱いだ紀子は入浴用のバスローブを身体に巻きつけると、八重の脱衣を手伝った。そのとき、八重が自分の骨を椿の下に埋めてくれといった理由がわかった。八重の背中一面に椿の彫り物があつたのだ。

「わあ、きれい」

紀子はおもわず声を上げた。紀子の不良仲間にも子供じみた刺青をいれているのがいたが、これほどに見事な刺青をまちかで見るのは初めてだった。

「椿ですね。あ、ここに人がいる」

「あらよく気がついたわね。その人物はね、彫り師のサイン代わりみたいなもの。

やくざの女っていうと世間様のイメージだと、牡丹なんでしょうけど、わたしは椿が好きだから」

「そうなんですか。きれいですね。白藤さんは色白だからよけい鮮やかな色が映えるんですね」

「お世辞言ってもだめよ」

「ほんとですよ。わたしは色黒だから同じものを彫っても枯れた花になっちゃう。これ彫るのは痛かったですか」

「ええ。とつても」

湯船に移ってから、八重に彫り物の蒔蓄をに聞いた。傍から見れば仲の良い母と娘に見えただろう。

§5§

一回目の馴らし入苑を終えた入苑者たちは家族や関係者に付き添われて帰宅した。苑内は緊張と喧騒の後の虚ろな静けさに支配されていた。しかし事務室では、職

員たちが唸り声を上げながら、パソコンと格闘していた。パソコンは人の言うとおりにしか動かない。コンピュータの能力を引き出すのは、人間なのだ。西行苑の事務室の場合、パソコンに命令する側に問題があるようだった。

「携帯のメールだったら速攻で打てるんだけどなあ。なんでこんなにたくさんボタンがあるわけえ」

紀子は両手の人差し指をキーボードの上に泳がせながら「えーとあはどこ？

あ、あ、あ、あ、あった」などといいながら、ぼちぼちと打っている。担当する入苑者の記録を作成しているのだった。

「うるさいな、紀子。だまってやれよ」

そういう健次郎もまた、キーボードにてこずっていた。組にいたときに、パソコン自体にはなじんでいたが、インターネットでアダルトサイトを覗くのが主たる使い道で、報告書などという長い文章を書くのは初めてだった。一番の難点は、変換した漢字が正しいかどうか、わからないことだ。もっと勉強しておけばとは思わなかったが、機械にこけにされているようで、気に食わなかった。

「みんな、苦勞しているね」

山添が声を掛けてきた。山添もまた、人差し指組だった。しかし、スピードが速い。

「苑長、手書きじゃダメですか」

ついに紀子が音を上げた。

「だめ」

紀子はほおをぷつと膨らませて、また、キーボードとにらめっこを始めた。

パソコンとの格闘終わると、今度はミーティングが始まった。職員がパソコンと格闘して作った自分の担当する入苑者のプロフィールを紹介し、また、仕事をしてきた感想を述べた。手が不自由なものが持つには重い食器があること、回廊の夜間照明が暗い——初めての苑生活で寝つけずに回廊を散歩していた入苑者に、夜間の巡回中の職員がであって、腰を抜かすほど驚き、悲鳴が苑内に響いた——こと、風呂の湯加減は個人個人で好みが違うので、大きな風呂だとそのたびに温度調節が大変なこと、食堂のテーブルの高さ調節を楽にしたいことなど、練習段

階では気がつかなかったことが意外なほどたくさん出てきた。至急改良すべきことは、設計士の安藤に伝えられ、手が加えられた。その多の備品については、厨房の加藤や、スタッフリーダーの西川が担当することになった。

二度目の馴らし入苑を経て、最終的な入苑のために全国の入苑者の迎えに出かけるまでの間、職員はミーティングと訓練を繰り返し、そして、パソコンでの報告書作成に追われながら忙しくすごした。紀子はどうとう、携帯で入力して、メールでパソコンに送り、それを、カット・アンド・ペーストして、報告書を作り上げるという荒業を開発した。

＊

健次郎は他の職員より一日早く、担当する岩木平介の迎えに、札幌に向かった。先週、二回目の馴らし入苑のために迎えに行ったとき、とんぼ帰りで苑に戻る健次郎に岩木は「大野君は札幌は、はじめてか」と聞いてきた。実のところ健次郎は、仙台より北に来るのは初めてだった。健次郎が、初めてだというと、次に迎えにくるときに、一日早く来ることはできないかと、尋ねてきた。

「是非、札幌を案内をさせてもらいたいんだ。社交辞令ではないんだ。内地にいったらもう帰ってこれんだろう。大野君を案内するというのは名目でな、本当は自分の縄張に別れをいいたいんだよ。大野君にも、わたしの縄張を見ておいてもらえば、西行苑にいつでも、話がしやすいだろう」

そういうことなら、苑長に頼んでみると健次郎はいった。山添に相談すると、二つ返事で許しが出た。「それはいいことだね。大野君だけじゃなくて、ほかのみんなにも、一日早く行ってもらおう。大野君みたいに、案内を望めない人は、自分で地元の資料館に行ったり、観光バスに乗って、入苑者の町を見てくるといい。名物や祭り、食べ物調べてくれば、苑での会話でも役立つだろう」と、スタッフ全員が一日早く出発した。

先週末きたときには、まだ枝を固く寒風にさらしていた桜も、一週間のあいだに枝もしなやかに、樹皮にも瑞々しさが増していた。

岩木の家は、札幌駅から南へ向かい、豊平川近くの中島公園を望む場所にある。長い土塀に囲まれた大きな門構えをもつ家だ。門を通り過ぎ、土塀に沿って角を

ひとつ曲がつて、さらに少し歩くと勝手口があった。そこで、チャイムを鳴らした。

「どちらさまですか」というお手伝いさんの声がする。

「西行苑から参りました大野です」

「どうぞ」という声と同時に勝手口の門が外れる音がして、戸が開いた。

お手伝いの女性が頭を下げていた。

「大野です」

「大旦那さまから伺っております。玄関へお回りください」

飛び石伝いに歩いた。玄関は、健次郎がかつて暮らしていたアパートの部屋よりも広い。三和土に靴脱ぎのすのこがあり、正面には虎の絵が描かれた襖がある。それが、すーっとあき、目つきの尋常でない男が握りこぶしを作りながら軽く腰を折り「お待ちしておりました」という。

大野は、君には待っていて欲しくなかったと思いながら、男の後について、家の中に入った。

岩木の部屋は母屋と渡り廊下でつながっている別棟にあった。

男が低く声をかけると「どうぞ」という答えがあった。男は身を引きながら襖を開ける。

敷居をまたぎながら大野は明るくいった。

「岩木さん、お迎えに伺いました大野です。お支度のほうはいかがですか」

「やあ、大野君。遠いところご苦労様。あとは、この硯をしまえば、わたしの準備もおしまいだ」

やさしげな語り口調とは、ちぐはぐな顔がそこに合った。北海道一の歓楽街を要する札幌を押さえる組織の元組長の顔だ。表情がない顔だった。

「書をやられるんですね、岩木さんは」

健次郎は床の間の掛け軸を見ながらいった。

「やるというほどじゃない。我流だ」

「若いころからやっておられたんですか」

「若いころは、けんかと食うのに明け暮れていたし、ろくに字もかけないような

男だった。刑務所で習ったんだ。時間はたっぷりあったからな」

そういうと、岩木はにたりと笑った。

背後の襖が開いて、お手伝いが茶を運んできた。

健次郎が茶を飲み干すのを見計らって、「ぼちぼち出かけようか、回るところもおおいことだし」と岩木が声をかけた。それを合図に襖がすーっと開いた。さきほどの目つきの悪い男が控えていた。実に気味の悪い手動式ドアだ。

玄関に横付けされている大きな車に乗り込み、まず向かったのは札幌駅裏の狭苦しい路地の飲み屋街だった。

「大野君。わたしのヤクザ稼業の出発はここです。いまでこそ、こぎれいだが、太平洋戦争直後、ここは闇市だった。しかし、当時のことを知る人はいまじゃ、ここの女将だけですぐね」

岩木は、「小料理ふく」と看板のでている店の木戸をくぐった。店内に入ると、煮しめを作っている香りに包まれた。

「おう。じゃまするよ」

「あら、いわちゃん？　ずいぶん早いじゃないの」

カウンターの中から、割烹着の裾で手を拭きながら女が出てきた。

「どうだい景気は」

「おかげさまで。そちらさんは」

女将は掌を返して大野を指した。

「ああ。今日はお別れにきたんだよ」

「あら、また藪から棒になんです」

「こんどな、内地のホームに入ることになったんだ。この人はその職員。札幌は初めてだというんで、わしの挨拶回りに付き合ってもらっているところだ」

驚く飲み屋の女将に、岩木はいきさつをかいつまんで説明をしている。「なんで」「どうして」「急なのね」「内地なの」「遠いのね」という切れ切れの言葉を発しながら、女将は目に浮かんだ涙を割烹着の裾でぬぐい、合間に、布巾で汚れてもないカウンターの何度も拭いている。

「そういうわけだ、達者でな」

そういうと岩木は店を後にした。車に乗り込んで、岩木が次の行き先を運転手に告げていると、窓を叩く音がした。路地の入口まで女将が追ってきて、車の窓をノックしている。「あけろ」と岩木が運転手に指示した。女将は窓が開くのもどかしげに、ガラスに指を掛け、指先が充血するほど力をこめて押し下げている。

「いわちゃん、お茶も出さないでごめんね。あんまりびつくりさせるもんだから。たまには帰ってくるんでしょう。そしたら、寄ってね。死ぬまで待つてるから。いつもあの店にいるから。いわちゃんとちがって、ほかに行くところないもの」

女将は一気に話すと、窓を乗り越えるように身体を車の中に入れ、岩木に口付けをした。岩木はその背中にやさしく手を置くと、子どもをあやすようにトントンと叩いた。

「いつ行くの?」

「明日だ」

「何時」

岩木が大野のほうを向いた。

「えーと、千歳空港を九時五分の飛行機です」

「見送りに行くからね」

次に向かったのは、ラーメン屋だった。暖簾をくぐって店に入ると、「いらっしやい」という威勢の良い声に迎えられた。

カウンターの中にいた若い男が岩木の顔を見て「あ」というような表情になった。男に耳打ちされた若い女が、店の奥に入っていた。それをみていた岩木は「忙しいときにすまないね」とわびた。

「かまいやしません。どうぞ、お掛けになってください」

店の奥から杖をつきながら、一人の老人がでてきた。どうやら半身麻痺のようだ。

「おお、さぶやん、元気そうだな」

「冗談いっちゃだめだよ。こんなによたよたしちまって。いまじゃ、シナチク一本だってもてやしない。ところでどうしたんだい、こんな時間に。岩木さんがお

出ましになるには、まだお天道様が高すぎるんじゃないのか」

「いや、なに、お別れをいいにきたんだ」

「お別れえ？」

岩木は男に「まあ、椅子に座れ」と促した。

「さぶやんは、愚連隊のころの仲間なんです。でもこいつはこうやってラーメン屋をだし、かたぎに戻り、わたしはヤクザになったというわけです。やくざになったわたしが食べないときに、ずいぶんと助けてもらいました。なあ、さぶやん」

さぶやんは、岩木が丁寧な言葉遣いで若い大野に接しているのが解せないようだった。「こちらさんは」

「大野といいます。岩木様が入苑されるホームの職員です」

ホームってなんだ、と食ってかかるさぶやんに、岩木は西行苑に入ることになったいきさつをかいつまんで説明した。カウンターの若い二人も興味深そうに聞いている。

「しかし、なんだって、そんなに遠くにいつちまうんだよ。ホームなら道内にもたくさんあるだろうが」

「まあ、しかたないさね。かたぎの衆のホームにヤクザは入れないだろうが」

「そんなことあるもんか……」

「そうなんだよ。さぶやんは、はいれるがおれはダメなんだ」

「そんなあ。岩木さんが入るところに俺も入る。良いだろ秀信？」

カウンターの中の若い男に声をかける。

「なにいつてんだい、さぶやん。おまえには、こんなに立派な息子とかわいい嫁さんがいるじゃねか」

「だけどよ」というと、後は声にならなかった。

カウンターの中から女が「岩木さん、ホーム高い？」と聞いてきた。言葉からすると外国生まれのようだ。

「高くはねえが、かたぎはお断りだ。それじゃ、達者で暮らせよ」と店をでようとする、「餃子くらい食べていけ」という。「食いたいの山々だけど、まだ、

先があるからよ」と岩木がいうと、「いつ出発だ」という。すこしでも長く岩木を引きとどめようとしているようだ。

大野がまた代わって答える。さぶは大野に向って、「岩木さんを頼みます。なにかあったら、承知しませんよ」と、お願いなのか脅しなのかわからない言い様をした。

「こら、さぶ、脅してどうする」と、岩木が肩をどやしつけると、さぶは泣き笑いの顔をゆがめた。

このあとも、行く先々で同じような光景が繰り返された。お互いに思いで深い出来事がひとつたつ口端にのぼり、相手が男であれば、手を握り胸をぶつけるように抱き合い、女性であれば綿毛を両手でそっと包むような抱擁が繰り返された。

飲み屋が終わると建設会社や銀行、果ては警察署まで回った。建設会社の社長は帰り際に、岩木の袂に「すくなくですが、お車代です」といって袱紗をすべりこませた。車の中で広げると、銀行の帯封がついたままの一万円の束が三つ出て

きた。警察では、署長以下幹部が総出で見送った。

岩木に付き合っていた健次郎は、一人がこの世に生きて死ぬということに圧倒されていた。岩木が偉いとかすごいというのではない。これだけ多くの人と縁を結び、ともに泣き、笑い、ときに憎み合い、すごしてきた。その時間の厚みと濃度に圧倒されていた。そして、また、それらを断ち切って西行苑に行かねばならない岩木の気持ちを支えかねていた。だいたい、岩木のような大組織のトップがいくら引退したからといって、西行苑に行かねばならない理由が見当たらない。死ぬまで、この町で暮らしてもいいはずだ。子分だって、いやとは言えないはずだ。

「そこが問題なんですよ、大野君。いやと言えない、その気持ちがね、くせものなんです」

岩木は健次郎の問いかけにそう答えた。

「この縄張りはおわたしにしてみれば、かわいい子どもです。手塩に掛けて育ててきた。隠居して、譲るのは、本当はいやなんだ。でもね、わたしもいつまでも元

氣でいるわけじゃない。家族を持った構成員のたちの生活のことも考えなければならぬ。だから、まだ、元氣なうちに、譲るんです。正直、氣が氣じゃない。譲られたほうもそれはわかつている。まわりも比べる。こんなうつとうしいことはないでしょう。だから、遠くに行くんです。遠くで、どうなっているだろうか。氣をもむことはあっても、口出しも手出しもできないければ、あきらめられるかもしれない。そうでなくても、目の前で、自分の縄張りが自分のものじゃなくなっていくのを見るよりも、氣が休まる。譲られたほうも、わたしが目の前からいなくなれば對抗意識をもたないだろうし、樂に仕事ができるだろうし、かえって、こういうとき先代だったらどう行動するだろうと思ってくれるんじゃないかと思うんです」

岩木は大野の質問にそう答えた。

健次郎は、そこまでしなければ、切ることができないほど深い縁を人と結んだことなどなかった。断ち切るのは、岩木が言うようには簡単なことではないだろう。しかし、生きている間に、心をこめて別れを言えるということは、幸せなの

かもしれないと思った。

翌朝、岩木は最後まで荷の中に入れなかった妻の位牌を懷に押しこむと、家を出た。

玄関では現組長以下、幹部が正座して見送った。

「いま、この時間、札幌のヤクザがここに全員いるぜ」。そういうと、岩木はふりかえりもせず、車に乗った。傘下の組の構成員たちがつくる人垣の間を車が門まで進む。

「生前葬みたいなもんだ」と岩木は笑った。門の外にも人垣は続いた。

「さあ、冥土への旅と行こうか。大野さん」

空港までの間、岩木は、振り返ることはもちろん、道端の風景に目をやることもなく、運転手の後頭部をじっと見つめたままだった。健次郎は「寂しいでしようね」という言葉を飲み込んだ。決まっていることをいまさら確認してどうなるというのだ。寂しいといわれても、健次郎にはどうしようもないことなのだ。

幹部たちぐらいは見送りに来るのかと思ったが、空港には誰もいなかった。代

わりに、飲み屋の女将と嫁に支えられたラーメン屋のさぶがいた。

女将は風呂敷包みを岩木に差しだした。「おにぎり。飛行機の中で食べてね。そちらの若い人の分もあるから」

さぶも負けじと包みを岩木に押し付けるように差しだした。

「餃子だ！ 飛行機の中で食ってくれ」

包みの新聞紙をとおして、強烈な匂いがした。ついてきた嫁が「おとーさん、一人で作った。朝までかかった」と説明する。

「さぶ、おまえその身体で……。ありがとよ。だけどよ、おまえたち、ガキの遠足じゃないんだからこんなもの飛行機の中で食えるか」といいながらも、岩木はうれしそうだった。

「じゃあな」

「遊びに行くからな」「愛してるよ、いわちゃん」の声を背に岩木は搭乗口に向かった。

飛行機の中でさぶからもらった包みを開けると三段重がでてきた。岩木が「ま

さか」といいながら重箱を開けると、一段目も二段目も、三弾目もぎっしりと、ちよつと不ぞろいな餃子が入っていた。周囲の客が鼻をくんくんさせている。

さすがに機内では餃子を口にするにはなかったが、東京に着き、苑に向かう列車の中で、岩木は冷えた餃子とお握りをゆっくりと噛みしめるように食べていた。

余った餃子はその夜のホームの職員のおかずになった。

§6§

入苑者の西行苑での生活が始まった。

二〇人の小所帯とはいえ、山添をはじめとして職員もほぼ全員が素人だから、毎日が衝撃の連続だ。スタッフは準備万端のつもりでいたが、毎日のようになか事件が起こった。それは、ときには職員の経験知となり、あるときには、新人職員が入ってきたときに教訓として語られるだろう「伝説」として記憶されることになった。

とくに痴呆の人を担当している職員は、「こっちがおかしくなる」と訴えた。

「むこうはむこうで、常識の世界で生きているわけじゃない。こちららは、それにあわせていくわけでしょ。そうしているうちに、こっちの常識が揺らぐのよ」といって、苦笑いしている。入苑者のなかで、痴呆が激しいものは数人いる。

吉野幸男はその一人だった。徘徊が激しく、おまけに回廊の一カ所でやたらと糞尿をたれる。最初に目撃した職員は絶叫したが、吉野本人にとってはそこがトイレなのだから、覗いた「職員」が絶叫するのは、本末転倒で、叫びたいのは吉野のほうだということになる。吉野のトイレは、回廊が一カ所だけW字に曲がっている暗い隅だった。

職員が、ずぼんをおろしかけの吉野を見つけたときは声をかけて、トイレに誘導することができる。苑では吉野の排便パターンはつかんでいるのだが、回廊での排泄行為は、そのリズムとは関係なく行われるのだ。

「柵でもつくったらどうですか。どっちみち、使い道のないスペースなんですか」という職員や、「監視カメラかセンサーでもつけたら」という職員もいた。と

りあえず、山添の意見で植木鉢を置いてみた。

しかし「肥やしをやらないと、かわいそうだ」といって、吉野の行為はとまらなかつた。そればかりか、鉢の前を通ると、必ず排尿をするようになってしまった。

これには全員苦笑いするしかなかった。提案した手前、山添が毎度のように後始末に走った。

そんなとき、設計士の安藤が苑にやってきた。山添が〈吉野トイレ〉の件を相談すると、その場所を見に行き、「わかりました。うまくいくかどうかわからないけど」といって、街のDIYショップに出かけていった。二時間ほどで帰ってきた安藤は、照明器具と毛布で包まれたものを持ち帰った。

安藤に毛布で包まれたものを、運んでくれといわれた職員が持とうとして「うっ！」といった。「安藤さんなんですか、これ、やたら重いですよ」

「なかみはあとで」といって、安藤はニヤニヤしている。

安藤はまず、〈吉野トイレ〉を照らすように照明を取り付けると、毛布の包み

を解いた。

「不動明王か」と山添がいった。

「これで、効果があればいいけどね」

効果は絶大だった。いつものように〈吉野トイレ〉の前を通りかかった吉野は、朝まではトイレだったことも忘れて、不動に手を合わせている。みていると、ポケットを探って、入っていた十円玉をお賽銭にまでした。

「やった」と職員は喜んだ。

しかし、吉野はそれほど甘くはなかった。

吉野の本能だかなんだかわからない欲求がほかのトイレを要求したのだ。そして、それはかならず満たされた。

ふたつめの〈吉野トイレ〉には、山添がこれでも効果があるのかなといいながら「招き猫」を置いた。

「招いちゃまずいんじゃない」という職員もいたが、大丈夫だった。

つぎの〈吉野トイレ〉には、くまのぬいぐるみを置いたが、これは見事に失敗

した、あわてて、山添が観音さまを奉った。観音様は無事だった。次は弁天、その次は――というようにつづけているうちに、回廊には、七福神がそろった。吉野はついに観念したのか、回廊で排泄することはなくなった。

はからずも完成した七福神ロードは、他の入苑者にも好評で、朝晩かかさず巡るものもでてきて、おもわぬ効果がもたらされた。

それをみた設計士の安藤は、大笑いした。季節は初夏に変わり、苑も生活の場としての落ち着きをもってきた。自分の部屋のレイアウトに忙しかった入苑者も電気スタンドの置き場所、鏡台や小さな水屋箆笥の位置、ベッドとテレビの微妙な位置関係が落ち着くに連れ、近所の山を散歩したり海岸まで降りて散策したり、温泉街で買い物や映画を見ることもおおくなった。みんな、「お客さん」から「生活者」になりかけていた。一人一人に生活パターンができて始めるのと同時に、職員もようやく苑の生活リズムがつかめてきた。

苑になじむにつれて、昼間が暇だという声が出てきた。特に女性の入苑者から、なにかサークルをという声が強くあがった。

サークルは当初、苑のほうで用意することはしないという方針だった。サークルに参加を強いるようなことは、おとなに対してすることじゃないというのが、苑長の山添の意見だった。

「刑務所じゃないんだから、暇な時間の使い方まで、指図するのはよくないだろう。それに、サークルをやるとなると、職員にだってそのぶん負担がかかるから賛成できない」

しかし、入苑者の声に対して職員で協議した結果、見ず知らずの人たちが集まって一カ月にも満たない状況では、きつかけは苑で提供すべきだろうということになった。

「あの、岩木さんが書道がお好きなので、書道教室をやっていたらどうですか」と健次郎が提案すると、「渡辺さんは囲碁がセミプロの腕前だといっていました」「柏原さんは華道の免状もっているそうです」という声が次々とヘルパーの中からあがった。山添は写経の会を開くことにした。

「おい、だれか体育会系はいないのか」と山添が職員に聞いた。

「警備の森下さんが水練をやるそうです」と厨房の加藤がいった。

「水練てなに？」職員が一斉に聞き返した。

「寒中水泳なんかで、水の中で扇に字かいたりするやつです」

「ああ。でも、あんなの習いたい人いるかな」

「まあ、いいじゃないか、いなければやめればいいのさ。ほかに、体育会系はいないのか」

「真、おまえ野球できるんじゃないか」

健次郎が横にいた真をせっついた。真は顔を一瞬歪め、よけない事をいうなという眼差しで睨み返してきた。

「船堀君は野球をやるんですか？ 硬式や軟式は無理でも、三角ベースとかソフトボールだったらいいかもしれないね。やってくれますか」。すかさず、山添が声をかけてきた。

健次郎がやればいいじゃんか、と小声で言うのと、真は山添にこくりとうなずいた。真がやるなら俺もとばかりに、直治が手を上げた。

「おれ、スケボーだったら、教える自信があります」

すぐさまスケボーは、老人には危険すぎるんじゃないかという声が上がると「やったこともないのに、どうして危険だと決めつけるんだ」と怒り出した。「スポーツに安全なものなんかないじゃないか。それに、やった事ないもののほうが、興味もわくんじゃないの」。真はむきになって言い返す。自分の好きなものを否定されたのがしやくに障るらしい。結局、山添の「まあ、やってみよう」という一言で採用になった。

山添がさっそく岩木、渡辺、柏原の三人に講師を頼みに行くと、三人は快く引き受けた。

華道、書道、囲碁教室などの開催は、回覧板で入苑者に知らされた。

森下の水練には誰も参加希望者がいなかったが、意外にも原のスケボー教室には五人の応募があった。真の野球も参加希望者がいたが、いかにせん数が足りない。サークルにするのはやめにして、職員も参加して、不定期にソフとボールの試合を開催する事になった。

一番の人気は書道だった。岩木は講師を引き受けると決めると、健次郎に助手を命じ、書道専門店から、硯や墨などを買い寄せた。

岩木の手跡は実に見事だった。上手とか綺麗というのではなく、風景や時間を写しこんだような字だった。山は山を描き、緑は緑、生は生だった。字から立ち上る風景や色は書く時々で違って見えた。

生徒の一人として参加していた山添が素直に感想をいうと、「字を教えてください。た刑務官もそういった」という。

「何年も外の世界と隔絶された刑務所の中で外の世界を思いながら書いていたからかもしれないな」

生徒たちが、「書道家としても食べていけないんじゃない」というと、「そんなに甘いもんじゃない」とにべもない。

「たしかに、最初は書道展にだすと入選した。面白いからといって、個展をやらなにかという誘いが来たこともたびたびある。でも、こちらがヤクザだとわかれれば、それっきり。それまでは、名もなき書道家だったのが、突然ヤクザでちよっ

と字がうまい奴になってしまふ。字がうまい、書に才能があるんだけど、たまたまヤクザなんだというふうに、世間は考えてくれないんだよな。一般社会だったら、サラリーマンで書道家とか、絵描きとか、いるじゃないか。でも、ヤクザにはヤクザという属性しかないのさ」

「そうだ」といったのは、囲碁の講師を引きうけた、渡辺一美だった。渡辺は中部地方の小都市で組を張っていた。

「おれはね、岩木さんと違って、ヤクザになる前から、じいさんに教えられて、囲碁をやってたんだ。喧嘩も強かったが囲碁も強かった。プロ棋士の道も考えたこともある。でも、いつのまにかヤクザになっちまった。それでも、街の碁会所にいっちゃ打ってた。ある日、その会所じゃ唯一おれと対等で打てるやつが、負けた腹いせに『渡辺さんに勝つと、後が恐いからな。なんせ、あの人はこれだから』といって、頬ぺたに指で傷をつけて見せたのさ。たまたま、おれは碁会所に入るところだった。おれは、聞こえなかったふりをして入っていった。そいつら真っ青になったね。それきり、だれも相手してくれなくなった。囲碁とヤクザは

関係ないのに、ヤクザには、ほかの属性つてのかい、肩書きっていうのかな、それを世間は認めてくれないんだよな。まるでヤクザになるやつは生まれつきヤクザだと世間は思いこむ。ヤクザに生まれる奴は一人としていないんだ。それでいてよ、暴力団は街から出ていけという。でていくのはいいけど、どうやって食うんだい。足あらうったてよ、刺青や前科背負った人間を、ソニーや任天堂が雇ってくれるかね？」

渡辺のことばにみながうなづく。

「おまけにこんな年寄りになってみれば、ちつとは、世間様も許してくださるかなと思つたら、世間様でも年寄りは、員数外に扱われている。員数外同士仲良くすりゃ良いものを、かたぎの年寄りの奴らは、俺たちを寄せ付けない。自分たちよりも外だか下だかしらねえが、とにかく、自分たちのほうがましな員数外だと思いたいんだろな。おれたちは、人生で二回もドロップアウトしたというわけだ」

「そんなこといったら女なんか、三回よ」と筒元晶子がいった。彼女は、東京の下町を縄張りにもつ組の姐さんだった。

「まず、女というだけで、男社会から排除される。次にヤクザの女、そして年寄り。救いが無いよ。惚れた御方がたまたまヤクザなのに、まるで生まれつきのヤクザな女になってしまふ。子どもを学校に入れても、PTAの役員になんて声は聞違つてもかからない。子どもも『ヤクザの子ども』になつてしまふなつてしまふ。どんなに頭が良くても性格が良くても、『ヤクザの子』なんだよ。サラリーマンの子なんていういいかたするかい。こんなこといわれるの、ヤクザだけさ。そりゃヤクザは悪い。決して正義だとはいいいやしない。でもさ、かんがえてみないよ、ヤクザがみんな悪人というわけじゃないだろう。正義面した政治家や公務員にだって悪人はたくさんいらあね」

「世間なんてそんなもんよ。見た目や肩書きで判断するの。死んだうちの亭主なんか、サラ金に突っ掛けサンダルで行ったら断られて、ネクタイ締めていったら金貸してくれたつて、馬鹿にしてたわよ。まあ、ヤクザのくせしてサラ金に金借りにいくなんてことからして、根性がないんだけどき。だから、早死にしたわ」と、大泉クマは豪快に笑う。

サークル活動の開始は、おおむね成功だった。みな、部屋から出てくるし、手を動かしながら話も弾む。見知らぬ同士の結びつきを築くにはもってこいだっただろう。

怪我が心配されていたスケボーも、問題はなかった。ヘルメットをかぶり、ひじやひざにクッションをつけ、手首や足首にはあらかじめテーピングをさせただけじゃなく、直治は参加者には内緒で、スケボーのすべりをわざと悪くして、すいすいと滑走しないようにした。直治は「怪我が心配だ」とほかの職員に言われたことを根に持っているらしく、「絶対に怪我なんかさせない」と意気込んでいた。そのとぼちちは参加者に及んでいて、スケボーの練習前にみっちりと柔軟体操をやらされている。

さすがに、自分の親や組長が、スケボーをやっているのを目撃した関係者は、怒鳴り込んできたが、本人がケロッとしているんだから、しょうがない。「いい年してスケボーなんて」などというおうものなら、ものすごい剣幕で、関係者を喝する。

「なにするな、かにするないうんじゃない。おまえらは俺の親か？ それともなにか、俺が死んでから、スケボーやりたかったあーと化けて出てもいいのか」といわれれば、黙るしかない。たしかに、スケボーに乗った先代が、シャーツと音を立てながら襖を突き破って、枕元に立つのは気分のいいもんじゃない。

＊

「大野君、そのままじゃ富田さんが死んじゃうわよ」

富田美佐をベッドから車椅子に移動していた健次郎に西川が声をかけた。健次郎は富田の腰に手を回し、「じゃ、富田さん立ちますよ」と、声をかけて立ちあがったところだった。

ベッドの端に腰掛けた富田に思いきり前傾してもらい、富田の前に少し離れて腰をおろした健次郎の肩に顎を乗せてもらった。人間は立ちあがるときわずかに前傾し頭が下がる。そうすると自然に腰が浮く、というメカニズムを利用した介護技術だった。健次郎は実習で習ったとおりうまくいった、完璧だぜ、内心想ったのだが、身長差を忘れていた。健次郎は身長一七五センチ、かたや、富田は一

六〇センチほどだった。富田は完全に顎が上がり、爪先立ちになっている。

「富田さん、ごめんなさい!」

健次郎はあわてて、富田を車椅子に抱え下ろした。富田は苦しかったのだらう、ゼイゼイいつている。

「いいんだよ、健ちゃんみたいな色男に抱かれていけるなら本望さ。だけど、つぎはもう少し気持ち良くいかせておくれ」

ヘルパーたちのほとんどが新人だから、健次郎に限らず失敗、失笑の連続だった。もっとも、入苑者もなうての人間ばかりだから、なかにはヘルパーをからかって娯楽にするものもある。

娯楽の対象にされ、怒り狂って「辞める」といいだすヘルパーもいる。しかし、山添は「君のほうが圧倒的な強者」なのだという、西川の受け売りを披露して、なだめてしまうそれでも、駄々をこねつづけると「ここを辞めてどこへ行くの?」と、気持ち悪いほどやさしい声で聞いてくる。「君が辞めたら、組長さんにたのんで、別の人を送り込んでもらわないといけないね」。ここまでいわれると、

「辞めます」とはいえない。組から縁を切られたようなものとはいえ、挨拶に行くのが筋だろうし、挨拶に行けば、指を詰めるとはいわれないまでも、骨の二三本、歯の一、二本は覚悟しなければならぬだろう。おまけに、それでヤクザの世界にももどれないのだ。

ヘルパーと入居者は決して対等の立場ではない。とくにここ西行苑ではことさらだ。入居者に「上下関係でものごとを進めないでくれ」とくぎをさしたところで、そうした世界で何十年も生きてきた人間にとっては、習慣を変えることは難しい。しかし、ヘルパーがここから逃げられないのと同様、入居者もまた、帰るところなどどこにもないのだ、相手が自分の存在なしには、生活できないのだということに気がつく、世界が変わってくる。精神的な部分での立場の逆転は、ほんの少しヘルパーの氣を楽にした

とにかく、笑いと悔し涙の絶えない職場だった。

健次郎とチームを組んでいる原直治は、みためも実際もまじめな性格の職員だった。ときに融通が利かないときがあつて、板前の加藤に「愚連隊上がりなの

に、なんでそうまじめの上にばかがつくんだ」といわれると、「ヤクザなのにまじめというのは矛盾しているかもしれないが、それこそ偏見というもので、ヤクザにだってまじめなヤクザがいる」とまじめにいい返す。あんまりまじめなので、組のほうでももてあまし、今回の西行苑プロジェクトを機に、放擲されたようだ。そんな直治が石田保の部屋から絶叫とともに、転げ出てきたのは、午前中のベッドメイキングの最中だった。

直治の担当する石田は、東北の政令指定都市で一家を構えていた男だった。武闘派として若いころから売りだし、ミスに厳しく、恐れられていたらしい。組員で、小指のあるほうが珍しいという噂の組だった。

声につられて、隣の部屋で作業していた職員や、ベッドメイキングで部屋を追い出された入苑者の話し相手をしていた山添が集まってきた。

「どうした、原君」

山添が声をかけながら、石田の部屋を覗く。石田は、ベッドの脇のテーブルの前にすわって新聞を読んでいる。

「石田さん、どうしたんですか？ 原君がなにかしましたか？」

「いや、なんにも。ベッドメイキングが終わって、一緒に話をしていたのさ。そのとき、趣味はなんですかって、原君が聞くから、これのコレクションていったのさ」

石田は「これ」というとき小指を立てて見せた。

「見たいか？ て聞いたらさ、見たいっていうから、そこの戸棚を開けてみろっていったのさ。そして開けたら、絶叫して、でていたのさ。まったく、最近の若いもんときたら軟弱というか」

山添が「ぼくも見せてください」といった。

「ああ、いいよ。だけど、わめかないでくれよ。朝っぱらからうるさくてしょうがない」

山添が戸棚を開けた。枕やシーツを手にした職員がその背後から、覗きこんでいる。

なかには小さなガラス瓶が並んでいた。どういうわけか、真ん中には、線香立

てと鈴があった。

ガラスびんの中には芋虫みたいなものが入っていた。

「きゃッ」といって、女性の職員が人のかたまりを崩すように廊下に飛びだしていった。びんの中身は、人間の小指だった。

「石田さん、若い者をからかっちゃだめじゃない」

「からかってなんかないさ。ちゃんと、これといったよ、俺は」

石田は再び小指を立てて見せた。

「それを原君がさ、勝手に勘違いしたんじゃないの。エロビデオでもはいつてい
るとおもったのかね」

そういいながら、石田は楽しそうに笑った。

直治はそれとおりと思った。実際、アダルトビデオだろうと思っていたのだ。
まさか、小指のホルマリン漬けとは思ってもよらなかった。わかっていれば、これ
ほどまでに驚きもしなかったと、いまさら後悔してもはじまらない。

やくざが小指を落とすのは、不始末をしでかしたときだ。つまり、世間では小

指がないと「やくざ」ということで恐れられるが、やくざの世界の常識で言えば、小指のない奴は、間抜けということになる。

不始末を隠すことなく、二度と繰り返さない証だというが、なぜ、やくざだけが、そういうことをしなければならぬのか、いまだに直治は理解できないでいた。決して名誉でない傷を体に残すことになにか意味があるのだろうか。

直治はいちどだけ、その場面にいくわしたが、それはひどいものだった。切り落とすはめになった奴は、顔面蒼白、脂汗を流していた。何度も気合をかけて、ドスに力をこめようとするのだが、ためらう。そのたびに、激痛が走る。しまいにや、見かねた兄貴分が、そいつの手をおさえつけて、そばにあったガラスの灰皿をドスの背に叩きつけた。本人は気絶し、小指は落ちた。

直治は一緒に見届けていた兄貴分に「もういちど、どじを踏んだらどうするんですか」と尋ねた。指を詰めるようなどじはそうそうないとはいっても、ミスは、予想外に起るものだ。そして、えてして、同じやつの身の上に。

「つぎつぎと指を落とすでもおもったか。まあ、あんまりどじを重ねる奴は、

指を落とす前に、命がないからなあ。もし、次に指をつめなけりやならないようなことがあったら、そんなときは、第二関節から先だな。その次は根元に向ってすこしずつ刻んでいくのよ」

山添は背伸びしてビンの一つを手にするとうラベルを読んだ。名前と、罪状、年月日が書かれていた。よくみると、きちんと年代順に並べられている。数えるとちょうど五〇個あった。

「しかし、良く集めたもんですね、石田さん」

「だって、捨てるわけにもいかないしさ。最初はね、若い奴への見せしめというか、教訓として集めていたのさ。それがね、いつのまにか、こんな溜まっちゃった。それでもさ、四九で長い間止まってたのよ。でも、数が悪いさ、四と九じゃ。だからさ、無理やり、こじつけで指詰めさせた、最後の奴は。ははは」

のんきに笑う石田をみんな啞然として見つめている。たしかに、四九個目と五〇個目のあいだには一〇年近い開きがあった。

「そりゃひどいことしたなあ、石田さん」

「うん、これでもちよつとは、氣に病んでるんだ。なにも最後の奴ばかりじゃねえよ。みんなに対してさ。持ち主はほとんど死んじまったからね、毎日拝んでいるのさ」

そういう石田の顔は、死なせた金魚や犬を惜しんでいる程度にしか見えなかった。

「ああ、そうだ、山添さん。ちようどいいからお願ひしておくよ。俺が死んだら、そいつらも全部棺おけに入れてくれ。あの世に持って行ってやらないとな。あの世でも小指がないまんまじゃ、かわいそうだ。生まれ変わるときにもヤクザに生まれたんじゃ、不憫だからさ」

まだ、からかっているのかと思ったが、まじめな顔をしている。山添は、「わかりました。記録に残しておきますから大丈夫です」

「ありがてえ。よろしくお頼みますよ」

石田は、山添に向かって手を合わせて頭を下げた。山添の後ろには職員もいたから、みな、思わず頭を下げた。

「原君さ、べつに驚かすつもりはなかったんだ。かんべん」

石田は、みんなの後ろにいた原に向かつていった。

「ぼくのほうこそ、大きな声をだして申し訳ありませんでした」と、まじめな原はどこま大まじめに、腰を深々と曲げて頭を下げた。

入苑者のいたずらは、なにも職員に向けられたものだけではなかった。見舞い客もその被害に遭うことがある。もつとも、その多くは、痴呆の進んだものがすることだから、いたずらではないのだが……。

松尾幹郎という入苑者がいる。痴呆がかなり進んでいる。徘徊などの問題行動の時期は過ぎているのだが、毎日のように、なにかしてくれる。

肥り気味の松尾は、性格も温厚でいつもここにこしている。ヤクザの世界で生きてきた人間とは思えない。事実、かれをここにいれた組長は「おやじさんは、ヤクザにしておくのが惜しいような人間でした」という。おやじとよぶが、松尾は組長だったわけでも実の父親でもない。

「ぐれかかったやつが組にはいりするようになる、まず諭すんですよ。ヤク

ずになったって、何一つ良いことはないよ、ってね。傍から聞いてりゃ、ばかばかしいんだが、一〇人中九人はそれであきらめます。そんなときはおやじさんはちゃんと仕事も見つけてやるんですよ。地元じゃ、おやじさんにそうやって、人生をまっすぐにしてもらった奴がわんさかいるんです。残りの一人はね、ヤクザにしてやんなきゃ、こいつは救われねえっていうんです。わたしも含めて、いまの組のもののほとんどは、おやじさんに育てられたようなもんです。だから、ぼけが始まってからも、組のもんがみんなで世話してね。今回、わたしはおやじさんをここに入れるって決めたときには、若い衆から、つるし上げ食いました」と、組長は苦笑いする。

たしかに、週に一回は、誰かしら見舞いにくる。組関係者のときもあれば、かたぎの場合もある。どちらかというと、かたぎのほうが多い。出身地は決して近くないのに、見舞い客の多さでは入苑者のかたぎでトップクラスだった。

見舞い客に対しても、松尾は終始笑顔で接している。決して「どちらさんでしたかね」などとは問いかけない。帰り間際には、「辛抱して頑張りなさい。見栄

を張ったり背伸びをしちゃいけないよ。人にはそれぞれ分つてものがあるからね」と説く。見舞い客は「ありがとう、おやじさん」といいながら、笑顔で帰っていく。大概は、ほほえましい光景が繰り広げられるのだが、時々、事件を起こしてくれる。

その日は、組の若い衆が見舞いにきた。職員にも愛想よく「オヤジには世話になったんだ。こんなところ——あ、いっけねえ。施設にいれることはないんだ。組長ときたら何考えてんだか」などという。

一日中、かいがいしく、散歩や食事の世話をし、風呂もいっしょに入って背中を流していた。その姿は職員は「親子だね、まるで」というほどだった。

彼が帰るとき、松尾は玄関まで見送った。

「じゃ、またくるから、おやじさん。元気でね。みなさんおやじさんのことよろしく頼みます」と頭を下げた若い衆に、松尾は「きょうは遠いところご苦労さんだったな。これ土産だ、途中で腹が減ったらくいな。さっきおれが握ったんだから」と、風呂敷包みを差し出した。

「おやじさんが作ってくれたのか。おやじさんのおむすびはうめえからな。ありがとう」と顔を輝かせ拝むように受け取った。

その場に居合わせた山添と大野は「自分で握った」ということばに違和感を持ったが、あえて確かめもしなかった。名残りおしそうに振り返りながら、駐車場までの道を歩いていく若い衆が、土塀の影に隠れてしばらくすると、「ぎゃー」という声と、ガジャンという瀬戸物が割れる音がした。

山添と大野が「どうしました」といいながら走りだした。土塀を二つ曲がったところで、街灯の下にうずくまっている男を見つけた。

「大丈夫ですか」

「あ、すみません。大声をだして」という若い衆の周囲には砕けたどんぶりと、ラップに包まれた団子のようなものが四、五个散乱していた。

山添がそれを拾い上げて「あ」といった。「うんこだ」

松尾は自分の排便を使って「握り飯」を作ったのだ。ご丁寧に海苔まで巻いてある。

「ほんとうにおやじさんの握り飯はうまかったんです。懐かしくて、待ちきれなくて、俺のために握ってくれたかと思つたら、一刻も早く口いっぱいにはおぼりたくて、この街灯の下で開けたら……。でも、それを落とすちまうなんて、おれはダメだ。糞でもなんでも、おやじさんが作ってくれたんだ。俺のためににぎってくれたんだから……」

そのあととは声にならずに、男は地に伏して泣きだしてしまった。

山添に肩を叩かれ、立ちあがった男は、風呂敷きを広げ欠けたどんぶりを拾い集め、握り飯もなかにいれ、包みなおすと、「おやじさんをよろしくお願いします」と、深深と頭を下げて帰っていった。

苑に戻るとみんなが「どうでした」と聞いてきた。山添が「いやなに、石に躓いてどんぶりを落としてね。大丈夫、怪我はしていないから」

「しょうがねえ奴だな。せっかく作った握り飯を」と松尾がいう。

「大丈夫だよ、松尾さん。ちゃんとラップにくるんであったじゃない。食べられますよ。若い人も謝ってました。おやじさんがせっかく作ってくれたのに落とす

てしまつて申し訳ないってね」

「そうかい。あやまることはないや。石に躓いたんだらう。あとで行つて、その石を蹴飛ばしてやつから」という、松尾のまじめな言い様にみな笑つた。

事務所に戻ると、守衛の森下から電話が入つた。

「駐車場に降りてきたお客さんが、車の中で泣いているんですが、何かあつたんですか」

「いや、そのままにしておいてください。門のほうは閉めていいですよ」

「そうですか。それじゃ、門を閉めて、巡回しながら苑に戻ります」

「ご苦勞様です」

§ 7 §

苑の周りの雑木林では蟬がうるよう鳴いている。毎日のように「事件」が起つた日々もいつのまにか過去のことになっていった。

入苑者の生活も落ち着いてきた——というよりも、余裕がでてきた、と山添は

感じていた。

「まあ、なかには余裕のありすぎる人もいますけど」といったのは、紀子だ。

「鯉沼さんなんですけど、また無断で外泊です。苑長から注意してくださいませんか。外泊はいいけど、せめて連絡をくださらないと」

「そうだな」

鯉沼の外泊は、ここのところ毎週のように繰り返されていた。せめて、連絡くださいと頼むと、「へへ、つい時間を忘れちゃって。なんせ、口説いている最中なもんで」と悪びれる様子もない。

鯉沼の外出先は温泉街の中の歓楽街だ。本人のいうように、女性のいる店に入りしているようだ。

鯉沼は七〇を越えているが、かくしゃくとして、みなりもさっぱりしていて、顔つきも男前の部類に入る。娑婆では、人生の大半をジゴロとして暮らしてきたという。鯉沼が「女はわたしの飯の種ですから」といったことがある。「切らすとね、身体に良くない」ともいった。

「まあ、やめろとはいいませんから、せめて連絡だけはください。でないと、身元引受人のかたに連絡せざるをえませんよ」

「うわあ、それだけは勘弁してくれ。今後は絶対に連絡を入れます。約束します」
鯉沼は入苑当初から、女性問題を起こしてきた。女性職員の身体に触れたり、夜勤の職員に抱きついたりした。

このときは、再三の注意にもかかわらず、聞き入れないので、山添が身元引受人に連絡したのだ。

鯉沼の身元引受人は、横浜に一家を構える谷野という男だった。山添の電話を受けると、すぐにとんできて、挨拶もそこそこに鯉沼の部屋に入り、扉を閉めた。谷野の陰しい顔に、さすがに心配になった担当職員がドアの前に待機していたが、怒鳴り声も物音もしないうちに、一〇分もすると谷野はでてきた。部屋のまえから逃げるチャンスを失って、ドアに耳をつけた姿勢のままで突っ立っていた山添に「もう、二度とご迷惑はおかけしませんから」と言い残し、谷野はさっさと帰っていった。山添たちが部屋をのぞくと、鯉沼がしなだれていた。

「大丈夫ですか、鯉沼さん」と声をかけると、「大丈夫だ」とだけ答えて黙っている。

この日を限りに職員に対する鯉沼のちょっとしたいは止んだ。余りの豹変に職員の間では「一〇分でいったいなにがあったのか」ということが、しばらくの間夜勤のときの話の種になった。山添も、つい下世話な根性丸だして、感謝の電話をするついでに、谷野に尋ねた。しかし、「鯉沼のおじきの名誉にかかわることですから」とやんわりと拒絶された。

しかし、今度は外泊が始まった。それまでも、ときには、酔っ払って、付け馬を連れてくることもあった。見舞い客と称して、ホステスを呼びこみ、昼日中から、自室でくんずほぐれつしていたこともある。このときは、あまりの声の激しさに、入苑者が集まってきた。職員がノックしても「苦しいんですか、鯉沼さん」と声をかけても返事がない。しかたなく飛び込んだ職員は啞然とし、あわててドアを閉めた。集まった入苑者や職員が「なんだ」「どうした」とい聞いて来る。飛び込んだ職員は顔を赤くしながら「Hしている」とだけ答えてうつむいた。

すいぶんと待たされた。

「鯉沼さん、がんばるねえ」などといいながら、入苑者も鯉沼の部屋も前から立ち去ろうとしない。めったにない刺激だから、追い払うわけにもいかない。

職員は、声が収まるのを見計らって改めて咳払いともにノックし、なかに入った。

「何が悪いんだ」と鯉沼は居直った。「なんだったら、みんなの前でして見せてやろうか」とまでいう。

「べつにセックスすることが悪いんじゃない。でもね、好き嫌いや好みがある。鯉沼さんのことをうらやましく思っても、できない人もいるでしょう。他の人に悟られないようにして欲しい」というと、「わかった」という。

わかったという鯉沼の返事が外泊だった。再び糾すと、「じゃあ部屋でやるぜ」と脅してきた。そっちがそこまでいうなら、苑としては、身元引受人に連絡をとることになるのだが……。

「とにかく、それだけは勘弁してくれ」

「それじゃ、今後は必ず連絡を入れてください」と、鯉沼から一札とった。

しかし、それがさらに困った事態を引き起こすことになった。

かならず連絡をいれてくるのだ。それも女性とセックスをしている最中に。受話器の向こうから女性の喘ぎ声が聞こえてくる。電話を取った職員は閉口した。それでも、約束どおり連絡はいれているのだから、文句はいえない。

その夜も鯉沼は、苑で夕食を取ると、めかしこんで出かけていった。その夜の夜勤の健次郎、紀子たちのチームの面々は、その背中を恨めしそうににらんだ。鯉沼からの「その電話」を取るとおもうと気が重くなるのだ。

「やめて、っていうと、面白がって、もつと聞かせるのよね。もう、あたまきちゃう。泊まっている場所くらい聞かなきゃならないから、こっちもすぐには切れないじゃない。そうすると、なかなか場所をいわずに、いろいろと聞かせるのよね。あるときなんか、クチャクチャ音がするから、なに？ ガムかんでんの？ て聞いたら、しばらくして、息を荒くしながら、どうだった？ って聞くのよ。なにが、っていったら、いまのさ、女とつながっていた場所の音だぜ、だって。顔が

真っ赤になっちゃった」。紀子は「そのとき」のことを思い出してまたすこし頬を赤らめている。

「なんでそんなことするのかなあ」

「自慢？」

「そういうこともあるだろうけど、わたしたちに自慢してもしようがないじゃない。たぶん、生きてるぞって叫びなんじゃないの」

居残って事務処理をしていた西川が答えた。

そんなことをいいながら、事務所の夜はふけていった。

そして、一時、門限時間に電話が鳴った。職員が譲り合う。紀子を取ると、面白がつて長電話になる。長電話になると、老体の鯉沼にも無理がかかるだろうということまで健次郎が取った。

「はい、西行苑です。はい？ はい、鯉沼さんは当苑の入苑者ですが。ええっ、どこですか？ 病院は？ え、はいっはいっ……」

夜勤の職員はその電話が鯉沼の異変を伝えるものだと思直感した。西川が大野が

書きとめているメモをのぞきこむと山添の部屋に電話を入れた。

「どうしたの、大野君。鯉沼さん腹上死？」

「西川さんも大胆なことをしていますねえ」

そこへ山添が駆け込んできた。

「鯉沼さんが亡くなったって！」

日ごろの願望はこういうときに突如現れるものだ。

「あのおー山添さん、それって、願望ですか？ 西川さんよりひどいな。怪我です。怪我」

「ああ、よかった。酔っ払って転んでもしたのか？」

「いや、ぼこぼこに殴られて素っ裸で路上に倒れていたらしいです。命には別状ないけど、骨が何ヵ所か折れているみたいです」

とにかく山添と大野が病院までいくことにした。

温泉街へいったんおり、また山を登ったところに病院はあった。鯉沼はまだ救急処置室にいた。顔はあざだらけで、右腕が固定され、腹から胸にかけても包帯

に覆われていた。左足首も固定されている。

鯉沼は、山添と大野をみると、「よ」と口を動かした。声はかすれて出ない。「ご家族ですか」と看護婦が尋ねてきた。おおかた、息子と孫にでも間違えられたのだろう。

「いえ、鯉沼様にご利用頂いている施設のもんです。容態は？」

山添が看護婦に容態を聞き、今後の手続きを聞いている間、大野は鯉沼のベッドサイドに腰掛け、話しかけた。

「いったいなにがあったんですか？」

「あとで」とかすれた声でいう。看護婦のほうをチラッと見たところをみると、他人、とくに女性には聞かれたら恥ずかしいことらしい。

結局、鯉沼は入院となった。

翌日、パジャマなどを持って病院に行った健次郎は、鯉沼から怪我の理由を聞くことができた。

あきれた理由だった。美人局にあったのだという。

本人も「まったく、鯉沼さんであろうものが」と苦笑いしている。以前、飲み屋で目をつけた女性に粉かけて、昨夜ようやくホテルに行く約束を取り付けたのだという。店を出て、ホテルに入って、シャワーを浴びて出てきたら、「こわいおにさんがいてさ、笑いだしちまったよ。だってさ、美人局で食ってきた男だぜ、おれはよ。それがさ、自分がその目に遭ってしまうんだから。焼きが回った」こわいおにさんは、腰にタオルを一枚巻いた姿で笑い転げる鯉沼に焼きをいえて、身包み剥いで――剥ぐまでもなかったのだが、外に放りだしたそうだ。それでも笑いこらげていたので、殴られ蹴られしたんだそうだ。

「だって、おかしいじゃねか」と、鯉沼はまた思いだしたのか笑いだした。笑いながら「まったく焼きがまわったもんだ」と繰り返した。

山添が鯉沼の怪我を身元引受人の谷野に報告すると「良い葉です。お世話かけました」といわれたらしい。「管理責任はどうなっているんだ」という叱責を予想していた山添は狐につままれたみたいだといっていた。

「どうやらね、組にいたときに、実力者の愛人と知らずに、手をだして、死にか

けたらしい。それを、谷野さんが、ここにいれることを条件に許してもらったそうだ。こないだの密談もね、どうやら、あんまり悪さをすると横浜に連れて帰って、実力者に引き渡すということだったらしい」

「タマ取られたら、鯉沼さんもこまりますもんね」と大野がいうと、西川が「大野君たらなにいつているの、いやね」という。

「なにがですか」

「玉とるなんて」

西川がまじめな顔をしているので、山添も大野も大笑いした。

「たまつてのは、命のことですよ。西川さんたら、なんだと思ったんですか」

「いや、だから、その、キン、タマ」

山添は机を叩いて笑っている。大野は腹を押さえてうずくまった。

「でも、西川さんのいうとおり、玉を取られれば、鯉沼さんもすこしはおとなしくなるかもなあ」と山添は涙を拭きながらいった。

そして実際、この事件が、鯉沼の悪さをやめさせるきっかけとなった。

鯉沼は鯉沼で、焼きが回ったということにショックを受け、大野が見舞いに行くとたびに、弱々しくなっていた。ダンディーさのかけらもなくなった。

大野が看護婦に「迷惑かけてないですか？ 検温のときにお尻とかオッパイとかさわりませんか」と聞くと、大野が触るんじゃないかと看護記録で胸を押さえながら「鯉沼さんはそんなことしませんよ！」と怒るぐらいだった。

そうした豹変を大野がからかって、鯉沼は「もうだめだよ。そんな元気ない」という。

鯉沼に胸を触られて怒りだしたヘルパーが見舞いに行って「早く元気になって、お尻でも胸でも触ってよ」といっても「嫁入り前のお嬢さんがそんなこといちやダメだ」と諭したというから重症だ。

職員は、いたずらが止んでほっとする反面、元気がなくなるのはよくない兆候だと感じていた。

からだの傷は徐々に癒えていったものの、精神的な傷は日に日に深くなり、鯉沼の全身を蝕んでいった。

声をかけないと、パジャマも交換しないし、頭もぼさぼさ、齒も磨かない、目やには溜まっている。ひげもあたららない。いま、病院のベッドにいるのは、つい数週間前の鯉沼とはまったく別人だった。

職員一同が鯉沼の精神的ダメージを回復するすべを考えあぐねているとき、入苑者の光山貴子が事務所に山添を訪ねて来た。彼女は、鯉沼と同じ横浜の出身だった。

「鯉ちゃんの具合はその後どうですか？」

「傷はだいぶ良くなったんですけど、精神的に参っちゃっているみたいで」

鯉沼の入院の原因はすでに入苑者全員に知れ渡っていた。

「年甲斐もなく、張りきっちゃったんでしょね。鯉ちゃんは、これはとおもった女性にはとことん優しかったし」

「ご存知なんですか」

「ええ。同じ横浜でしたからね。組は違いましたが、系統は同じだったから、うわさはちよくちよく。うちの人なんか。あんな軟弱な野郎はいけすかねえって、

嫌ってましたけどね。若いころは、そりゃ良い男でしたよ。震えがくるぐらい。凄みもあって、優しくて、甘くてね。みんな夢中でした。ええ、わたしもちよつとくらつときたこともあったわね。でも、あたしは、ほら、こんなおかちめんこだから、鯉チャンは鼻にも引つ掛けてくれなかった。あの人にとっちゃ、わたしは、舞台のかきわりみたいなもんですよ。見えちゃいるけど、ただの風景」

光山はひとしきり、鯉沼の思い出を語ったあと唐突にいった。

「お見舞いに行っちゃダメですか」

「ダメなことなんかないです。是非行ってやてください。とにかく、元気づけてやってください」

光山は最初こそ一人では恥ずかしいからと職員と一緒に見舞いに行っていたが、そのうち、一人で行くようになり、洗濯物を持ち帰ったり、厨房の加藤に鯉沼の好物を作ってもらっては、運ぶようになった。

最初のうちは、鯉沼は反応を示さなかったらしいが、問わず語りに娘時代のことを話しているうちに、鯉沼も「そういや、あのころそんなことがあったなあ。

あの娘はその後どうした？」などと聞いてくるようになったという。

光山は毎日のように見舞いに行き、そのたびに鯉沼は元気になってくるようだった。実際、山添や他の職員が見舞いにいくと、見違えるような鯉沼がいた。なによりも、看護婦からの苦情が増えたことが快復のなよりの証拠だった。

「鯉沼さん、元気になったのは良いけれど、看護婦さんを困らせるようなことをしてはダメですよ」

「あんなのはこんにちのは挨拶みたいなもんですよ。それにね、信じちゃもらえまいが、子ども相手はやめました。そりゃ、わかい女も良いです。これは、ぜったに良い。でも、年増もこれまたいい。なあ、おみつさん」

鯉沼の掬い上げるような流し目を送られた光山は、恥ずかしそうにうつむきながら「ばか」といった。山添は、みるみるうちに朱に染まる光山のうなじに見惚れていた。

「ほらねえ、苑長。この、ばかっていいかたが いいよね。情がある」

「わたしには良くわかりませんが……」

「苑長も修行が足りないねえ」

山添はやれやれと思つたが、とにかく鯉沼が元気なつたことはよかつた。

入院から二カ月後、鯉沼は光山に付き添われ、看護婦のあかんべに見送られて退院した。ヒグラシがカナカナと鯉沼を迎えた。

＊

よくなるものもいれば、悪くなるものもある。加齢は死に支度である以上、仕方がないのだが、本人の意思とは関係なく進んでいくので、困つたものである。西行苑にきて容態が加速度的に悪化したのが、小林茂喜だった。

小林は西行苑では異色の経歴の持ち主だった。元警官だ。もっとも、その経歴の半ばでドロップアウトし、ヤクザの世界に落ちたのだが――。

痴呆が進行途上にあり、時々素にもどるのだが、次の瞬間には、こちらの窺い知れない時空に飛んでいる。職員の間では、掟知らずのタイムトラベラーとして、恐れられていた。

なんせかんせ、涙ながらに昔話をしているかと思うと、突然、職務質問をはじ

めたりするのだ。

「ヘルパーさんよ、あんたいくつだったかな」

「あたしは、二五歳ですよ」

「そうかい。俺にも娘がいてさ。こいつがねあるとき、俺をさ、にらむようにしていうんだよ。お父さんは何座？　てな。おれはおとめ座だとこたえるとき、ちがう！　おとうさんはヤクザだって。小学生の卒業アルバムによ、将来は婦人警官になりますって書いた娘がよ」と涙を流す。

ところが、しばらくすると、「なんでこんなことしたんだ！」とくる。

「こんなことって、なにが？」

「しらばくれるな！」

「だってわからないもの。興奮しないで、小林さん」

「貴様警察をなめるのか」といわれて、初めて、目の前の小林が掟知らずのタイムトラベラーになったことに気がつく。ヘルパーもおくればせながら、時空を飛び越える。

「ごめんなさい！ 今度のことだって、ほんの出来心です。なんで、スーパーのダイコンなんか、それも、四分の一にカットしたやつなんて万引きしちゃったのか」と、できるだけ、小さな犯罪をでっち上げてしまうのだ気持ちと時間に余裕があれば嘘涙をサービスする。すると小林は「まあ、そう、自分を責めるな。できごころはだれにでもある。肝心なのは二度と繰り返さないことだ」と許してくれる。小林は警官時代はやさしいおまわりさんで通していたらしい。それが、なんでやくざに落ちたのかは神のみぞ知るだ。

小林が善良なおまわりさんにもどったところで、職員はすかさず耳打ちする。「庭に怪しい人影があつたので、見まわってきてください」

「そうか、わかった」と、小林は敬礼して庭に出て行く。自分が車椅子に乗っていることは、矛盾に感じないらしい。

小林の職務質問癖はときに、ほかの入苑者に向けられて、悶着を起こすこともある。「今日のところはこれでご勘弁」などと袖の下を渡そうとしようものなら、袖の下が食いかけのみかんであっても、激怒することはいうまでもない。つい

「へ、何いってやがんだ。まる暴のお下がりヤクザのくせしやがって」といおうものなら、小林は相手に跳びかかっていく。幸いというか、車椅子なので、相手が元気な人間ならひよいと逃げられてしまう。もちろん、車椅子を疾駆させて追いかけるが、追いかけているうちにタイムトラベルするので、大事には至らないのだ。

不思議なことにこのタイムトラベルは、絶対にヤクザの時間には戻らない。理由は聞くだけ野暮——なのだろう。

阿多文次も小林と同じように、痴呆が進んでいる男だった。旅回りの役者あがりのヤクザで、部屋を回ってみかじめ料をとるのが癖だった。食堂のおばちゃんも格好のかもだった。しかたないので、おばちゃんは、いつもエプロンのポケットに百円玉を入れている。「これで勘弁してね」というと、阿多はぎょろりと目玉を回転させて、「ちえ、しけてるな。まあ、繁盛してねえんだからしかたねえか」と許してくれる。

かとおもうと、「親分、てえへんだー」といって、バリアフリーで段差のない

部屋の入口でこけながら部屋に駆け込んでくる。阿多に駆け込まれたほうは、機嫌が良ければ小遣いをやって追い払うし、虫のいどころが悪ければ蹴り出される。それでも、阿多は懲りずに繰り返す。

阿多は賑やかで、酒が入ると頼みもしないのに、芝居を一幕演じてくれる。映画の解説もうまい。苑で名画鑑賞をするときには、かならず阿多にお伺いを立てる、すると、弁士顔負けに、映画の見所を解説してくれる。映画よりも面白いところがあるいっぽうで、ほかの映画の筋がはいりこんで、まったくちがう映画の解説になってしまうのはご愛嬌だ。

船堀真が担当している岩原明仁は阿多や小林と違い、痴呆はないが、入苑後、持病のパーキンソンが一層進行した。立ちすくみが出る頻度が増え、たったいまスタスタと歩いていたかと思うと、突然足が一步も前にでなくなってしまう。そのため、トイレに間に合わずもらしてしまうこともある。そうしたとき、岩原はなんとも悲しい顔をして、真に衣服の交換と清掃を頼む。

「そんなにすまなそうにすることないですよ、岩原さん。これがぼくの仕事なん

ですから」と、明るく真が混ぜ返しても、すまないとわびる。

「まともに畳の上で死ぬるとは思ってもしなかったが、まさか、こうして最後を迎えるとは思ひもよらなかったよ。まったく、人間こうなったらおしまいだ」

「なにいつているんですか。一度や二度の失禁で。しかも、それだって、岩原さんの病気のせいじゃないですか。気がつかないうちにじやなくて、トイレに行くこととするけど、身体が言う事聞かないだけじゃないですか」

「それがさ、問題なんだよ。あんたら若いものには、トイレに行くなんてどってことないだろうけど、いまのおれにとっては、一仕事なのさ」

岩原は両手で膝をなでながら、床を拭いている真のうなじに向かってポツリポツリと話す。

「飯を食う事と、トイレに行く事を忘れたら、人間から一步踏み外すと、おれは考えているのさ。そうになったらおしまいだ。そうになったら一思いに死んでやろうって。でも、いまじゃ、死ぬ力もなくなってきた。これは怖いよ。悲しいよお」

真は床を掃除しながら、岩原のいうとおり、自分にはわからないと思った。山

添や西川に、年よりの気持ちがあわかったふりをするのは止めるようにと、言われているので、肯定も否定もせずにとだ黙って聞いていた。

「この世に生まれて、オムツが取れて、人間の仲間入りして、いっぱしの人間——とは言えないけど、頑張って生きてきて、ある日突然、人間止めると、神様が告げるのさ。船堀さんもうそれそうなるんだよ」

岩原はそういつて笑う。真は、岩原の話を聞きながら、高校二年の初夏の「あの日」を思い出していた。

「ばくも、神様の突然の宣告を受けたことがありますよ」

真は小学校から野球をはじめた。少年野球で主力打者を務め、中学の野球部では四番を任された。真の暮らす地方で甲子園常連の高校の野球部に入った。さすがに、実力者がそろったチームなので、一年ではレギュラーにはなれなかったが、二年生になって、レギュラーの座を掴んだ。このとき、真に、プロ野球選手になるという夢が芽生えた。

しかし、夏の甲子園をめざした地区予選のある試合で、肩に激痛が走り、それ

以来、野球ができなくなってしまった。真にとって、不運な事に、その夏、チームは甲子園に出場し、優勝こそ逃がしたが準々決勝まで進む活躍を見せた。真は、とてもじゃないが、応援などできなかった。本当は自分が立っているはずのグラウンドにいるチームメイトを応援する気持ちなど、胸のどこを搔き回しても見つけられなかった。「なんで俺なんだ」と思った。

「船堀さんよ、それも辛い事だったとはおもうけど、いまの自分とはちがうよ。船堀さんのは、挫折、青春の蹉跌ってやつだろう。人にはひとつやふたつ挫折はあるもんだ。おそらく船堀さんは、その挫折でぐれてヤクザになった。そして、いまはヘルパーだ。おそらく、ヤクザに引導渡されて、ヘルパーになったときも、挫折したんじゃないか？ だけど、それでも生きていられるじゃないか」

岩原の言葉は真にとって凶星だった。ヤクザに引導渡されるつてのもつらいものだった。ようするにくずにくずと言われるのだ。しかし、これ以上ぐれると言うのは、洒落にならない。

「わたしは、このままでいるしかないんだよ。なにものにもなれないんだ。なに

ものにも変われないんだ」

岩原はそういったきり黙ってしまった。真はきまわずくなって、「床の拭き掃除は終わりました。汚れ物は洗濯にまわしておきますから」といった。

「すまない」。岩原は繰り返した。

「岩原さん、そんなにおっしゃるんだったら、夜だけでもベッドサイドにトイレをもってきましようか。そうすればくらヘルパーに気兼ねすることもないし、ぼくたちも岩原さんにいらぬ気遣いをさせないですむと思うんですけど」

真は、ずれてしまった話を戻すように提案した。言葉がちぐはぐになってしまったのは、思わず自分のことを話してしまった照れの裏返しだった。

「いまじゃね、ポータブルトイレも、豪華なんですよ。お尻を洗ってくれる機能もついているんです。岩原さんのイメージではペコペコの白いプラスチックのイメージがあるだろうけど」

「いや、どうせならオムツにしてくれないか」

岩原は真のいらだったような言葉遣いを意に介さず、静かに言った。

「え、オムツ？　でも、あれは気持ち悪いよ。ぼくも研修のときに、実際に付けてみたんだけど。岩原さんは歩けるし、おしっこしたいという意識もしっかりしているんだから、やめたほうが良いと思うよ」

「いや、おむつがいいよ。がきだつてつけてるんだからいいじゃねか」

「だけど、赤ちゃんだって、おむつが濡れれば、むずかるでしょう。決して気持ち良いもんじゃないと思うけどな」

「おれがいいってんだから、いいじゃないか」

「そうですか。じゃ、西川さんにも相談してみます」

事務所にもどる真の頭の中にあつたのは岩原のオムツのことでも、ポータブルトイレのことでもなかった。なんで、自分の挫折のことなど話したのだろうかということだった。いままでの自分だったら絶対に話すことなどなかった。もっとひどいこともある、自分も同じような経験をしていると話すことで、相手を慰めようとしただけなのかもしれない。しかし、考えてみれば、岩原に限らず、西行苑の人々は、心も身体も文字通り傷だらけの人間の集まりだ。しかし、西行苑で

は誰一人、自分の人生を愚痴るものなどいない。真の挫折など、蚊に刺されるほどのものでもないと考えるのも当然だ。

それにしても、自分が話すなんて——真は、自分が信じられなかった。しかし、それは決して、気分の悪いものではなかった。

事務所に戻った真がミーティングの際に西川に岩原のトイレの件を報告すると、やはり、おむつには反対だった。なんとか説得してみるという西川に対して、山添がいった。

「ぼくにはね、岩原さんの気持ちが少しわかるんだよな」

「苑長までが何をいうんですか」

「いや、西川さんのいうことは正しいんだ。それにね、西行苑はとても良い施設だ。不幸なことに、入苑者が特別なために、見学や視察を受け入れていないけど、本当はモデルになってつても良いぐらいだろう。事実、設計士の安藤さんは、S苑という名前で、プランを雑誌などに発表している。取材が結構あるそうだよ。だけどね、個室にポータブルトイレを置くだろう、するとね、景色が似るんだよ

なあ、独房に」

「はあ？ 独房ですか」

「そう、刑務所のね。設計した安藤さんも、そこまでは気がつかないんだろうな。壁の作りや色はぜんぜん違うよ。だけどね、セツトが似るんだな。それが、思い出させる。いま、君たちの話を聞きながら岩原さんのファイルを見ていたら、岩原さんは数回お勤めしている。だからね、きつと思いだすんじゃないかと思うんだよ。ぼくもね、施設ができたばかりのころに、一人で個室に入ったときに、ふとおもったんだ。ここにトイレがあれば独房だって」

「山添さんも刑務所に入ったことあるんですか」

「はい。あれ？ 西川さんにはいいませんでしたか？ 失礼しました。前科一犯のまだひよっこですがね」

「こちらこそ余計なことをお聞きしました。でも苑長がおっしゃるとおりだし、でも、おむつには、通常の成人であれば抵抗があると思うんですが」

「そうですね。でもこの人はみんな通常の成人じゃないから。人間的であると

か、人間としての尊厳であるとか、そういったものを剥奪された生活をしてきているからね。だからこそオムツに抵抗がないのかもしれない」

結局、西川がオムツは夜だけ、それも、トイレに間に合わなかったときに漏れを最小限にとどめる一回かぎりのものにするということで、決着がついた。

オムツをつけ始める日、真が素っ裸になって岩原につけ方を説明した。

「こうやってこの尿取りパッドのなかにチンチンを差しこむんです」

「赤ん坊とは違うんだな」

「ええ。岩原さんの場合、オムツはあくまでも備えです。岩原さんもほんのところは、オムツの中におしっこするつもりはないでしょう。でも、万が一、トイレに行きたいのに体の自由が利かなくなったときに、僕らヘルパーへの気遣いをなくすためのものだと考えています。だから、岩原さんの考えているようなオムツは不要です」

岩原はべつにそんなことは考えていないといった顔つきで、尿とりパッドの手触りを確かめている。岩原が使うのは、シート式のパッドではなく、コンドーム

型のオムツとでも言えばいいのだろうか、袋状になっているものだった。袋まで覆うところがコンドームと違っていい。

「結構大きなものでしょう？ 赤ん坊とはチンチンの大きさが違いますから。さあ、自分でやってみてください、岩原さん」

真に声をかけられると、岩原はパンツを脱ぎ、まじめな顔つきで尿パッドでチンチンを覆った。そのまま、鏡の前に立ち、自分の姿を眺めた岩原は吹き出した。「そういや、どっかの土人によ、チンコにこんなものつけているのがいたな。こりゃ、なかなかぐあいがいいよ。白つてのは、味気ないから、色違いや柄もあるといいねえ」といって、おどけて見せた。

「そうですね。今度業者がきたら、言っておきましょう。それじゃ、おやすみなさい」と真がいうと、「わがままいってすまねえ。ありがとう」と岩原が答えた。事務所に戻りながら、ありがとうといいたいののは、僕のほうだ、と真は思った。先日、岩原とオムツの事で言い争った夜、自室でビデオをみた。高校野球の監督にももらったものの今までいちども見た事はなかった。どういうわけか棄てられ

なかった。ノイズだらけの画面に、甲子園でプレーする懐かしい顔があった。真の失ったポジションにはいった、見たくもないと思っていた奴の顔も、不思議と懐かしくみられた。存外、良いプレーをしているのに素直に拍手を送った。準々決勝で負けた瞬間には涙が出た。

西行苑にいる人々は、まっとうな人生を歩んできたものなら、転がったまま立ちあがらずに、寝転んだまま生きてきただけじゃないかと言うかもしれない。なぜ立ちあがらなかったと責めるかもしれない。でも、それは、一度も転んだ事がない人間の言いぐさだ。

立ちあがらなかったわけじゃない——真はそう思っていた。なんども立ちあがろうとしたが、できなかった。あがいてあがいてきた。それが、西行苑にきて、無理に立ちあがる必要はないじゃないかと思えるようになっていた。

転んだまま死ぬんじゃない、普通の人はまっすぐ上に伸ばす幹を、横に横に伸ばすだけだ。無理やり正当化する必要はないが、横に枝を伸ばしつづける事のほうがはるかに辛いともいえる。

西行苑の人々の枝も、まっすぐ横に伸びているんじゃないくて、ところどころ、垂直に伸びようとあがいた傷があるのかもしれない。だから、愚痴など言わないのだろう。

＊

岩原の一件以来、刑務所を思いだす瞬間ということが職員の間で話題になった。「そういえば、志水伸江さんがね、わたしは大風呂が嫌いなんだっていった。刑務所での一斉入浴を思いだすんだって」「そうそう高橋さんもいってました。手は上げたままで風呂に入るとか」

トイレや風呂のことは参考になるんじゃないかとおもって、設計士に安藤に知らせてやったら、「まじめにいつているのか!? そんな「ヤクザ仕様」の施設なんか公然と作れるわけないだろうが。そんなことしたら隔離だよ隔離!! バカヤロー」とファックスで返信がきた。

松島九州男は、苑の入苑者の中では目立たない人だった。山添の般若経の講読会に参加する以外は、自室でテレビを見たり、散歩をしたりして一日を過ごしていた。規則正しい生活を避けているように見えた。時間を意識することを避けているというか、時の流れを止めたような生活だった。

「隠居暮らしてあんなものなのかあ」と職員は話し合っていた。

陰気というのではない。話しかければ愛想よく話に乗ってくるし、ときには、自分から積極的に話し掛けてくる。とくに家族が来るとはたからみても、テンションがあがっていることがわかる。松島は珍しく、「家族」に恵まれていた。本人は物心ついてからの人生のほとんどを、極道の世界で生きてきたのだが、妻も子供たちも、そういう夫や父親を避けることもなく、まっすぐに育っていた。

敬老の日には「おじいちゃん、いつまで長生きしてね」と書いた絵を孫にもらってにこにこしていた。

しかしその夜、就寝前の巡回で松島の部屋を訪れていた職員がくずかごに捨て

られている絵を見つけた。間違つて捨てたのだと思った職員が、「松島さん、これ落ちてましたよ」と拾い上げて絵を渡した。松島は黙って受け取り、机の引き出しに閉まった。

「だけどよ、長生きしてその先に何があるんだろうな」とポソといった。

職員が記録に時刻を記入しようと、手首をみたがない。入浴介助に入る前にはずしたままだった。松島の部屋を見まわしたが時計が見当たらない。

「松島さん、今何時かわかる？」

「夜だよ」

「そりゃわかつているけどさ。時計置いてないんだ」

「会社づとめや、学校にかよっているわけじゃないんだから、昼か夜か、その区別さえつけば、生きていくのに不便はないさ」

「そうだね。時間に追われて暮らすものものせわしないものね」

「いや、時間に追われるのは結構なことさ。でもね、いまのおれにとっちゃ、時計は、死ぬまでの時間を教えてくれる道具さ」

「縁起でないことを」

「おやすみ」

突然、話を打ちきって、松島はベッドの上で寝返り、壁を向いた。職員は照明を落として、部屋から出た。

その松島が、ようやく夏が終わったとみんなの意見が一致するようになったころ体調を崩した。食欲がなくなったので、夏ばてかとおもい、食のすすみやすいものをだしていたのだが、いっこうに改善が見られない。

山添が医者につれていった。胃がんだったあっけないほど簡単に診断がつくほど、末期のものだった。

医者は山添にいった「どうしますか、本人にいますか」

山添は悩んだ。この場合、ガンの宣告は死の宣告だった。考えているうちに医者を恨んだ。どうして俺が決めるんだ。こうしたことは医者が決めることではないのか。インフォームド・コンセントは医者の義務ではないのか。

山添は、宣告することとしないことで、その後はどう変わるのか、教えて欲し

いと医者に尋ねた。

「わたしたち医者にできることにたいして変わりはありません。ガンという言葉を使うか使わないかだけです。ガンという言葉を使わない場合でも、本人には、手術は体力的・年齢的に無理があることを伝え、その上で、すこしでも体内の腫れを小さくするために薬による治療をするかどうか聞きます」

「本人が治療を拒否したら」

「松島さんの場合はいまのところさほど痛みは激しくありません。しかし、今後転移したガンが加速度的に増殖し、痛みが出てくるようだったら、可能な限りその痛みを押さえ、普通の暮らしを送ってもらえるようにします。治療としてはそちらが主眼となると思います」

山添は「他の職員にも相談します」といって、苑に帰った。松島は検査入院という理由で、二、三日泊まってもらうことにした。

苑にかえって、職員に説明して、意見を求めた。山添とおなじように、まずは、どうしてそんな重荷をわたしたちが背負うのかと、医者を非難する意見が出た。

積極的に宣告すべきという意見の理由は、自分たちが嘘をつきとおすのが辛いというものだった。結局、医者にガンという言葉を使わずに病状を説明させるということになり、次の日、病院に松島の主治医を尋ね、山添はそう伝えた。

医者は、看護婦に松島さんにきていただくようにと伝言を依頼した。

「山添がここで説明するのですか？」と医者に尋ねると、怪訝そうな表情が返ってきた。

「どこか、会議室のようなものはないのですか。ここではカーテン一枚の向こうには、患者さんが待ってます。中の声は聞こえますよ。本人がどんな顔してでてくるんだろうと待ってますよ」

「まあ、そんな意地悪な人はいないだろうけど。たしかに、あなたのいうとおり、配慮が足りませんでした。それじゃ、会議室にしましょう。あそこなら、レントゲンも見られますから」

診察室にやってきた松島を伴って、会議室に入った。

医者は懇切丁寧に説明した。松島は口をはさむことなく、聞いていた。

「このあとどうするかは、松島さん次第です」

「おれは死ぬのか」

「いずれは死にます」

「ガンなのか」

松島に尋ねられた医者は山添の顔を見た。

「どうなんだ、ガンなのか」

「そうです」

「治療したら直るのか」

「現段階では、そして、わたしには保証できません」

「他の医者に聞いても同じか」

山添は医者がむっとするのではないかと思ったが医者は穏やかにいった。

「ほかの医者の意見を聞きたいというのであれば、県立のガンセンターを紹介します」

「そうか。どれぐらい生きられる」

「わかりません。三カ月から一年といったところです」

「正月は越せるんだなあ。越したからといっていつて、なんの意味もないが。わかった。治療は一回限り抗がん剤治療を受ける。その結果で次を考える」

すべては決まった。まずは松島の全身の状態が調べられ、松島の身体に潜むガンの地図が描かれた。全身に転移が進んでいた。抗がん剤が投与された。

一カ月後、小さなガンは消えたが、胃や肺に転移した大きなかたまりには変化が見られなかった。医者は大きくなっていないだけかもしれません。松島は、「抗がん剤は最低限にしてくれ。それ以外の治療は拒否する。ただし、もし痛みが出たら、神経を引っっこ抜いてでも、痛みを取り払ってくれ」

医者は請けあった。

薬をもらって、一カ月ぶりで苑に帰った。帰りの車の中で、松島は聞いてきた「苑のみんなは知っているのか？」

山添は、職員は知っている。そして、医者に宣告するかどうか決めてくれといわれたことを話した。その上で、今回のわたしたちの決定が松島さんにとって、

よかったということを願っていると付け加えた。

「そうかい。みなさんには、とんだ重荷を背負わせちゃったね。それから、苑の職員だけじゃない、他の人にもいつてくれ」

「いいんですか」

「ああ。かまやしない。みんなに、早く良くなつてとか、顔色が良くなつたとか、いわれたくないんだ。そのたんびに、おれも生き残る振りをしなくちゃならんだろう。それはつらい。若いときはそれも必要だろうけどね」

「それじゃ、自分でおっしゃってください。ぼくたちにはいえません。人生の残り時間を気にしているのは、松島さん、あなただけじゃない。他の皆さんもそうです。そこに、突然、残り時間までのカウントダウンが始まってしまった人が現れたら、みなさん動揺します。だから、職員からは積極的に伝えることはできません」

山添がそういうと「たしかにそうだね。落ち着いているようでも動揺していただね、おれも。じつはさ、医者にガンだといわれたとき目をつむっちゃったのよ。」

夢であってくれと思ったんだ。いつもさ、死ぬまでの時間がどうのこうのといきがつていたわりにはだらしがないよな。それで、目を開けたら、どうなっていたと思う」

「まあ、残念ながら夢じゃなかったわけですから、目の前が真っ暗になりましたか」

「真っ暗なら良いさ、モノクロの世界になっちまったんだ。色がすっかり抜けちまつてるのよ。目を何回ぱちくりしても色が戻ってこないんだ。医者にいたら、ストレスだろうって」

「いまもですか」

「いや、治療を止めて苑に帰ると決めたandtんい、とろけるように色が戻ってきやがった」

「松島さん死ぬは恐いですか」

「なんだい、藪から棒に。そうだなあ、死の宣告を受けた割りには、まだ、実感がないと言うのが正直なところかな」

松島は薄く笑っている。

「恐いことは恐い。でも、その恐さは、ボケる恐さよりはましかもしれない。自分で自分をコントロールできない時間が長く続くよりも、死ぬのは、すぐにおわることですからね。仏様は、死ぬ時の事をどう言っているんだ。断末魔ってぐらいだから、魔がくるのかね」

「わたしは自慢じゃないですが、こう見えても俄か坊主ですから、仏の教えと言われても困るんですが、断末魔というのは、魔物と言うより、死に際に吹く風のことだということを讀んだ事があります。風といっても骨と肉が切り離されるほどの苦しみだそうです。また、千の剣で身体を裂くような痛みだとも言います」

「聞くんじゃなかったよ。たのむから、末期の水を酒にして、酔ったままあの世に行かせてくれよ」

「それが、松島さん。末期の水と言うのは、功德でもなんでもなくて、天魔の作業と思えるほど苦しいものだそうですよ。末期の水が命を縮める事もある」

「まったくいいことはないねえ。なんか、こう、ほっとするような教えはないの

かなア」

「臨終には、松島さんが常日頃言われているように、頑張れとか、死ぬな、なんてことをいうべからずと教えてますね。それに、薬は病気を治すもので、命を永らえるものではないとも。そういう意味では、松島さんには、教えることなんてないんじゃないのですか。逆にお聞きしますが、死に際、死んだ後、要望はありますか」

「とくにないけどね、あんたのいうように、取りすがって泣かれたくないんだよな。人間の感覚器官で最後までこのころのは聴覚だというじゃないか。完全冷え固まってからなら大丈夫だろうけど、まだ死んでいないときに、それをやられるかと思うと、ぞつとしないね。万が一耳に届いたところで、どうしようもないんだから。だけどね、一人で死ぬのは恐いんだ。ひとりぼっちでさ。一緒に死んでくれと言うんじゃない。死んでいく自分のそばに誰かいて欲しい。だれでもいいんだ、泣き喚かなきゃ。犬や猫でもいい」

「わかります。わたしも死ぬのは恐くないけど、一人で死ぬのはいやですね。死

はたしかに自分自身の問題ですけど、一人の存在がこの世の中から消えると言う事の意味はまた別にいあると思うんです。その瞬間をみまもって、欲しいですね」

「それからさ、坊主に向かって言う事じゃないけど、お経は止めてくれ。なにいわれているのかわからないものをきかされても、ありがたくもなんともない。その代わりに、今のうちに、なんかこう、気の利いたことばをおしえてくださいよ」
「気の利いた言葉ですか」

「そう、死に際にさ、みんなに残していく言葉。山添さんがいまいったように、俺の死は、俺だけのものじゃなくて、みんなにも分かち合って欲しいんだけど、おれとしては、泣かれるだけじゃ嫌なわけですよ。だからね、俺の死は、あんたとってこういう意味なんだよって伝えられるような。あ、できるだけ短いのだよ、なんせかんせ死にかけがいうんだから、言い残すようなことがあっちゃいけない」
山添は、落語に出てくる与太郎みたいな口ぶりで加えた。

山添は考え込んだ。車はミカン畑の中を苑に向かって登っていく。バックミ

ラー越しに、運転手が、病院帰りのものに、死ぬのなんのという話をしても大丈夫なのかという視線を送ってくる。

「そうですね。俱会一処ですかね。これは西行苑職員のモットーでもあるんですが」

山添は運転席の背に差しこんである広告をいちまい引きぬき、字を書いて見せた。

「俱会一処、どういう意味だい」

「ともに一つ処で会うという意味ですが、死者を看取る生者もいずれは、おなじ極楽に行きますといったことです。死に行く人が生者に授けることばとしてもおかしくはないと思います」

「おさきに、あっちでまってるよってことだな」

＊

松島は時計のない部屋に戻った。

苑の入苑者は松島の退院祝いをやった。その席で、松島はみずからが、ガンで

あることを宣言した。

「負けるな」という声もあがった。しかし、松島は静かにいった。

「近々死んでしまうものがみなさんのお側にいるのは、辛気臭いかもしれません。でも、病院では死にたくない。死ぬときは、ここで死にたいんです。家族のところにさえあれば良いじゃないかとおっしゃる人もいるでしょう。でも、あそこは、わたしの居場所じゃないんです。ヤクザになって、かたぎの世界から飛び出てしまった俺ですが、こどもたちは関係ない。だから、必死になって、家を家族を守りました。あそこは、俺の居場所じゃないんです。夢です。ここへ来るのもみな反対しました。でも、きました。もう、自分には夢を守る力がないからです。死ぬときは、ヤクザのまままで死にたい。ヤクザだった老人として死にたい。ガンにかかったあわれな男としてではなく、ヤクザの松島九州男として死にたい。これ以上、自分の世界を失いたくないんです。迷惑でしょうが、よろしく願いします」と松島は頭を下げた。

「わかった」と岩木が声をかけた。その声にみながうなづいた。

＊

松島の退院祝いの翌日、鯉沼と光山がそろって事務所に山添を訪ねてきた。

「山添さん、ちょっとご相談が」と鯉沼がいう。その顔はさほど深刻そうでもないので、山添も「はい、なんでしょう」と気軽にこたえた。

山添は目で促すが、もじもじして、互いに肘で突つきあっている。

「どうなさいました？　鯉沼さん、光山さん。なにか困ったことでもありますか」

「いえ、そんなんじゃないんです。あの、この人が」と光山は目で鯉沼を指した。「この人が一緒にならないかって」

「いやね、山添さん、いい年してみつともないと思うんだけど、これまで、おれはさ、結婚してものをしたことがなくてね。きのうさ、松島さんの退院祝いでね、考えちゃったのよ。そうだ、おれもいつまでもうかうかと生きちゃいけないんだってね。そうしたらさ、突然やりのこしたことが頭の中をぐるぐる回っちゃって。ガキのころはパイロットになりたかったんだけど、そんなのいまさら無理だし、頭の中でさ、ぐるぐる回る奴を射的の的みたいにパツツンパツツン落として

いったら、最後に残ったのが、所帯を持つてことさ」

鯉沼は一気にまくし立てた。

「あのお、所帯をもったら、苑を出なくちゃならないんですか」

光山は不安そうに聞いた。

「わたしも、娘のころ胸を焦がしたこともある鯉沼さんと人生の最後に添い遂げられるんならそりやうれしんですけど、ここでも、暮らしちゃいけないし。この人も苑を出たら殺されるっていうし」

「苑をでる必要はないでしょう。でも、一緒の部屋をすぐに用意できるかどうか」

「なに、そんなことはかまやしないさ」

「でも、せっかく所帯をもたれるんですからね。形もしっかり整えなくちゃ、ねえ光山さん」

「お願いします」と光山は頭を下げた。光山は鯉沼がニヤつきながら突っ立っているのを見て、頭を押さえて下げさせた。

山添は「ちょっとだけ時間をください。そんなに何日も待たせませんから」と

二人を送りだした。

二人が「よろしくお願いします」と頭をもう一度下げて事務所から出ていくと、職員からは「知らぬは本人たちだけってやつですね」と声が上がった。

そうなのだ。鯉沼が美人局に会って大怪我をし、退院してからというもの、鯉沼と光山はいつも二人で過ごしていた。夜も時々、会っていたようだ。職員も抱き合っている二人を見かけたし、隣室の入苑者から苦情も出ていた。

「なんとかしておくれ」と最初に事務室にいいにきたのは、光山の隣室で暮らす野田清子だ。

「二人がさ、仲良くするのはいいんだ。嫉妬しているんじゃないよ。だけどさ、毎晩のように、聞かされちゃ、……ね」

「聞かされちゃうって、なにを？」

実はまだこのときは、二人が深い仲になっていることに職員は気がつかなかった。

「知らないの？」といって、野田は自分がものにした「スクープ」に気を良くし

たのか、身振り手振りを交えて説明してくれた。毎晩のように光山の所へ鯉沼が忍んできてはいちゃついているんだという。

「みっちゃんきたら、激しいのよ。声のあげかたが。最初に聞いたときには、びっくらこいてさ。心臓でも苦しいのかと思って、聞き耳立てたのよ。そうしたらさ、男の声が聞こえてきてさ。ああー死ぬとかなんとか」

そこまで言つて野田は口を押さえた。遮音のいいはずの仕切り壁越しに、そんなに聞こえるわけじゃないじゃない？　といった疑わしい顔を職員がしたからだ。

「あ、断つておくけど、盗み聞きしたんじゃないよ、聞こえてきちゃうんだよお。信じておくれ」

野田は言い訳がましくいった。たしかに鯉沼の事だから、仕切り壁をわざと薄く開けておくぐらいのことはしかねないが。

野田にいわれてから、職員もそれとなく注意してみると、たしかに二人の仲は急に親密になったようだ。

当人たちは隠しているようだったが、誰が見てもあきらかだった。入苑者の

リーダー的存在の岩木や渡辺も、山添や西川に「あの二人一緒にさせてやったらどうかね」といつてくるほどだった。

山添は「まあ、本人同士がいいですまで待ちましょう」と答えた。

そういうわけで、二人の仲が順調に進展すればいずれは、「結婚したい」といつてくるだろうという心構えはできていたし、もし、一緒になりたいといつてきたときには、部屋割りをどのように変更しようかということまで、考えていたのだった。

さつきは勿体つけて二人を帰したが、これまで、隠していたお返しにちよつとばかり意地悪をしただけのことだった。

山添はまずは、野田に会いにいつた。野田は「ようやく告白したのかい。高校生じゃあるまいし、やれやれだよ」といつて、部屋を替わることを二つ返事ですつ解した。

岩木と渡辺も「そりゃよかった。盛大な祝言をあげてやらなかきやな。特に鯉ちゃんにとっては初めてだからな」といつて笑つた。

山添は一晩、二人をじらしてから、部屋は確保できることを伝えた。

「結婚式はどうしますか？」と尋ねた。鯉沼は「そんなこつぱずかしいことだねえ」とためらっているが、横で光山は「せめて写真だけでも」と小声でいった。「それじゃ、おふたりとも一刻も早く一緒に暮らしたいでしょうから……。三日後の大安にしましょう。いいですね。苑の皆さんには当日まで内緒にして、びつくりさせましょう」と山添はいった。

その言葉に職員が下をむいて笑いをかみ殺していることにも気がつかずに、ふたりは「なにからなにまでご面倒をかけてすみませんが、よろしく願います」と頭を下げ、手をつないで出ていった。

にわかに苑が賑やかにうきうきとした雰囲気包まれた。

「まったく、どこが内緒なんだか。みんな知っているんじゃないですか、山添さんも人が悪い」

二人と入れ違いに、披露宴のメニューを考えてもってきた加藤がいう。

「まあ、いいじゃないの。あんまりふたりが幸せそうだから、ちよつと嫉妬した

のさ」

「山添さんも、嫁さんが欲しくなったんじゃないのお？ 西川さんなんかどうだい。俺の見たところ、西川さんもまんざらじゃないようにおもうんだが」

「加藤さん、冗談はよしてください」

「へへ、こりゃ失礼。ところで、あのふたり籍はどうするの？」

「いれないといってた。いまさらそんなものにこだわっても意味がないということみたいです。鯉沼さんに身よりはいないし、光山さんも子どもがいなかったから、文句をいう人はいないんだけどね」

＊

鯉沼と光山の祝言の当日、山添と西川は付き添い人として写真館に付き合った。二人が出て行くのを見計らって、苑では、職員と入苑者が総出で、披露宴会場の準備に取りかかった。

鯉沼はタキシードに、光山はウェディングドレスに着替えて、写真を撮った。光山は一人の写真を撮りながら「山添さん、わたしの遺影にはこの写真使ってね」

と行ってよこした。

撮影が終わったふたりが着替えようとするのを無理やりに引きとめ、そのまま苑に帰って入苑者に披露すると山添がいった。

鯉沼はいやがったが、光山に「みなさんにもけじめつけなくちゃ」といわれて、したがった。

苑についた鯉沼と光山は度肝を抜かれた。赤じゅうたんがエントランスから苑内に敷かれている。その両脇には、入苑者がめかしこんで並んでいる。

「いよ、色男」「みっちゃんきれいよ」という声がかかるなか、二人は苑に入った。

食堂につくられたひな壇に鯉沼と光山が着席した。

「それではながらくお待たせいたしました。これより、鯉沼卓也、光山貴子御両名の結婚披露宴を開催いたします。まず、お仲人さんの松島様より一言おねがいいたします」。司会は今回も大野健次郎が務めている。

「えー、ご指名に預かりました、松島です。死にぞこないのわたくしが、かよう

なめでたい席の末席を汚してよいのかわかりませんが、山添さんにお聞きしたところ、余命幾ばくもないわたくしの存在が、お二人に結婚を決意させたとか。わたくしとしては、複雑な気持ちではありますが、人様に迷惑ばかりかけてきたわたしの最後の役割がこのような幸せなものをうみだすこととなったことなにもかえがたい名誉であります。すばらしい、冥土の土産をいただいた気分です。お二人にはわたしの分まで幸せになっていただきたいと思います。本日は、本当におめでとうございます」

拍手が沸いた。

「松島様ありがとうございます。それでは、つづきまして、乾杯の音頭を野田清子さまにお願いしたいと存じます」

野田はヨッコラショといいながら、前にでてきた。

「みなさんもお存知のように、この二人、ようやく観念しました。みっちゃん、あんたのあのときの声、もうすこし、小さくしなよ、寝られしない」

会場から笑い声が起こった、入苑者の田中真樹子が「鯉ちゃん、そんなに激し

いのかい。ときどき、わたしにも貸しておくれよ、みっちゃん」という野次を光山にとばした。光山がまじめな顔して「ダメ」といったので、またまた笑いに包まれた。

田中の隣にいた松島が「俺じゃダメかい」と聞いた。田中は一瞬、ことばにまつまったが「まあ、贅沢いつている場合じゃないよね」といって、松島の首に腕を回し、大きな音を立ててほったに口付けをしたので、わぁーという歓声がおこった。

乾杯に続いて、加藤が腕を振るった料理が続々と出てきた。料理の合間に、一芸を持つものが披露する。山添はマイウエイのメロディーにのせて経を読んでみせて喝采を浴びた。にぎやかにはなやかに晩秋の夕暮れを迎えた。

鯉沼と光山は、山添の計らいで、温泉街のホテルに新婚旅行に出かけた。

「初夜だからってがんばりすぎんなよ、年なんだから」「新妻なんだから、あんまり大きな声だしちゃダメよ」「鯉ちゃんも初婚なんだから、腰を使いすぎちゃダメだぞ」と冷やかしながら、二人を見送ってからも、宴会は続いた。

翌日の昼過ぎに帰ってきたふたりは、再び冷やかしの声に迎えられて、新居に入った。

この日を境に西行苑の空気がすこしとろけた感じがした。二人の結婚は、西行苑に生活感をすっかりとうえつけることに役だったようだ。

いっぽうで、罪作りな面もあった。二人に刺激されて、老いらくの恋志願者が急増したのだ。松島は披露宴での冗談からこまが出て、田中真樹子と仲良くやっている。ほかのものにも、温泉街のソーブランドへ通う男性や、ホストクラブに出かける女性が出現した。

職員の間からは、いかがなものかという声も出たが、「積極的な」行為である以上止める理由もなく、そのうち収束するだろうということで放置することにした。もっとも、甥っ子と称して、ホストを部屋に呼びこんだ富田美佐は嚴重注意を受けた。

良くも悪くも若々しい雰囲気の中かで、西行苑は年末を迎え、正月がまぢかに迫っていた。松島は小康状態をたもち、医者のいった最低ラインをクリアしそうに見えた。

松飾りをつけ、鏡餅をそそなえ、女性たちは厨房に入り加藤といっしょにおせち料理を作った。大掃除もすみ、大晦日はみんなで紅白歌合戦をみた。

除夜の鐘がテレビの中から響き始めたころ、とつぜん花火が食堂の窓いっぱい開いた。

温泉街が客寄せのためにはじめたカウントダウン花火だった。鐘にあわせて一〇八発の花火が打ち上げられ、最後は乱れ打ちになるという。

職員は照明を落とし、花火が見やすいようにした。

鯉沼と光山夫妻は肩を並べ、松島と田中も手を重ねあっていた。ほかのものも職員と並んだり、杯を交わしながら、魅入っていた。

健次郎は花火を見ながら思った。ヤクザを止めて良かったのか——と。今の生活はヤクザにくらべれば、楽だった。やくざのときは二四時間勤務だった。それ

はいまもかわらないが、夜中の電話で喧嘩の助っ人に借り出される事もなければ、兄貴分のまえで、阻喪がないようにぴりぴりしている緊張感がなくなった。当時は、それが当然だと思っていた。しかし、けっして気分のよいものではなかった。あのころに戻りたいか——と聞かれたら、嫌だというだろう。花火から目はずし室内を見まわした。岩木が杯を掲げてみせた。健次郎は会釈を返した。それに、今の自分には、西行苑の人たちがいる。この人たちを残して、行けるわけがないじゃないか。

「苑長、ご苦勞様でした。こういっては失礼ですが、最初は経験も知識もないのに、だいじょうぶなのかと不安に思いました。でも、こうして、みんなそろって無事に年を越せたのは苑長のおかげです。尊敬しちゃいます。私だけじゃなくて、若い子達も同じ気持ちだと思いますよ」

西川の色白の顔が花火に染まっている。

「いえ、西川さんには教えられる事ばかりで。西川さんこそ、逃げ出したくなかったんじゃないですか」

「ここで暮らしている人は逃げる事ができないんですよ。私だけ逃げるわけじゃないじゃないですか。それとも、苑長は、わたしが邪魔ですか」

山添がくちごもっている、前に座っていた鯉沼が振り返っていった。

「ああ、じれったいくどき文句だね。苑長それでも口説いているつもりかい」
「口説くって、だれをですか」

「あーしらばっくれちゃって。誰をって、西川さんに決まっているじゃない」
「わたしは、くどいてなんかいませんよ」

「これだからやぼは嫌だよ。男と女が尊敬しているだの、教えられるだの言うのは、好きです惚れてると同じ意味なの。な、おみっちゃん」

鯉沼さんこそ、男と女の間には、惚れたはれたしかないと勘違いしているんじゃないですか、と山添が言おうとしたとき、光山が鯉沼の耳たぶを引っ張って前を向かせた。

「よけいなことって、先生たちのお話しを邪魔すんじゃないよ。恥ずかしい」
「いてーな、なにすんだよ。じれってーから、手助けしてやろ——ふがががが」

ついに、鯉沼の口は、光山の手でふさがれてしまった。山添は光山も誤解しているのかもしれないと思った。苦笑いしながら西川を見ると、彼女は、椅子の座面に両手を置いて前かがみになって、足をぶらぶらさせながら、まっすぐに花火をみていた。

みんなてんでに数え始めたので、九〇を越えたあたりで、ちょっと間があくと「おめでとう」という声が上がっては不発に終わった。山添は地元のケールブルテレビをつけて確認し、「あと三つで一〇八ですよ、みなさん」と教えてやると、みんな「3、2、1」と数えて、連発がはじまると、「あけましておめでとう」という声があがった。

＊

西行苑初めての正月は、穏やかに明けたものの、ながくは続かなかった。

晦日は遅くまでおきていたので、元旦はブランチとなった。もちろん、おせち料理がならび、雑煮もふるまわれた。雑煮はのどに詰まらせないようと、加藤が、もちを小さく切ったのだが、これがかえって逆効果となってしまうた。

渡辺がとつぜん咽始めた。対面にすわっていた岩木が、「なに、がつついてんだ」と声をかけた。渡辺の隣に座っていた志水伸江が背中を叩くが、渡辺は白目をむいて気絶してしまった。

「たいへんだよ！ 渡辺さんが餅をのどに詰まらせた」

伸江の声に職員が駆けつけた。口をあけ、もちを取り出そうとするが届かない。顔はみるみるまにどす黒くなってきた。

「救急車！」という鋭い声上がる。職員は渡辺を床に寝かせ、人工呼吸をはじめた。しかし、もちが気道をふさいでいて、空気が肺にまで届かない。「渡辺さん！」「死ぬんじゃないよ」と、入苑者が声を掛けるが、渡辺の命は風前の灯のように見えた。

「救急車よびました」

「バキューム持ってきて！ それから、だれかストッキングを貸して！ 早く！」
西川が声を上げる。職員が走りだす。

こういうときは、街から離れて建っているロケーションが恨めしい。

西川の指示で、職員は床に寝かせていた渡辺をテーブルの上にあげた。

「足のほうを持ち上げて。ずり落ちないように体を押さえていてね」

職員がバキュームを持ってきた。受け取った西川は、細いノズルの先にストッキングをかぶせると、渡辺の口に突っ込んだ。渡辺はびくつとしたが、呼吸は戻らない。西川はノズルの先で必死に喉を探る。一五秒が一時間にも感じるほどの長い時間が経って、「ジューボ」という音とともに餅がとれた。

西川が「やった」と小さな声を上げた。それを合図にするように周りを囲んでいたみんなが「よかったあ」と安堵の声を上げ、「ふうー」というため息がホールを満たした。そこへようやく、救急車のサイレンが聞こえてきた。

「まだ、助かったわけじゃない。ぼやぼやしてないで、テーブルさげて、人工呼吸」

緩みかけた緊張感を引き締める西川の鋭い声に、大野が二回ほど息を吹き込むと、強烈に咳き込みながら渡辺は呼吸をはじめた。が、意識はまだ戻らない。

そこへ、救急隊員がかけこんできた。西川が付き添いで病院に向かった。

めでたい正月が一転して、重苦しい雰囲気になってしまった。みな、おせちもそこそこに、部屋に引き上げていった。

正月だと想っていたのが、急にお盆が来たような雰囲気になってしまった。食堂のスピーカーから正月の音楽が虚しく流れていた。地元町会が気を利かせて回ってきてくれた獅子舞いも帰ってもらう羽目になった。

二時間後、渡辺の意識が戻ったという連絡が病院の西川から入った。山添は、緊急時以外は使わない苑内放送で、渡辺の回復をみんなに伝えた。それを聞いた入苑者は食堂にでてきて、「よかったよかった」と口々に話し合った。

山添もやれやれと胸をなでおろした。年寄りばかりなのだから、亡くなる人間が出てもおかしくはないが、事故死は願い下げだった。正月が戻ってきた。「おとそのやりなおしだ」と飲み始めるものもでてきた。

＊

正月二日目にはみんなで、初詣でに出かけた。午後になると、親類や組関係者が、挨拶にやってきた。

白藤八重のところにも組の若いものが挨拶にきた。

「姐さん、これ、組長からのお年玉です」

「あら、ありがとうございます。うれしいね。ちょっとおまち」

白藤は後ろに振り返ると、いま、若い衆が持ってきた袋を包み返し「はい、これはあたしからのお年玉」といって、若い衆に渡した。

「ありがとうございます。頂戴します」

「どっちみち、使いのついでに、彼女でもつれてきていて、温泉にはいってよろしくやろうって算段なんだろう。彼女に美味しいものでもたばさせておあげな」
「へへ、凶星です」。頭を搔きながらそういうと、男は部屋の入口に向かって声をかけた。

「おい、おまえも、こっちへきて、先代の姐さんにあいさつしないか。ちっ、しつけのなっていない女で」

おずおずと室内をうかがうように女が入ってきた。

椿を裾にちらした和服を着た女の姿に白藤は凍りついた。

「姐さん、どうしたんで？ お加減でも」

「ん、ううん。なんでもないよ。あんたにはもったいないほどの別嬪さんから、びつくりしただけさ」

女は白藤の世辞には反応してクイと顎をさげた。

「おまえ、あけましておめでとうございますぐらいいえねえか」と、若いものは女の頭をどやしつけた。

「いいのよ、いいの。その娘さんには関係ないことなんだから。さあ、はやく、遊びにつれていっておあげなさい」

二人を車椅子で部屋から追い立てるように、玄関まで送っていく。

「組長によろしくね」

「へい」

二人が見えなくなると、白藤は部屋にもどった。夕食の時間になっても出てこないで心配した紀子が部屋を覗くと、照明もつけず薄暗い部屋のなかで、白藤は泣いていた。

「どうなさったんですか」

「つらいわ、紀子さん」

「どこか痛むんですか」

「ううん、ちがうのよ。今日、見舞い客がきたでしょう」

「ええ、すごい美人を連れた人」

「そう。あの娘さんが着ていた和服ね、わたしのなの。もちろん、あの娘さんはそんなこと知らないんでしょうね。それにあの若いのも。きつと、だれかがもちだして、回りまわってあの娘の手に渡ったんでしょう。悔しいわね。あの服ね、先代と初めて結ばれた日に着ていたものなのよ。ちょうど今日の娘さんぐらいの年頃よ。その後も、つらいことがあるとあれを身につけて、乗り越えてきたの」
その後は声にならなかった。

紀子はことばを失った。しばらくして「御食事にいきませんか」としかいえない自分が、ふがいなかった。

白藤は紀子の誘いに応じて、泣きはらした目を薄化粧で隠し、食堂に向かった。

食堂には、白藤の気分とは正反對にまだ、正月の雰囲気満ちていた。きょうは、入苑者の中で琴と三味線、尺八ができるものが演奏をしてくれている。合奏には力量の差がありすぎて無理があったものの、独奏はなかなか聞かせ、正月の定番曲が流れる中、みな食事を済ませた。

白藤は箸が進まないようだったが、紀子に促され、かろうじてすべての皿に手をつけ、部屋に戻った。

「お風呂はいかがなされます」

「そうね、あなたのお仕事が一段落したら声をかけてくださる。今日は初詣に行って疲れたし、いろいろとあって、肩がこっちゃった。すこし体を温めないと寝られそうにない」と苦笑してみせた。

紀子が事務所に戻ると、山添が声をかけてきた。

「白藤さんどうしたの、元気がなかったけど」

紀子は今日の出来事を話した。

「そういうことがあったのか。かなりショックだったろうな」

「ええ。病気で倒れて寝ている間に勝手に持ち出された服を、ある日突然、見ず知らずの人が着て目の前に現れるんですからね。思い出が詰った服。でも、その思い出までは受け継いでくれないでしょう。思い出をどっかに落としてきちちゃった、抜け殻が出現するんですもの、むなしいと思います」

「ぼくはものと思い出を持たないほうだから、その辺はじつはよくわからないんだ。人それぞれなんだろうね。とにかく、しばらく気をつけてあげてね。落ち込みすぎて風邪でもひかれると大変だから」

「わかりました」

紀子は、夜勤への引き継ぎノートを記載すると、白藤の部屋に戻った。白藤は、煌煌と明かりをつけた室内で暗くて何も見えない窓を見つめていた。

「白藤さん、きょうはお部屋のお風呂になさいますか、それとも浴場にいかれますか」

「そうね。やっぱり広いお風呂にしようかしら」

振りかえった白藤の目に涙がなかったことに、紀子すこしほっとした。

「わかりました」

西行苑の職員の常として、紀子も素っ裸になって風呂に入った。背中を流すと、めずらしく白藤が「紀子さんの背中も流してあげる」といつてきた。はじめてのことだ。ためらっていると、「いいじゃないの、いつもお世話になっているんだからお正月ぐらい。さあ」

紀子が恐縮しながら背中を向けると「まあ、洗いのある背中ね」と、ぽんとたたいてから、洗い始めた。やさしいともすれぱくすぐったいような洗い方だった。そして、洗いながらなんども「ありがとう」と繰り返すのだった。

風呂から上がり、バスローブ姿で部屋に戻った。

「今日のお寝巻きはこれですか」

紀子はベッドに綺麗にたたんでおいてあった着物を手にした。

「あら、これ白装束みたいですね」

「あら、面白いこというのね。それ、先代に買ってもらったんけど、あの人、気前はいいど見立てが下手だね。あんまり気に入らなかったのよ。だから、染めな

おそうと思って、そのままになっていたの。絹だし、肌触りもいいし、よく見ると地模様があるのよ」

紀子が部屋のあかりにすかすようにして見ると、たしかに白藤のいうように、波の模様が浮き上がった。

「へえ、絹の寝巻きですか、豪華ですね。絹なんて、わたしハンカチぐらいしか持っていない。あ、今日は初夢の日だから、いい夢見られますよ」

「そういえばそうね」

寝巻きというには豪華すぎる着物を着せ、髪を梳かしてから部屋を後にした。白藤は出ていく紀子に「ありがとう」といってよこした。

紀子は、やっぱりちよつと気弱になっているなあと考えた。しかし、この夜が白藤との最後の夜になるとは、思いもよらなかった。

翌朝、白藤は自室の風呂で死んでいるのを発見された。浴槽に入り、ひざを縛り、ふたを閉めて、手首を切っていた。流れ出た血が白装束に赤い花を咲かせていた。紀子は雪椿のようだと思った。

ベッドに遺書がふたつあった。

一つは身元引受人に対するもので、もう一つは山添に対するものだった。山添は封を切った。感謝の言葉が書き連ねてあり、迷惑をかけることをわびる言葉で結んであった。遺言を顧問弁護士に預けてあるので、組長と弁護士を呼び、苑のみんなの前で開いてほしいと書いてあった。

山添は、警察に連絡し、身元引受人にも連絡した。

警察はすぐにやってきた。検視をし、遺体が運び出されていくところに身元引受人がきた。

山添は不始末を素直にわびた。そして、前夜の出来事を話した。遺書のことも伝えた。

中田という名の組長は「面倒をおかけしますが、よろしく願います。遺言の件は弁護士に確認して改めて連絡します。遺体に戻ってきたら連絡をください」と、温泉街のホテルの電話番号をいい残して引き上げた。

白藤の亡骸は、その日の夕方に苑に帰ってきた。

山添は、一人ずつ白藤と別れをさせた。同じ苑内に生活しているのだから、なにもぞろぞろと部屋の前に並ぶ事もないだろうとおもったこともあるが、だれかが取り乱し、それが伝染することを避けたかった。

白藤は、良し悪しは別として自分の始末を自分でつけた。そんな彼女に対して、みんながよってたかって、「ささつと自分だけ逝くなんて卑怯だ」とか、「なんで死んじゃうんだ。死ぬことないじゃないか」などと言うことを死んだ白藤も快く思わないだろう。

逆に、みごとに散りぎわだと言うものがないとも困ることもあった。生きていることにさえ、一種の不安を持っている人々に、死に方に対する不安を持たせるのは負担だろうと思ったのだ。

最後に焼香した山添は「これでよかったでしょうか。死なれるときにそばにいてあげることができずに、もうしわけありませんでした」と声をかけた。

中田は、入苑者たちが線香をあげ終わったころ、弁護士を伴ってやってきた。みなを食堂に集め、遺言が開かれた。

はじめは形見わけの指示で終始し、紀子には、入苑当初に約束されたスーツと、それに似合いのイヤリングが残された。

残された若干の現金はすべて、苑に寄付するという指示だった。葬式は西行苑のほうに異論がないのであれば、苑から出して欲しいとあった。また、骨は、半分を苑の庭にある椿の根元に埋め、残りを先代と一緒に墓に埋葬して欲しいと結んであった。引きうけ人もこれを了解し、遺言は終わった

＊

三が日が開けたうらかな冬晴れの日、白藤の葬儀は行われた。エントランスに設けられた祭壇の前に座った山添の師新井文慧の読経のなか、参列者が焼香をしている。職員の多くは、苑の最初の葬式は、松島だと確信していたから、白藤の突然の死に呆然としていた。

紀子は白藤にもらったスーツを着て参列した。似つかわしくない色だったが、白藤が喜んでくれると、確信していた。自分は、このスーツを着るたびに、見るたびに、白藤の事を思い出すだろう。代わりに、紀子は大事にしていた犬のぬい

ぐるみを棺の中にいれた。思いでの交換だ。人生の最後でほんの少しの間、彼女の視界でよろちよろしていた自分の事を、白藤にあの世で思い出してかった。白藤が自殺する前夜何度も繰り返した「ありがとう」と、風呂で紀子の背中を洗ってくれた手の感触が思い出されて、涙が止まらなかった。

泣きながら紀子は白藤の葬式が、ものごころついてからはじめての葬式だということにきがついた。生まれた時には、祖父母のほとんどはなくなっており、唯一人元気でいたばあちゃんは、五歳のころ死んだ。しかし、子供は邪魔だからといって、近所の人に預けられ、葬式には出してもらえなかった。ニコニコして優しかった、そして、ほんのすこしかび臭く、時折、シップのにおいがするばあちゃんを、紀子は嫌いじゃなかった。でも、さよならもいわせてもらえないなんて、子供心に、変だと思ったものだ。その後成長してからも、おじやおばが死んだが、ぐれて「変わり果てた」紀子を葬式に出すのはみつともないとの理由で、いちども出たことがない。

紀子は、さよならをいえなかった死んだばあちゃんのぶんまで、手を合わせた。

正月に白藤のところに使いでやってきた若者は顔を腫らして参列していた。知らなかったとはいえ、白藤が死ぬきっかけを与えたことは事実だったから、そのことを責められたのだろう。連れの女のほうはきていなかった。火葬場には入院中の渡辺を除いて全員が向かった。途中、霊柩車は渡辺が入院する病院の前を通った。渡辺は付き添いの職員に伴なわれて、病院前にでてきて見送った。

白藤は小さな骨壺に入って苑に帰ってきた。

＊

葬儀の夜、苑内は急に寂しがりやが増えた。鯉沼と光山をうらやましがる声があり、職員に「寝入るまでそばにいておくれ」と懇願するものが増えた。松島と田中はこの夜、はじめて同衾した。

岩木は食堂に安置された白藤の骨壺の前で山添と酒を飲んでいた。

「ここへきてからずっと考えているんだが、人間てのは、死ぬのがこんなにも難しいもんだとおもわなかった。生き方は教えてくれるだろう。子供のころからさ。でも、死に方は誰も教えてくれないんだよな。なんでなんだろうか。なにも、

自殺のしかたを教えろというんじゃない。生きることの先には死がある、それをさ、ちゃんと教えてくれないとね」

岩木は苦い葉を飲むように杯を空けると、山添の杯と自分の杯に酒を注いで、続けた。

「終わり良ければすべて良しとかさ、大往生だったとかいうけどさ、どうしたらそうなるのかなんて、だれも教えてくれない。わたしだけじゃないと思うよ、孤独の中でどう死ぬかなんて考えているのはさ。時々眠れないことがあるよ」

「そうですね。死ぬまでの時間を良く生きろとはいいますが、良く死ぬとは教えませんね」

「そうだろう。白藤さんの悔しさはここにいるみんなの気持ちだよな。歳をとるということとはさ、朝起きるたんびに、昨日までできたことができなくなっていることを確認する作業なんだよ。そんなつらい思いをしている人間に向かってさ、がんばって長生きしてねなんて言葉は酷だよな。皮を剥かれるように、心の中で血を流しながら、ひとつひとつあきらめようとしているのにさ、横からきたやつ

が、ひよいと搔つ攫つていつてしまう。それは、明日あきらめようと思っていたんだなんてことおかまいなしさ。それでいて、長生きしてねとくる。たまんないよ。わたしもさ、跡目を譲ってから最高顧問になったけど、自分が育ててきたものが目のまえにあるとね、そうそう簡単にはあきらめられないよ。だから、ここに来たんだ。それでも、まだまだどうして」

「そうはみえませんが」

「マグマはさ、そう簡単には冷えないよ。表面は冷えて黒くなっているように見えても、芯のほうはどろどろと熱いまんまさ」

＊

松が取れた日、守衛の森下と紀子が大島椿の根元に穴を掘り、白藤を埋葬した。固いつぼみがもう少しで開きかけていた。

＊

苑に生還したのもいた。餅をのどに詰まらせた渡辺一美が、一月中旬に帰ってきた。

みんなに冷やかされながらもうれしそうだった。みんなも、生きて帰ってきたことに安心していた。渡辺は、白藤の眠る椿に手を合わせた。

＊

「ああ。極楽極楽つとくりゃ」

退院した夜、渡辺は、岩木と露天風呂にはいつていた。

「渡辺さんよ、おれたちは極楽にはいけめえ」

「ごもつとも。極楽といえ、死にかけているときに変な夢をみたぜ。どうわけか、というか当然のようにさ、閻魔さまが現れたのよ。でね、閻公とダチになって、杯交わしたところまでは良かったんだ。ところがさ地獄の酒、たしかね、仏心とかいうふざけた名前の酒だったけどさ、それがあわなかったのか、悪酔いしちゃってさ、暴れてちゃったのよ。鬼の金棒搔っ攫って振り回して餓鬼を殴り倒すは、釜茹での釜をひっくり返して、そばにいた青鬼に熱湯浴びせて火傷させて赤鬼にしちまうし、閻魔さんのひげを三つ編みになんかしちゃってさ。とうとう破門されちゃった。でていけ、といわれてさ、とぼとぼ歩いてたら、声が聞こえ

てね。そっちに歩いていったら、女の顔が見えた。おれは観音様かとおもったらよ、西川さんだった。とんでもねえ勘違いさ。お笑い種よ。入院中は、あれはだめ、これもだめ、これは食べなさいと、母親みたいにうるさくてさ。ありや本物の鬼だった」

「はは、閻魔様と杯交わすとは、剛毅じゃねか。たいしたもんだ。そのあとのことはとんだ災難だったが」

渡辺の話に微笑んだのか、湯気の向こうで、白藤が眠る椿の花がフクフクと咲き始めていた。

(完)

この話はフィクションです。

執筆に際しては、以下の資料を参照させていただきました。(順不同)

坂本敏夫『元刑務官が語る刑務所』 三一書房 一九九七年

加太こうじ『新版・日本のヤクザ』 大和書房 一九九三年

週刊大衆特別編集 山平重樹監修『ヤクザ大辞典 Vol.3』 双葉社 一九九八年

ヤコブ・ラズ著 高井宏子訳『ヤクザの文化人類学——ウラから見た日本——』 岩波書店 一九九六年

宮内博一『老人ホームで暮らすということ』『老親老子時代をどう生きるか』 海竜社 一九九五年

森岡正博『電脳福祉論』 学苑社 一九九四年

クロード・オリヴェンシュタイン著 鳥取絹子訳『老いのレッスン』 紀伊國屋書店 一九九九年

朝倉喬司他著『実録 ヤクザという生き方』 宝島社 二〇〇〇年

日比野正己『図解 バリア・フリー百科』 ティビーエス・ブリタニカ 一九九九年

井上勝也監修 荒木乳根子他編『事例集』高齢者のケア⑥性と愛——セクシュアリティ』 中央法規出版 一九九五年

小林昭幸『熟年性革命報告』 文藝春秋 二〇〇〇年

神居文彰 田宮仁 長谷川匡俊 藤腹明子著『臨終行儀——日本的ターミナル・ケアの原点』 北辰堂 一九九三年

老人ホーム 西行苑

2001 年 6 月 17 日 初版発行

2001 年 11 月 7 日 改訂新版

著者 ぶんろく

発行 **Bunroku's Factory**

©Bunroku 2001